

1	ノロの惑星	1
2	ウサギ	11
3	首都	31
4	ウサギの結婚	45
5	サンタクロース	53
6	安定	63
7	ダブル大統領	77
8	神々の宝物	89
9	黒くて薄い板	95
10	ノロの方舟	113
11	生命永遠保持手術の開発	127
12	暴走	137
13	譲歩	151
14	役者	161
15	御陵	175
16	キャミ	187
17	豊臣自動車工業	197

18	生命永遠保持機構の誕生	211
19	意外な抵抗の芽生え	225
20	博物館の消滅	243
21	永久元年	263

1 ノロの惑星

ある青い惑星の周りを宇宙戦艦が回り始めて一月以上たった。ハヤブサは何百回と惑星と宇宙戦艦を往復している。ハヤブサは単なる宇宙戦闘機ではなかった。むしろ優秀な惑星探査機だった。あらゆるサンプルやデータを根気強く採取しては持ち帰った。サブマリン一〇一〇一〇もハヤブサでは収集できない大きなサンプルを持ち帰った。もちろん陣頭指揮を取るのはノロだ。

メガネの奥で細い目をより細くして、しかも目尻を下げてニタツとするノロにイリは恐怖感さえ感じる。

——狂ったのかも

イリは仕方なく加藤に耳打ちする。その加藤もハヤブサ戦闘網を率いて忙しい。

「イリ。あのままではいつ倒れるか分からない。私の分の食糧を削っても『腹減った』とわめきだしたら無理矢理でも食わせるんだ」

「食事は用意しているのよ。でも食べないの。それどころか水も飲まない」

「必死に分析している。それだけこの星は魅力的なんだ」

「加藤。なんとかするわ。心配掛けてごめんなさいね」

1 ノロの惑星

イリは裏腹な言葉を出す。

「ノロの指示どおり仕事を続けて」

「分かりました」

「やったあ！」

ノロが大声をあげるとイリがノロの手を握る。

「結果は？よかったのね」

「飯だ！飯を食うぞ」

「ご飯はないわ」

「何でもいい。たらふく食うぞ」

ノロの目の前に保存食が山積みされる。

「これで我慢してね」

「えー！握り飯はないのか」

榊がノロに近づく。

「握り飯は俺が何とかしよう。その前にこの惑星はノロのメガネに変わったのか、教えてくれ」

ノロがズレたメガネをかけ直すと大声を上げる。

*

1 ノロの惑星

「大当たりだ！」

「地球型の星を見つけるのは宝くじの一等を当てるよりむずかしいはずだ」

「トリプル・テンのお導きだ」

「ノロらしくないわ」

「今はよく分からないが、前にも言ったようにダーク一族、つまりこの宇宙のほとんどを占めるダークマター、ダークエネルギーのいずれかの一形態がトリプル・テンだ」

いやというほど聞かされていたので誰もが頷く。

「そのトリプル・テンに包まれたサブマリン一〇一〇一〇がこの星の時空間座標を割り出した。そして俺は時空間移動装置で確かめに行ったら、この星があった」

ノロと同行したイリが引き継ぐ。

「時空間移動装置に分析器は積めないけれど、ノロはモニタースクープを使ってある方向を熱心に観察したわ。そして私に口を横に開いて笑ったの。モニターを覗くと青い星が見えた」

いずれにしてもふたりは第二の地球に巡りあったのだ。

「それじゃ、地球に行って握り飯を盗んでくる」

榊がサブマリン一〇一〇一〇に向かうために部屋を出ようとする。

「盗む？」

「俺たちは宇宙海賊だ。必要な物は盗む」

「そうか！頼むぞ」

*

時空間移動装置でノロとイリ、それに宇宙海賊たちが第二の地球に降り立つ。そこは森と草原の切れ目にある池の畔だった。水はあくまでも透明で異星人のノロたちにもそのまま飲めそうだ。海賊たちはサンプル採集のために様々な道具を持って森に向かう。

「この星の名前は決まりね」

「？」

「ノロの惑星」

一応宇宙服をまとうているが、まったく違和感がない。

「分析すればするほど地球にそっくりだ」

ノロが呼吸器を外して空気を吸いこむ。イリも呼吸器を外す。

「少し息苦しいわ」

「酸素が少ないのだ」

すぐに呼吸器をつけるとお互いの声が再びくぐもる。

「用心して機材を降ろさなければ、この星の生態系を乱すことになる。場合によってはこちらが消滅するかもしれない」

「地球でも感染症が蔓延しているわ」

1 ノロの惑星

「ウイルスや細菌を軽く扱うからだ」

「そうね。彼らは人間の祖先だから大事に扱わなければならないのね」

「イリの言うとおりだ。この星を地球に似た環境にするには慎重の上にも慎重を期さなければ」

「でも楽しみだわ。この星の未来が」

ノロが両手を握るとボキボキと音をたてる。

「やりたいことが一杯ある。何から始めたらいいのか分からないぐらいに」

「まずは？」

「この星のウイルスや細菌の研究だ。彼らがこの先のすべての行動を律することになる」

「グレーデッドには多才な人間が数多くいるわ」

「よくぞ一緒に来てくれたものだ」

「当然よ。ノロという強力な磁石から逃れる人間なんていないわ」

「俺は男前だが、磁石だとは知らなかった」

イリがノロに密着する。しかし、イリを押し分けると宇宙海賊に近づく。

「引っ付かない」

「もう！」

ノロにとつて幸いだったのは宇宙服を着ていたことだった。

1 ノロの惑星

「昆虫採集に行くぞ」

どこで手に入れたのかノロが網と籠を持って森に向かって走り出す。

「待って」

ノロを追いかけて一緒に森の中に入ってしばらくすると、イリの顔にこぶし大の黒いものがぶつかる。

「痛い！」

倒れかけるイリの頭にすかさずノロが網を掛ける。

「何をするの！」

「わあ！でかいコガネ虫！」

ノロは器用にコガネ虫を籠に入れると大声をあげる。

「こんな迫力あるコガネ虫、見たことない！」

倒れたイリを起こそうともせずにノロは虫かごをのぞく。

「ノロ」

しかし、ノロは「わーい、わーい」と歓声を上げながら森の中に進む。

「思ったとおりで。次はクワガタだ！」

*

「採集は？」

1 ノロの惑星

宇宙戦艦に戻ったノロが加藤に箆を差し出す。

「大成功！これを見てくれ」

「でかいな！地球のクワガタとよく似ている」

加藤がまじまじと箆を覗き込む。

「この星は地球より少し大きい。だからという訳でもないんだろうが、とにかく、でかいだろ」

「もし地球と同じように進化すれば最後は四、五メートルの人類が生まれるのかなあ」

そこに顔を包帯で巻いたイリが現れる。

「私よりコガネ虫やクワガタが大事なんて許せない！」

「これは貴重な大発見なんだ」

「少しは心配してくれたら！」

イリの平手がノロの頬を捉える。そのとき艦橋に警報が鳴り響くと加藤が天井の浮遊透過スクリーンを見つめる。

「榊が戻ってきた」

頬を押さえながらノロもスクリーンを見上げると忽然とサブマリン一〇一〇一〇の勇姿が現れる。

「わーい。握り飯にありつけるぞ」

二発目の平手が飛ぶ。

*

サブマリナー〇一〇一の司令所でノロは次々とおにぎりを口にしながら榊の報告を聞く。

「このようにサブマリナー〇一〇一なら何でも盗める。だが積める量がしれている」

榊が報告から感想に変える。

「ましてや、地球の生物を一組ずつ積み込むには巨大な宇宙船が必要だし、それなりの内装も必要だ」

「お茶」

やっとノロが声をあげる。

1 ノロの惑星
「我々は万人程度しかいない。資材の運搬に何回も月基地とこの星を往復しなければならなかった。サブマリナー〇一〇一より大量に積める宇宙戦艦でも積載量はしれている」

まだ機嫌が悪いイリからお茶を受け取るとノロは一気に飲む。

「アツツ！」

ノロがお茶を吹きだすとイリが大笑いする。

「ノロちゃん。お茶はフーフーしながら飲むものよ」

「先に言ってくれ」

「ノロ。俺の話を知っているのか」

1 ノロの惑星

榊も笑うが、顔は怒っている。

「続けてくれ」

ノロがお茶に息を吹きかける。

「設備もないこの星でどうやって宇宙船を建造するんだ？」

「そんなことを心配していたのか」

お茶を持ったまま艦橋の外に出る。その後を榊やイリがついて行くと大きな建物がいやでも見えてくる。

「これは？」

「いつの間に！」

ノロがお茶をすすりながら胸を張る。

「昔、一夜城と言って一晩で城を造りあげた武将がいた。これは一夜造船所だ」

「信じられない……」

榊が両手で顔をバシバシ叩く。

「……俺は何年ノロと付き合っているのだ。これぐらいの驚きは数えきれないほどあったのに、まだまだ修行が足りん」

「でも驚かなくなったら終わりね」

「いいこと言うな、イリは」

1 ノロの惑星

「誰が造ったの？ノロは昆虫採集ばかりしていたわ」

「元グレーデッドのスタッフは優秀だし作業が早い。それに月基地で造ったロボットも大活躍した」

「えー！」

イリがその場に倒れる。

「驚きすぎるのも問題だなあ」

ノロがひざまずくとイリの額に手を当てる。

2 ウサギ

地球連邦政府自体はなんとか存続している。

「連邦各国の食料品店から食べ物盗まれる事件が続発している」

チェンの元に異常事態の報告が入る。

「実情を調べよう」

チェンが緊急会議を開催すると意外と多数の連邦国家の代表者が参加する。

「食料品店よりコンビニの被害が甚大だ」

日本の代表が口火を切る。

「特におにぎりの被害が多い」

「防犯カメラや監視カメラがあるから犯人は特定できるだろう」

議長が尋ねる。

「それがフワフワとおにぎり店内から勝手に出ていく光景しか映っていない」

2 ウサギ

会議室の大型モニターにその光景が映しだされる。

「まるで透明人間がおにぎりを盗んでいるような感じだ」

「透明人間？」

「確かサブマリン八〇八は透明潜水艦だった」

「いやサブマリン八八八だ」

「どちらでもいい。トリプル・テンが関わっているような気がする」

「人間にトリプル・テンを塗ると透明化するとしても」

「ということはあのノロの仕業か」

「地球を見限って宇宙に行くとか言っていたヤツだな」

「本当は狂言で地球に留まっておにぎりを盗んでいるのかも」

「私ならそんなつまらない物より金とかダイヤモンドを盗む」

「俺なら銭湯に行つて……」

「ここでチェンが割りこむ。」

「本当に宇宙を目指したのなら、今さら地球に戻つておにぎりを盗むなんていう奇妙な事件を起こすはずがない。逆に地球に留まっているのなら、なぜおにぎりを盗む必要性があるんだ？」

「不思議な現象だ」

「別にノロに特定する必要はない。誰でもいい。透明人間になったら先ほどの意見のようにおにぎり以外の物を手に入れようとするだろう。だが盗まれているのは食糧ばかりだ」

チェンの意見に鋭い反論が入る。

「食糧に目を奪われているが、それはカモフラージュで我々が気が付かない物が盗まれているのでは？」

「具体的には？」

しかし、その発言者も首を傾げるだけで黙りこむ。チェンは腕組みをするとポツンと漏らす。「金でもダイヤモンドでもない、何か重要な物とはいったい何なんだろう」

*

「皆さん、大国はグレーデッドの月の秘密基地を攻撃すると豪語していましたが、月に到達したという発表はありませんね。現状はどうなんですか」

チェンが少し茶化しながら話題を変更したとたん各国からの発言が相次ぐ。

「我が国は着々と準備を進めている」

「ほー。どの程度まで進んでいるんだ？」

「それは極秘だ」

同じような発言が続いたあとチェンが尋ねる。

「私は皆さんのなかに、すでに月に行ってもぬけの殻になった秘密基地で採取したトリプル・

2 ウサギ

テンを持ち帰った者がいるのではと思ったのですが、どうでしょうか」

チェンがいたずらっぽく続ける。

「でも『うん』と言えばおむすび泥棒の犯人にされてしまいますね」

少しだけ緊張感がほぐれる。

「正直なところ、月に行くのは簡単だ。しかし、そこに滞在して秘密基地内を探索するのが大変な作業になる。さらにトリプル・テンが発見されたら、地球に持ち帰るのは困難だ」

「一国で無理なら協力すればいいじゃないですか」

チェンが議論を促す。

「それもそうだな」

「大統領の提案はもつともだ」

チェンは手応えを感じる。

「ここは地球連邦政府のもとに各国が協力したほうがいいのでは」

「この不可解な事件究明にはそれが最善の策かもしれない」

「取りあえずこの提案を本国に持ち帰って検討したい」

「しかし、なぜ、おにぎりなんだ？」

「そうだ。おにぎりを盗まれているのは日本だけじゃないか」

「いや、我が中国もだ」

2 ウサギ

*

「大胆にいろんな物を盗んでいるけど気が付いているのかしら」

ノロの惑星の造船所の事務室でイリが心配する。

「しばらくは大丈夫だ。だから時空間移動船の建造を急いでいる」

「しばらくということとは、いづれ気付くということなの？」

「いくらなんでも気付くはずだ」

「どうということ？」

「盗まれているのが分かると恥になるから、隠すんだ」

「そうね！」

「特に俺たちが盗んでいる装置や機材はすべて最高機密レベルの物ばかりだ。担当者も怒られるから上司に報告しないだろうし、上司が知ったところで担当大臣には伝えないだろう。役人にとつて大臣なんて大した存在じゃないからな」

「それに急に消えるから防ぎようがないわ」

「今のうちにバンバン盗むんだ」

「ちよつといいかしら」

「？」

「盗み物リストにスイーツを追加して欲しいの」

2 ウサギ

「それじゃ、歯ブラシも追加する」

「そういえば急に引越したから歯ブラシはもちろんシャンプーも石けんもないわ」

「それは手配済みだ」

「いっそのことスーパ―やコンビニを丸ごと盗めば？」

「結構、イリって大胆なんだなあ」

「長い間、総統をしているからよ」

「いや、元々わがままなんだ」

「えー！わがまま教の教祖に言われたくないわ」

「俺が教祖？」

「加藤がノックもせずに入ってくる。」

「時空間移動船の二番艦の進水式……いえ……とにかく完成しました。どうします？」

「縁起を担ぐのは一番艦だけで……」

「ノロはここで言葉を切って加藤に目配せする。」

「総統。どう致しましょう」

「もう総統はいいわ。飽きちゃった」

「待ってください。急にそんなことを言われても。それにここはノロの惑星です」

「そう言えばそうね」

2 ウサギ

「俺が総統になってもいいけど、選挙をしなければ」

「そんな邪魔くさいこと誰もしないわ」

「そうだな。とにかく地球に向かわせろ」

「分かりました」

*

「今度はケーキが盗まれている」

地球連邦政府での会議の議題がケーキに変わった。チェンが苦笑しながら応ずる。

「それにチョコレート、ドーナツ、アンパンでしょ」

「歯ブラシも」

「月への共同作業の進捗状況は？」

「五〇パーセントを超えました」

「いや三〇パーセントだ」

チェンがやれやれという表情をして議論を戻す。

「おにぎりに始まってチョコレート、ドーナツ、アンパン、歯ブラシ……いずれも重要な食料品や道具ですね」

チェンが会議室を見渡すときつい視線を送る。

「そろそろ何を盗まれたのか、報告してください」

2 ウサギ

「歯磨き粉」

「コーヒー」

「バター。いやマーガリン」

「ついにチェンが立ち上がる。」

「工作機械とか汎用ロボットとかは？」

「そんな物は厳重に管理されているから盗まれるはずがない」

チェンが席に着く。

「部下を信用できますか」

「無礼な！我が国の秘密機器の管理は完璧だ」

「ということは秘密機器をお持ちなのですか？」

「いや、まあ、大げさなものではないが」

「私はノロとわずかな時間ですが、お付き合いしたことがあります。今回のおにぎりに次ぐケーキや歯ブラシはフェイントでしょう。あるいは彼独特のユーモアでしょう」

「宇宙に旅だったのに、なぜ地球に戻って盗みを重ねるのか。誰がそんな話を真に受けませんか？！」

「我々は地球と月を往復するのに苦労していますが、グレーデッドの中国秘密基地上空での戦闘で一〇数機の戦闘機に一万機以上の中国空軍の戦闘機が撃墜されました」

2 ウサギ

ここで中国の代表者が立ち上がるがチェンは無視して続ける。

「今考えればそれは地球と月を自由に往復できる宇宙戦闘機だった」

チェンが目を閉じる。

「確かに」

中国の代表者が頷く。

「巨大な軍艦が空中に浮いていた」

「トリプル・テンがすべてだ」

チェンが目を開ける。

「いくらトリプル・テンを自由に使いこなすことができるとしても、宇宙に飛びだすなんて無謀だと思いませんか？」

「宇宙へ飛びだしたことにして、この地球のどこかに潜んでいるのか！」

「いや、月に留まって地球征服を狙っているのだ」

「ノロはそんな下司な人間ではありません」

チェンが牽制する。

「しかし、グレーデッドは地球征服を狙っていたじゃないか」

チェンは議論がまともな方向に進まないことに苛立ちを覚える。

「地球征服におにぎりやケーキは要らないでしょう。ノロやグレーデッドはすでに新しい地球

型の惑星を手に入れたのかもしれませんが」

「大統領！それは妄想だ」

ついにチェンがテールブルを叩いて立ち上がる。

「地球連邦政府の大統領として命令する。各国は一致団結して月探査に向かう。準備を急げ！」

*

ノロは時空間移動船が完成すると次々と地球に送りこんだ。

2 ウサギ
これまで以上に盗み方が大胆になったので各国は盗まれたことを隠しきれなくなった。盗まれる物の量が一番多かったのは日本だ。それは品質がいいからだ。一度に大量の鉄材や大型のブルドーザーが盗まれることもあった。ドイツもかなりの損害を受けた。

アフリカ諸国などの開発途上国は被害がほとんどなかった。ロシアや中国などの大国では工業製品の盗難はあまりなかったが希少金属が狙われた。食料品に関してはやはり日本の被害が大きかった。

いずれにしても情報が少ないのと犯人がはっきりしないので混乱するばかりだった。想像で事件を説明すれば混乱はより大きくなると考えたチェンや連邦各国は積極的に情報公開しない。「相手が見えないからどうしようもない」

地球連邦政府の大統領執務室で鈴木とチェンが打開策を検討する。

2 ウサギ

「犯人は分かっているのだが、証拠がない」

「盗みは現行犯逮捕でなければならぬからなあ」

「連絡は着かないのか」

チェンが首を横に振って手元の特殊通信機を握る。

「ノロどころかグレーデッド総統のイリとも連絡は取れない」

「地球を離れてすぐに地球型の惑星を発見したのか。仮にそうだとっても地球との距離は想像を絶するぐらい遠いはずだ」

「一瞬にして移動可能な宇宙船を開発したのだろうか」

ふたりは何回も疑問を口にするが、お互い応えることはない。

「まるでSF小説の世界だな」

「でも現実だ」

「すごい人間だな。ノロは」

ここで鈴木が膝をポンと叩く。

「スミスに尋ねたか」

「もちろん」

「どうだった」

「例の笑い声をあげるだけで何も教えてくれない」

2 ウサギ

「そうか」

「ところで月探査作戦が遅々として進まない」

チェンが視線を落とす。

「日本は最大限努力しているし、アメリカ、イギリス、フランスなどは協力的だが、ロシア、中国が積極的ではない」

「情けないことに大統領である私にはそのような情報が入ってこない」

「少し時間をください。これ以上引き伸ばすのなら、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、それに日本だけで月探査に向かうと揺さぶりを掛けてみる」

「……」

*

右往左往しながらもなんとか地球連邦政府として月探査作戦が実行される。いざ地球を飛び立つと不思議なことに宇宙飛行士たちはすぐ打ち解ける。アメリカ人の宇宙飛行士もロシアの宇宙飛行士もまったくわだかまりなく会話を楽しむ。

「月探査作戦が実行に移されてよかったな」

「そのとおり。宇宙飛行士は宇宙を飛んでなんぼの商売だもんな」

「訓練は厳しいが宇宙へ飛びだす意欲は誰にも負けんぞ」

「ノロが宇宙に飛びだしたと聞いたとき、一緒に行きたかった」

2 ウサギ

「ノロは日本人だと聞くが……」

アメリカ人の宇宙飛行士が日本人の宇宙飛行士に尋ねる。

「それがよくわからない。まず名前が日本人的ではない」

「だが、足が短くてメガネを掛けている……いや失礼なことを言ってしまった」

アメリカの宇宙飛行士が頭を下げるとイギリスの宇宙飛行士が発言する。

「おまえもメガネを掛けているし、アメリカ人にしては足が短いじゃないか」

「いやー参ったな。俺は日本人が好きだ」

「そういえば宇宙飛行士は足が短くて小柄な人間が多いな」

「様々な事情があつてそういう者が人選されているらしい」

「本当か？」

「宇宙船に負荷を掛けないような体型の人間が宇宙飛行士としては理想なんだ」

「なるほど。そうだったのか」

ここで全員が大笑いする。

「ところでグレーデッドの総統イリは中国人なんだろ」

笑うと言うより微笑んでいた中国人の宇宙飛行士が応える。

「国籍は中国だが、漢民族ではない。先祖は騎馬民族だったが、今は海洋民族に変身したらしく」

2 ウサギ

「ノロの姉だといううわさがあるが……」

「というと、ノロは中国人？」

「我々は世間に疎いからよく分からない」

このように宇宙飛行士同士は自国の大統領や首相たちと違ってすぐ仲良くなるし助け合おうとする。

「先は長い。それぞれの持ち場で全力を尽くそう」

ドイツ人の宇宙船長が水が入ったチューブを持ち上げると中国人の宇宙飛行士が声をあげる。

「乾杯！」

お互いチューブをくつつけると飲み干す。

*

月に着陸すると二人の宇宙飛行士が船外に出る。

「聞こえるか」

「よく聞こえる」

「入口を探せ」

前方に巨大な建物が見える。

「かなり大きいな」

「ここへ来るのがやっとなのに、よくもこんなものを月に造ったものだ」

2 ウサギ

「イテッ」

相棒が何かにぶつかると。重力が弱いので倒れることはないが数歩後退する。

「どうした！」

「何か壁がある」

宇宙船から連絡が入る。

「光の加減でよく見えないが、透明ガラスのドームのようだ」

「ドーム？」

もうひとりの宇宙飛行士が地面を蹴ると舞い上がった砂を両手で前方にあおる。砂は何かに遮られてゆっくりと地面に落ちる。

「強化ガラスか」

軽く叩くが当然音はしない。

「ここがドームの端だとすれば、かなり巨大だ」

「どこに入口があるんだ？」

「グルッとひと回りするしかないな」

「重力が地球の六分の一程度だから、時間がかかるな」

ふたりは片手をドームに当ててウサギのように跳躍しながら慎重に前進する。

「船長、ヒントはないのか」

2 ウサギ

「今、飛行カメラを飛ばした」

「いい報告を待っている」

「あれは？」

前方に赤く輝く何かが浮かんでいる。

「赤い小さな浮遊物体を発見」

早速宇宙船に連絡を取る。しばらくすると上空から飛行カメラが近づいてくる。ふたりがたどり着くとドームの表面に何かを見つける。

「箱のような感じがする。でも宙に浮いているように見える」

しかし、その周りには配線らしいものはない。

「電池が内蔵されているのか？」

半ば本能的に手が伸びる。ボタンらしきものを押すと半透明のテンキーボードが現れる。

「パスワードを入力しろと言うことか」

「船長、どうする？」

「うーん。どうしたものか。地球連邦政府に尋ねてみる」

「急いでくれ。酸素の残量が半分を切った」

「分かっている。動かずに節約してくれ」

*

2 ウサギ

「了解」

「888と入力しろ」

「了解」

入力したとたん、もたれていた宇宙飛行士がドーム内にゆっくりと倒れる。

「開いた！開いたぞ」

船長から通信が入る。

「中に入れ。ただしひとりだけ」

「了解」

倒れこんだ方の宇宙飛行士がそのまま中心部に向かって跳躍しながら進む。

「聞こえるか？」

その宇宙飛行士が船長からの通信に応える。

「明瞭に聞こえる。ガラスなら通信は可能はずだ」

「不測事態の可能性を排除できない。なんでもいいから話しながら前進しろ」

「何でもいいと言われても……そうだ！」

その宇宙飛行士が歌いだす。

「ウサギ追いしかの山く小鮎釣りしかの川く夢は今も巡りてく忘れがたき故郷……」

*

2 ウサギ

その宇宙飛行士は日本人だった。しかし音痴だった。

「もういい」

そのあともうひとりの宇宙飛行士もドームの中に入る。

*

「またあの赤いボタンが付いた箱が見える」

「ドームは二重になっているのかもしれない」

ボタンに近づくとその周りをなぞる。

「船長の言うとおりで！」

ボタンを押すとやはりテンキーボードが現れる。

「888でいいか」

「入力してくれ」

「あっ！ダメです」

「それなら808はどうだ」

「開いた！」

「進め！」

「了解！」

しばらくしてから船長から通信が入る。

2 ウサギ

「聞こえるか」

「鮮明に聞こえます」

「よかった。環境測定器は正常に作動しているか？」

緊張でまったく確認しることがなかった環境測定器を確認する。

「わあ！酸素が！酸素がたっぷりある」

酸素供給パイプを口から外して恐る恐る息をする。

「確かに酸素がある」

もうひとりの宇宙飛行士もパイプを外すと跳躍する。

「歩ける！地球ほどじゃないが今までより楽に歩けるぞ！」

「重力調整されているんだ」

「何という設備だ！」

「あの建物を目指して前進しよう」

*

「鍵は掛かっていない」

大きな扉を開けると中は閑散とした工場だ。ほとんどの装置や機材は運び去られていたが、かつてはここで何かが製造されていたことを宇宙飛行士は確信する。

「大きな工場だな」

2 ウサギ

「あれは？」

奥の方に籠らしき物が見える。ふたりが引きつけられるようにその籠に近づく。

「ウサギだ」

「月にウサギがいると聞いたが、本当だったんだ！」

白い封筒が籠の上に置かれている。日本人の宇宙飛行士が中の便せんを取り出す。

「月によろこそ。イリ」

3 首都

地球連邦政府で緊急会合が開かれる。もちろん宇宙飛行士たちから詳しい報告を聞くためだ。

「トリプル・テンは？」

「今のところ見つかっていません」

「いったい何があった？」

「落ち着いてください。まずはこれを見てください」

チェンが制すると天井に浮遊透過スクリーンが現れる。宇宙飛行士が撮影した動画が映し出される。チェンに代わって宇宙船の船長が解説を始める。

「これは秘密基地を上空から撮影したものです。肉眼でドームは見えないので透明感のあるブルーに着色しています。見てのとおりドームは二重化されています」

「まるで砂漠に大きな建物がいくつもある。これは本当に月で撮影されたものか？」

船長は大きくうなずくと説明を続ける。

3 首都

「高くはないですが、それでも二十数メートルはあります。棟数は一二です。一棟当たりの平均建築面積は三ヘクタールです」

「まるで飛行機の製造工場並みだな」

「よくも短期間にこんな大きな建物を建築したものだ」

しばらくすると誰もがスクリーンに釘付けになって驚きのため息しか出せなくなる。

*

休憩を求める者はいない。各国首脳は船長や宇宙飛行士の解説を聞きながらスクリーンを注視する。もちろん見逃しても映像データは配布されるのだが、目を皿のようにして見続ける。

最後にウサギが登場してスクリーンが消えると大きなため息が漏れる。

「病院まであるなんて」

「一部の国が戦いを挑んだが、バカげたことだった」

「おまえの国だってバカげたことを……」

再びチェンが割って入る。

「今後の方針を検討するために集まって頂いたことを忘れないように。中傷するような発言をすれば退席していただきます」

一瞬、会場が沈黙に包まれる。

「いったいノロはどこへ行ったんだ」

「宇宙に飛び出したらしい」

「まさか」

「地球に潜伏して盗みを働いているのでは」

「おにぎりを盗んで何になるんだ」

「正直に言おう。我が国では精密機械など製造装置が大量に盗まれた」

「こちらではレアメタルだ」

「私どもの国では資材が……」

「彼らはよく正論を語っていたが、もしもこれらの盗みがノロの仕業だったら許せない」

「おまえこそ何を言ってるんだ。おまえたちが真つ先にグレーデッドの秘密基地を攻撃してト

リップル・テンを盗もうとしたじゃないか」

「何を！」

チェンが立ち上がると叫ぶ。

「両国とも退場！」

*

「おにぎりやケーキ、一方で製造装置や資材やレアメタルを大量に盗まれるという事件から重大な事実が読み取れる」

チェンがおもむろに切りだすとすぐに反論する者が現れる。

3 首都

「バカな！ ケーキとレアメタルとどんな関係があるんだ」

「まずは大統領の話聞こう」

チェンは苦笑しながら言葉が続ける。

「おにぎりを盗むと言うことは腹が減っていると言うこと。つまり食糧事情が非常に悪い」

「当たり前だ！ 宇宙で簡単に食糧を手に入れるなんて不可能だ」

「それでは製造装置や資材が盗まれる理由は何だ！」

「こう考えることができるのでは……」

チェンが一呼吸置く。

「すでに彼らは地球型の惑星を発見したのではないかと」

チェンが再び間を置く。

「大統領！ 気でも狂ったのか。生命がいる惑星など簡単に見つかるはずがない」

「そんな惑星を探索し続けているのなら、おにぎりはともかく、なぜ製造装置や資材やレアメタルを必要とするのですか？」

急にヤジを含め発言する者がいなくなるが、少し間を置いて会場の一角から冷静な声がチェンに向かう。

「その前に聞きたいことがある」

「お答えできるかどうかは自信がないが……どうぞ」

3 首都

「いちいち地球に戻って盗みを働くのなら、なぜ宇宙に打って出たのだ？」

「彼らは想像できないほど超高速な移動手段を持っている。これについて異存は？」

「どれほど高速かは別として我々から見れば魔法のように見える」

「そのとおり。その見解はごく自然なものでしょう。つまりいつでも地球に戻れるし、もっと遠い宇宙を目指すことも可能だとすれば、彼らはすでに理想の惑星を発見したのかもしれない」

チェンの説明に頷く者が増える。

「大統領の言いたいことが分かってきたぞ。発見したものが原始地球だとすれば食糧事情がいはずはない。だからおにぎりを輸入する必要があった」

「盗みじゃなく輸入か！」

ヤジが飛ぶ。

「おまえの国も輸入ばかりしているじゃないか」

「大統領！レッドカードを」

にらみ合う代表者の一方が陳謝する。

「発言を撤回する。申し訳なかった」

もう一方の代表者は席を立てて床に額を付けるとチェンが思わず笑い出す。

「反省しているのにレッドカードは少しきついかも」

3 首都

この代表者が立ち上がって意外にも横道に逸れた議論を元に戻す。

「第二の地球に永住しようとするのなら、機材や資材が必要になる」

ここでそれまで一言も発言していない日本の代表者として参加していた鈴木首相が挙手する。「彼らにその機材や資材を贈与すればどうだろう。こそこそ盗まないで差し上げようと」

チェンが大きく頷く。すると誰かが大声をあげる。

「そうだ！欲しいものを与えて、その代わりにトリプル・テンをもらえばいい！」

チェンは頷いた頭を激しく横に振る。

「姑息なやり方は私が許さない！」

すぐさま鈴木も反論する。

「そんな条件を出せばノロは拒否するだろう。こんなことが、なぜ分からないのか？」

先ほどの代表者はもちろん、同調しようとした他の代表者たちがひるむとチェンが追い打ちを掛ける。

「彼らは応じることなく盗みを続けるだろう。だから黙って盗んでいるのだ」

「まるで海賊だ」

その発言者にチェンが視線を移す。

「違う。高度な知識を持った宇宙海賊だ」

*

「よく考えればノロやグレーデッドは原発の廃炉やマイクロウエーブを提供してくれたり、地球のために誠心誠意力を貸してくれた」

「そうだ」

「しかし、グレーデッドは国連を占拠して全世界を恐怖に陥れた」

「確かに。それがトラウマになったことは否定できない」

「マイクロウエーブはともかく、原発の廃炉作業はかなり強引だった」

議論が落ち着きを取り戻すとチェンが口を挟む。

「過去はさておき、ノロに率いられたグレーデッドはこの地球を何とかしようとする努力してくれた。しかし、トリプル・テンに目がくらんだ国や組織がグレーデッドを攻撃した」

3 首都

「とても勝負にならなかった」

惚けた声を上げる者を睨み付けるとチェンが続ける。

「我々はこの地球を守る義務がある。マイクロウエーブで電力事情が好転すると贅沢な生活を求めだした。温暖化は防げたがゴミだらけになって生態系も乱れている。絶滅する動植物が急増している」

「それはたいしたことではないのでは？」

「我々は微妙な生態系の上に成り立っている。ある意味、ひ弱な生命体だということをお忘れなように。海面下降の影響もあるが、生態系の乱れから感染症が増えている。人類は生命の頂

3 首都

点にいると言うのはそれは単なるおごりだ。生態系を侮ると大変なことになる」

チェンの迫力ある言葉に会場がシーンとなる。

「ピラミッドをご覧になったことはありませんか？」

頷く者が多い。チェンの後ろのモニターにピラミッドが映しだされる。

「あれだけの頑丈な建築物でも頂上から崩れていくのです」

頂上がズームアップされる。よく見ると長年の強風で頂上付近が丸くなっている。

「人類は消滅して地球は動物や植物だけの生命体の星になるかもしれない」

沈黙が続いたあと誰かが発言する。

「大統領。我々はこれからどうすればいいのですか？大統領はどうするつもりなのですか」

この言葉に全員我に返ったようにチェンを見つめる。

「お答えします。特定の国の最高責任者に特殊な任務をお願いすれば異論が続出しますが、今

回は日本の鈴木にある任務をお願いする」

急に指名された鈴木が尋ねる。

「その内容は？」

「ノロとの接触だ。彼の真意を探って欲しい」

「望むところ」

*

3 首都

鈴木に算段があるわけでもない。とりあえず月基地の資料を取り寄せて首相公務室で自ら分析した。幸いなことに日本の政情は安定しているので、鈴木は分析に集中することができた。しかし、ノロと連絡を取るための方法はもろんのことヒントすら得られなかった。

「ウサギか……」

鈴木がため息をつく。立ち上がると通信方法が気になるのか、公務室の窓際に設置された緊急無線装置を見つめる。そしてその横の無線LANのルーターに視線を移す。窓ガラスはすべて純度の高い特殊な銅線が埋めこまれている。無線LANからのデータが外部に漏洩しないようにするためだ。鈴木はそのルーターに近づく。

「ウサギ？」

無線ルーターにはアンテナがふたつある。まるでウサギの耳のように見える。鈴木は机に戻って地球連邦政府へのホットラインの回線を開く。

「日本の首相、鈴木です。チェン大統領に繋いでいただきたい」

しばらくするとチェンの声が聞こえる。

「先だっではお世話になった」

「それはこちらの方だ。ところで月にいたウサギは今どこに？」

「連邦政府で大切に飼育している」

「そうか！生きてるんだな」

「元気に跳ね回っている」

「今からそちらに行く。構わないか」

「まさか、ウサギに会いに来るんじゃないだろうな？」

「そのとおり！このことは極秘だ。それにウサギに護衛を付けてくれ」

「ウサギに護衛？」

「すぐ行く」

回線を切ると鈴木は首相専用高速ジェット機を手配する。

*

3 首都

ここは地球連邦政府職員のための健康管理室だ。箆に入れられたまま高性能のスキャン装置で例のウサギの検査結果がモニターに映しだされると鈴木が叫ぶ。

「やっぱり！」

「説明してくれ」

チェンが鈴木の手を取る。

「耳にアンテナが埋めこまれている。我々の技術を遙かに超える超高性能なアンテナだ」

「アンテナ？何のために？誰が？」

「ノロだ。これでノロと連絡が取れるはずだ」

「まさか」

3 首都

「チェンはノロの気質を知らない。これはノロのジョークであり、そしてプレゼントだ」

*

「ノロ。聞こえるか？鈴木だ」

籠に入ったウサギの横で鈴木が通信機のマイクを握りしめる。

「だめだ」

もう何十回も試しているが応答はない。

「地上では無理なのか……」

残念がる鈴木にチェンが提案する。

「月なら？」

「あつ、そうか！」

「冗談だ」

チェンが否定するが鈴木は本気だ。

「月へ行く。宇宙船を用立てしてくれないか？」

真剣な眼差しの鈴木にチェンは一歩引く。

「鈴木、少し頭を冷やしたらどうだ」

「冷静だ」

チェンは鈴木の気迫に頷く。

3 首都

「確かにアンテナが埋めこまれている。しかも特殊なアンテナだと言うことも理解した」
チェンが鈴木の手を握る。

「やってみる価値はあるな」

鈴木がチェンの手を握り直す。

「ありがとう！」

*

各国の批判をかわすためにチェンは様々な理由をつけて鈴木とウサギと限られた職員を連れて月に向かう。

そしてついにノロとの交信に成功する。

「こちらはのろまな亀のノロ。ウサギが寝ている間にアンテナを埋めこんだ」

ノロの第一声に鈴木は素直に笑いながらジョークに近い質問をぶつける。

「新しい星の居心地はどうだ？」

「地震や台風や火山の噴火が多いが、慣れれば天国だ」

「それじゃ地球と同じじゃないか」

「でも人口が少ないから、災害になることはない」

これは冗談ではなかった。地球に対する批判、あるいはイヤミだった。

「地球からではこのウサギを使っても通信できなかった」

「当たり前だ。ウサギは月を住みかになっているのだ。でも今は一羽しかない」

「何を言いたい？」

「地球連邦政府を月に移すんだ」

「茶化さずに応えてくれ」

必死に鈴木がすがり付く。

「茶化してはいない。連邦政府が地球にあることが問題なんだ。月を地球の首都にするんだ。

各国首脳が首都である月に集まって地球を見つめながら議論すれば色々なアイデアが出るはずだ」

3 首都

この発言に鈴木は言葉を失う。身体は小さいがノロの発想は地球の人間が束になってもかなわないと脱帽する。

「でもなぜウサギなんだ？」

「アンテナを増やすんだ」

「どういう意味だ。教えてくれ」

「意思疎通を円滑にするためだ」

「待ってくれ！」

「月に地球の首都を移したら、また連絡してくれ」

「ノロ！」

3 首都

4 ウサギの結婚

「こんなバカげた話、信じられない」

地球連邦政府の会議室のモニターには例のウサギが映っている。

「専門家の調査報告によれば、このウサギの耳に埋めこまれたアンテナは想像を絶する性能を備えているという」

「別にウサギの耳に埋めこまなくても、キッチンとしたアンテナを設置すればいいじゃないか」

「ノロ独特のジョークだ」

「冗談にしては度が過ぎてている」

「冗談と言うよりはバカにしている」

チェンが新調された木槌で机を叩く。

「静粛に」

全員の視線を確認してからおもむろに口を開く。

4 ウサギの結婚

「先ほどの報告の続きだが、同じ性能を持つアンテナを製作するのは我々の技術力では不可能らしい」

「だからウサギを月に残したのか」

「地球は大気に覆われている」

チェンの言葉にはぐらかされたと思ったのか、ある国の代表者が異議を唱える。

「私はなぜ月にウサギを残したのかを尋ねているのだ」

「説明には順序がある。それとも本国に問題があつて早く帰りたいのかな」

確かにその国の内情は劣悪だ。学生が民主化を求めて政府中枢部の建物を占拠していた。

「ここに居る方が気が休まるのでは」

「私を侮辱するのか」

チェンが発言者を睨みながら一気にしゃべる。

「重大な事を伝え、今後の方針を検討するためにこの会議を開催した。冗談を聞いてもらうためではなく、これから地球をどうするかということが集まっていた。それぞれの国の事情はそれぞれの国が解決すべきこと。私は現場を大事にする。月での出来事を通じてこれから地球連邦政府として何をすべきかを提案して実行に移したい。このやり方に異議のある代表者は退出していただいて結構。ただし私は独裁者になるつもりはない。地球人として地球の未来を何とかしたいだけだ」

4 ウサギの結婚

これまでのチェンではない。自分が何をすべきか、完全に自覚している。もはや中国人ではない。あらゆる呪縛から解放されて地球連邦政府の大統領というよりは人間として行動している。人間はその地位や立場が上がると、あるいは高度な専門的知識で庶民を圧倒すればするほど謙虚さを失って横暴になる。極論すれば人間であることを忘れてしまう。チェンと各国代表者の応酬が続くなか鈴木は目を閉じて過去を振り返る。

一方、鈴木も首相にはなったが、自ら望んだわけではなかった。大臣や事務次官には「大臣や次官である前に人間であれ」と口酸っぱく指示した。医師会に出席したときも同じだった。「医者である前に人間であれ」と。この考え方はチェンとまったく同じだからふたりは固い友情で結ばれている。

「大統領のいうとおりだ。人間としてどうするかだ」

鈴木が大統領を支える発言を始める。かたくなだった連邦各国代表者の態度が軟化する。

「節度ある生活をして夢や希望があればその生き方は潤い満ちた充実したものになるはずだ」

これまでのやりとりを黙って聞いていたブータン国王が挙手する。大概の国が代表者を代理出席させるにこの国は国王自身が出席している。

「どうぞ」

立ち上がろうとするのをチェンが制する。

4 ウサギの結婚

「座ったままで結構です」

手を合わせて礼をしてから口を開く。

「幸福とはいったいなんでしょう？」

急に議場が静かになる。

「便利な電化製品に囲まれて高級車を乗り回すことでしょうか？ プール付きの邸宅に住むことでしょうか？」

ブータン国王は周りを伺うことなくチェンだけを見すえて発言を続ける。

「数字で幸福度を測れば我が国は最貧国でしょう。でも国民は幸せに暮らしています。月にウサギがいるということを知ったとき、全国民が月に思いをはせました。ある少女から『もし月のウサギがオスなら結婚させたい美人のウサギがいる』という手紙を受け取りました」

「！」

チェンが驚く。ノロが禅問答のようなことを言っていた意味が解けたからだ。

——ウサギのアンテナを増やすにはウサギ同士を結婚させろと言うことなのか……

一方この代表者の発言に鈴木も驚く。

——批判的な話の時はチェンを見すえて、そうでない気軽な話の時は全員に顔を向ける。計算され尽くした見事な演説だ

チェンも同じことを感じる。

4 ウサギの結婚

——とても真似できない。見習わなければ

「もし叶うなら、私は少女とそのウサギといっしょに月へ行つて見合いをさせたい」

ブータン国王が深々と頭を下げてそのまま言葉をつなぐ。

「この会議は冗談を聞くためではないという大統領に陳謝しなければなりません」

チェンが慌てて応える。

「私には冗談とは思えない。続けてください」

「いえ、私の発言は以上です。つまらない話をして申し訳ありませんでした」

「つまらない？どこが！」

しかし、その代表者は再び手を合わせてチェンを見つめるだけだった。

「結論が出たようだ」

チェンが大きな声を出すと議場が少し揺れる。

「力を合わせて月へ向かう高速宇宙船の開発にかかる。各国に協力を要請する。目的は月のウサギと地球のウサギの結婚だ」

真つ先に鈴木が拍手する。それでも各国代表者は動かない。やっとひとりの代表者が声をあげる。

「そんなことをして何になるんだ？」

チェンが即答する。

4 ウサギの結婚

「月に結婚式場を建設するためだ」

「バカな」

他の代表者が立ち上がる。そのとき鈴木が挙手して発言する。

「全地球人がウサギを祝福するのがなぜバカなことなんだ。日本はこのプロジェクトに参加する」

「アメリカもだ」

「ウサギではなく犬だったらという思いはあるが、我が国も参加する」

初めて犬を宇宙に送り出した国の代表者が笑顔で応じるとチェンが立ち上がる。

「誰でも月で結婚式を挙げられるように壮大な結婚式場を造るんだ。ここでいったん休憩！」

*

チェンがブータン国王に近づくと謝意を述べる。

「すごいアイデアでした」

「私は美人のウサギがいるといっただけです」

「幸福な国に住んでいる人の感覚がよく分かりました」

ブータン国王が微笑みながら首を横に振る。

「大統領こそ素晴らしい発想をお持ちだ。感激しました。でも我が国は高速宇宙船や結婚式場の建設に協力するお金や技術はありません。残念です」

4 ウサギの結婚

今度はチェンが首を横に振ると微笑む。

「アイディアだけで十分です。またいいアイディアが浮かんだらすぐ教えてください」

チェンの横にいた鈴木が握手を求め。

「お金や技術ではありません。大上段に構えた意見より何気ないヒントが大事なのです」

「ありがとうございます。国民に伝えます。おふたりは忙しいでしょうから、私はここで……」

軽く頭を下げたブータン国王が会場をあとにしようとすると連邦各国の代表者が取り囲む。

「是非このプロジェクトリーダーになっていただきたい」

「私には科学的な素養がありません」

「その謙虚さこそ我々に欠けていたものだ」

すぐさま鈴木がチェンに向かって提案する。

「大統領！休憩を止めてブータン国王を結婚式場建設計画のリーダーに任命する決議を！」

割れんばかりの拍手が起こる。チェンが感激して涙を流す。しばらく続いた拍手がピタッと止まる。チェンに提案の決議を求めているのだ。再びブータン国王に近づくと手を握る。そして大きな声を上げる。

「すでに決議は終わった。この方がプロジェクトリーダーだ」

握った手をそのまま上げると前よりも大きな拍手が巻き起こる。あ然として周りを見つめる

4 ウサギの結婚

ブータン国王が何とか声を出す。

「分かりました」

次の言葉を聞こうと拍手が止まる。

「しかし、私は建築家ではありません。補佐してくれる方が何百人も必要になります」
すぐさまチェンが後押しする。

「ここにいる全員があなたの補佐をする。何も心配することはありません」
誰かが叫ぶ。

「大統領の言うとおりで。今、地球はひとつになった！」

5 サンタクロース

月で連邦諸国の首脳が一堂に会して盛大なウサギの結婚式が始まるとノロではなく加藤から音声の祝電が届く。

「おめでとう。皆さんをまとめ上げたウサギの新郎新婦にあつと驚くプレゼントを用意しています。とにかくおめでとう！」

この短い祝電にムードが一変して結婚式どころじゃなくなる。

「プレゼント？」

「プレゼント！」

「トリプル・テンド！」

騒然とする式場でブータンの国王が声を上げる。

「誤解しないでください。プレゼントはウサギの新郎新婦に与えられるものです」
しかし、かえってこの言葉が混乱に輪をかける。花で飾られたバスケットの中で二匹のウサギが怯え始める。

「静粛に！」

そのバスケットの前で思わず大声を出した国王が自分の声に驚く。

「よくよく考えれば、なぜこんな結婚式を開催しなければならぬのだ」

今の今までこの結婚式のために全世界が協力してきたことを否定する発言がさらに追い打ちを掛ける。国王が黒い布をバスケットに掛けると壇上から降りて一番近い出席者に声をかける。

「我々はこの結婚式を目指して手を取り合ったのです。お忘れですか」

「仲良くすれば褒美が得られるのだと思って我慢してきたのだ」

国王が失望して黙ってしまうと、にわかになに心ない他の首脳が発言を連発する。

「それでは下心があつて協力してきたとでも」

「ここにいる全員がそう思っているはずだ」

「そんなことはない。我が国は純粹にこの事業に参加した」

「ウソをつけ！」

「なに！もう一度言つて見ろ」

柔和なブータン国王はただオロオロするだけで取っ組み合いを始めた首脳をぼう然と見つめ

る。見かねたチェンが仲裁に入ろうとするがどうしようもない。そのとき再び加藤の声が黒い布を被されたバスケットから聞こえてくる。

「折角ここまで来たのに喜ばしい結婚式をぶちこわすのですか。愚かなことだ。プレゼントは撤回する」

「待ってください」

国王がバスケットに向かって哀願する。

「あなたの責任ではない。まもなく通信が途絶える。残念だ」

「加藤！」

チェンもバスケットに近づいて叫ぶ。

「これだけは教えてくれ。なぜウサギの結婚式が必要なんだ？」

「もう分かっているだろ？」

「なんとなく……」

しかし返事はない。そのときバスケットの黒い布がずり落ちる。

「あっ！」

中には二匹のウサギが抱き合ったまま死んでいた。

*

グレーデッド、つまりノロや加藤との通信が途絶える。アンテナ役のウサギが死んだのだ。

5 サンタクローズ

「解剖して同じアンテナを造ろう」

「無駄だ」

チェンが一蹴する。

「仮に同じものを造っても生きてウサギの耳に埋めこむ技術がないし、無理矢理埋めこんでもアンテナの役目を果たさないだろう」

「試さずに断定するのか」

ある国の首相がチェンに食いさがる。

「和を保つために仕組まれたウサギの結婚式だ。まだ分からないのか」

「……」

チェンに変わってそれまで死んだウサギにひざまずいて手を合わせていたブータン国王がその首相に語りかける。

「思い出してください」

目を閉じたまま言葉を続ける。

「ノロは絶えず和を大切にしてこの地球をまとめ上げようとはしました。分かりますか」

鈴木が応じる。

「一番典型的な例はマイクロウェーブを全世界に供給するために宇宙ステーションの建設を提案したことだった」

5 サンタクロース

国王が目を開けて立ち上がる。

「あのときも全世界が結束しましたね。始めはギクシヤクしていたが、マイクロウェーブが全世界に行き届いたとき感動が地球を覆った」

居合わせた連邦各国首脳のひとつが大きく頷く。それでも先ほど発言した首脳のひとりが悪態を吐く。

「そのあとはどうだった!」

しかし、国王は動ずることなく温和な口調で続ける。

「協力してお互い手を携えたのに、ただでいくらでも電気が使えるようになると各国は勝手な事をし始めましたね」

チェンが大きく頷きながら国王を中央に招く。

「皆さん。今回のプロジェクトリーダーのブータン国王の話をしつくりと聞きましょう」

まばらではないが起こった拍手は地味だった。

「わかりました。まずリーダーとして今回のプロジェクトが失敗したことを深くお詫び申し上げます」

両手を合わせると深々と頭を下げる。次の言葉を模索するかのようにそのままの姿勢を保つ。チェンはその姿を見つめて感動する。

——あなたのせいじゃない。それにしても謙虚な方だ

「やつと顔を上げた国王は目を閉じたままゆっくりと言葉を繰り出す。

「今回はノロが前面に出ることなく加藤という男、地震と津波でメルトダウンした関東電力の福島原子力発電所の所長だった人ですが、彼がノロに代わって我々にメッセージを伝えました。私はメルトダウンした原発にどう対処したのかという彼の報告書を何度も読み返しました。皆様もご存じのとおり、彼は危機管理がずさんな関東電力の社長や重役、それに政府の対応に業を煮やしながらも、感情を抑えて冷静に現場の指揮を執りました。それは過酷な作業でした。でも彼は諦めなかった。どんな困難なことにも最善を尽くす人間だとわかって私は感激しました」

同意を求められたわけではないのにほとんどの出席者は頷き、中にはうつすらと涙を浮かべる者もいる。それほど所長だった加藤の行動は感動的なものだった。

「ところでノロは天真爛漫な人物だと聞く」

国王はチェンと鈴木に視線を移す。

「これはあなた方ふたりから伺ったノロの印象です。ところが皆様の印象はまっぴたつに分かれています。ひとつは彼を天才だという見方。もう一つはキチガイではという見方。私は彼を自分に正直な天真爛漫な人間ではないかと思っています。ところで彼と行動を共にするイリとは古くから親交がありました。イリ一族の支配地域とブータンは近いので少女時代のイリ王女と幾度も会ったことがあります。利発的ですがユーモアに富んでいてそれこそ天真爛漫な少女

5 サンタクロース

でした。海面下降事件以来、会う機会がなく残念ですが、イリには親近感を覚えます」

ここで微妙な風を感じたのか、話の内容を変える。

「さてこのプロジェクトの目的を思い出してください。ウサギを結婚させてより高度なアンテナ、つまりノロとの通信システムを構築することでしたね。はじめはバカげたプロジェクトだと批判もありましたが、実行に移されました。しかし、元々ジョークを含んだノロからの提案だったので、何らかの成果というか……、はつきり申し上げれば、みんな仲良くなれば、トリプル・テンをプレゼントしてくれるのではという邪心が生まれたのも事実で否定はできませんね」

口調は柔らかいが、厳しい指摘に誰も反論できない。

「我々の信頼は地に落ちたようです。これからは信頼を取り戻すために地球人は結束して仲良く暮らす必要があります。それにノロは何もプレゼントしてくれなかった訳ではありません」
ほとんどの首脳が首をかしげる。

「月です」

国王にすぐさま反応が押し寄せる。

「そうです！もぬけの殻になったといってもこんなすばらしい倉庫を我々が月に建設できるわけがありません。サンタクロースが何人いるのかは知りませんが……」

「あっ！」

「チェンが腕時計を見て叫ぶ。

「今日はクリスマスだ！」

「そうです。すべてのサンタクロースがビッグでサプライズなプレゼントをしてくれました。ここに地球連邦政府の議事堂を建築しましょう。月を中心に結束しましょう！」

割れんばかりの拍手が会場を埋める。国王はその拍手を受けながら横にいるチェンの手を握りしめる。

「私の役目は終わりました。祖国に戻ってもいいでしょうか」

「？」

この謙虚な言葉にチェンは返す言葉を失う。

*

「このノロからのプレゼントもサプライズですが、ブータン国王の今までの行動も劣らずサプライズなプレゼントだったのでは？」

「下手な発言をすれば品位を落とすと思ったのか、誰もが拍手するだけだ。仕方なくチェンが言葉をつなぐ。

「なぜブータンが世界一幸福な国なのか、よくわかりました」

「チェンの深々とした礼を受けた国王が壇上から降りると各国首脳が次々と握手を求め、壇上に残ったチェンがその光景をじっと見つめる。やっと国王が自分の席にたどり着いたのを確

5 サンタクロース

認するとチェンがおもむろに発言する。

「皆さん。この感動を持続するために引き続きブータン国王を地球連邦政府の最高顧問に推薦したいと思いますが、いかがですか？」

再び割れんばかりの拍手が起こる。しかし、国王は首を大きく横に振る。拍手が収れんするまで国王はずっと首を横に振り続ける。やっと国王の発言を聞こうと拍手が止まる。

「私は小さな国の国王です。お願いですから任務を解いて国に戻らせてください」

今度はがっかりしたため息が会場を覆う。チェンは残念そうな表情をするが、すぐに笑顔に戻す。

「わかりました。国王には休息が必要なようです。でもいつでも相談に乗ってください。お願いします」

国王は何も言わずに軽く首を縦に振る。

「さて皆さん。地球に戻って今後のことをそれぞれの国民に報告してください。そして再びこの月で会議を開きましょう。そのときにすばらしいアイデアを披露してください。以上です」

再び拍手が起こると鳴り止むことはなかった。

5 サンタクロース

6 安定

質素だが充実した設備を持つ地球連邦政府の月面大統領府が建設された。その基礎工事をしていたとき、地下深くに小さな金属製の箱が見つかった。トリプル・テンが入っているのではという期待が高まったが、その箱は予想に反して軽かった。鍵が掛かっていなかったのでも容易に開けることができた。中にはステイックメモリーがあった。

電子ファイルを開くと何やら複雑な図面が現れる。それは空間移動装置の設計図だった。時空間移動装置と比べれば移動範囲はしれているが、それでも地球と月をほぼ瞬間的に移動するという驚異的な性能を持っている。ただし定員は三名だった。

月面大統領府が完成した頃、地球、いや日本の豊臣自動車工業という会社が各国と連携して空間移動装置の生産を開始した。何回かの試運転が成功すると量産体制を整えた。すぐに一万

基ほどの空間移動装置が製造された。

チェンはそのうち数千基ほどを連邦各国の首脳たちに割り当てて、残りの空間移動装置で月の大統領府に様々な人間を招待した。もちろん抽選だったがその当選率はどんな宝くじより高かった。

月の大統領府に招待された人々は地球が上るのを見て感激すると、改めて地球を大事にしなければという雰囲気広がる。ブータン国王の言ったとおりだった。

*

一方、いつの間にかノロ、つまり宇宙海賊の略奪がなくなった。それに気づいたチェンが鈴木に連絡を取る。

6 安定

「久しぶりだな。チェン」

「空間移動装置の製造の件では迷惑をかけた」

「自国で製造したいというわがままを言う国の中で最後まで中国が譲らなかつたな」

「しかし、設計図がすべて漢字で書かれていたのにはびっくりした」

「ノロのジョークには参ったな」

「ひらがなが入っていたから日本に製造させることになったが、中国の抗議は激しかった」

「チェンのお陰だ」

「もう私は中国人ではない。前にも言っただろ？私は地球人だ」

6 安定

「空間移動装置で月に行った人が増えれば増えるほど地球は結束する可能性が高い。チェンの作戦に貢献できてよかった」

「ありがたい。でもこの作戦は私ではなくブータン国王が立てたものだ」

「そうだったな」

「でも鈴木との協力があつたからこそ、ここまで来た」

「ところで何か困ったことでも？」

「いや、そうじゃない。ノロのことだ」

「ノロのこと？」

「最近宇宙海賊の略奪はあつたか？」

「そういえば……」

「他国はどうだ？」

「逆に連邦政府への報告は？」

「まったくくない。どう思う？」

「そう言われても……」

鈴木がいったん言葉を切るがすぐ続ける。

「ふたつの見方があるな」

チェンからの返事はない。鈴木の見解を待っているのだ。

6 安定

「ひとつはこうだ。もう盗む必要がなくなった。要は自前で食糧はもちろんのこと、何でも生産、製造できるようになった」

チエンは沈黙を守り続ける。

「もう一つは、何らかの事情で略奪できなくなった……」

「何らかとは？」

「チエン。ポジティブな見解を選択しようじゃないか」

「ノロが新しい惑星を見つけたのはまず間違いない」

「そのとおり！」

「そこで何を考え、これから何をしようとしているのだろうか？」

「ウサギが死んだからどうしようもない」

「そうだろうか？ノロが地球との関わりを絶ったと思うか」

「チエン！今から月に行く。不謹慎だが酒を持っていく」

「待っている」

*

空間移動装置のドアが跳ね上がると鈴木が降りる。周りを見渡すと出迎へのチエンを見つける。

「話には聞いていたがとても大統領府と思えないほど質素だな」

6 安定

鈴木の第一印象にチェンが応じる。

「噴水と花壇を造ろうと提案したが却下された」

鈴木が荷物を置くとチェンと抱き合う。

「さぞかし残念だったろう」

ふたりは笑いながら大統領領府に入ると執務室へ向かう。ドアを開けて真新しい部屋に入るや早速鈴木が荷物を解く。そしてチェンに酒瓶を手渡す。

「酒か！ありがたい」

「それじゃ、これもいるな」

鈴木が干物を出す。

「最高だ！なにしろここにはコンビニがないからな」

チェンはそう言うてから、ささやくようなトーンに下げる。

「ノロがおにぎりを盗む気持ち、わからんでもないな」

「そこがポイントだ」

「第二の地球の……」

「いやノロの惑星の基礎固めができたなら次は何を思う？」

「同じことを言おうと思ったのに」

ふたりは笑いながらグラスを重ねる。

6 安定

「爛をする器具がない、それに徳利もお猪口もない。冷やで我慢してくれ」

「旧交で暖めればいい」

酒を口に含むとゆっくりとのどに流し込む。

「うまい」

グラスをテーブルに置くと鈴木が先に発言する。

「ノロの惑星はどんな環境なんだろう」

「食糧事情は悪いはずだ」

「しかし、略奪は終わった」

「ということはなんとか賄えるようになったのか」

「多分な」

「多分か……」

「でも田畑を開墾するのは大変なことだ」

「いかにノロといえども宇宙ステーションや空間移動装置を造るのは勝手が違うはずだ」

ふたりは干物を咬みながら考える。いつの間にかグラスは空になっている。鈴木がチェンのグラスに、そして自分のグラスに注ぐ。

「なぜアンテナをプレゼントしようとしたんだろうか」

「人間が地球のために結束すれば褒美としてトリプル・テンを与えるために、その確認手段

6 安定

として高性能なアンテナをプレゼントしようとした」という勝手な説が流布しているが、そうではないだろう」

「鈴木の見解に賛成だ。でも他に『なぜアンテナを……』という疑問の答えはあるのだろうか？」

「分らない」

「通信は確保したいという思惑がノロにあるような気がする」

「そこだ！ チェン！」

「？」

鈴木が膝を乗り出す。

「あながち巷で流布している説が間違いだと断定できないのでは」

チェンが鈴木をせかす。

「こう考えられないか？ 褒美にトリプル・テンを与えるが、対価を要求しようとしたんじや？」

「対価？ 食糧か？ それならこれまでどおり盗めば済むじゃないか」

「そんなことをいつまでもするなんてノロらしくない」

「確かに。ノロの惑星は海賊のアジト化するだけだ。自分で食糧を確保できなければ第二の地球とは言えないな」

6 安定

「今のところ略奪した食糧の備蓄に頼っているか、あるいは粗末だが当面の食糧を確保している状況だとすれば、何らかの手立てが必要なんじゃ？」

*

「昆虫って意外と美味しいのね」

「タンパク質が豊富で栄養価も高い」

「でもこの米は。パサパサね」

ノロの惑星のある施設で食事をしながらイリとノロが話し合う。

「品種改良には時間が掛かる」

「それにこのオレンジ、苦いわ」

「キノコはまあまあだろ？」

「松茸は食い放題ね。でも飽きたわ。それにパサパサの米の松茸ご飯なんて食べる気にもなれない」

「ウニはどうだ」

「美味しいわ。でもナマコは美味しくない」

「コノワタなんか最高の酒の肴なのに」

「でもその酒が造れないわ。ああ、日本酒が飲みたい！」

「チョコの次は酒か。相変わらずワガママだなあ」

6 安定

「ノロの気持ちや代弁しただけなのに」

「俺は酒が苦手だ」

「ところでこの星の生物が進化して魚が誕生するのはいつなの？」

「俺の計算によると一〇〇〇万年はかかるだろうな」

「そんなに待てないわ」

「酒もないし、質素な食事をしている方がメタボにならなくて済む」

「そうかしら」

「みんな贅肉がとれてスマートになっているじゃないか」

「それは一所懸命働いているからだわ。もちろん食事のせいもあるけれど」

「イリがナプキン、といっても粗末なわら半紙のような紙で口元をぬぐう。」

「私が言いたいのはノロの体型は元のままのメタボだということ。どんな粗食でもその体型を維持できる秘訣は何なの？」

「どんな環境でも対応できる身体と精神力を持っているからだ」

「ノロがニーツと笑うとゴキブリの唐揚げをほおばる。」

「うまい」

「イリはやれやれという表情をしてから改めて質問する。」

「ところで『ノロの方舟』という大型輸送時空間移動船が完成してずいぶん時間がたったけれ

6 安定

ど、いつ地球に向かわせるの？」

「あつ、忘れていた」

「えー」

「地球に行つてすべての動物のつがいを方舟に乗せてこの惑星で放つ作戦だったな」

「そうよ」

「これは大がかりなプロジェクトだ」

「それなのに忘れていたなんて」

「返事が来ないから忘れていた」

「返事？」

「この作戦は今までのような略奪作戦と違うんだ」

「どこが？」

「この星で子孫を増やす有能な動物を選定しなければならないのだ」

「そんなことわかりきっているわ」

「そうかな」

「念を押されると困るわ」

「そうだろう。ふっふっふ」

上目遣いでイリを見つめるノロにイリは思わず叫ぶ。

6 安定

「私、ノロが好きだけれどその目つきだけは大嫌い！」

「そうかな。俺の得意な表情なんだが」

「やめて」

「さっきも言ったが、どんな環境でも対応できる身体と精神力を持つ動物を一組ずつ方舟に収容するのは大変な作業になる」

イリは頷くだけで黙る。

「そのためには略奪作戦はとれない。俺の目的を地球人に理解させて俺のような環境対応型の動物を集める必要があるんだ」

イリは啞然とするがすぐ理解する。

「分かったわ。でもこんな大事なことをなぜ忘れていたの」

「忘れてたんじゃない。返事を待っているんだ」

「提案したの？」

「していない」

「提案していないのなら返事はないわ」

「提案するためには通信手段がある。地球のヤツラは通信機器を破壊してしまった」

「ちよつと待って。ウサギのアンテナのことを言っているの？」

「そうだ！」

「なんとかノロとの通信を再開できないものかなあ」

鈴木にチェンは首を横に振る。

「仮に再開できてもノロの意図が読めないぞ」

「いいじゃないか。ウサギを死なせてしまったのはこちらの責任だ。コンタクトの方法を考えよう」

「とうとうと？」

チェンが膝を乗り出すと鈴木は冗談気味に応える。

「あまりいい方法じゃないが……嘘でもいいから地球では誰もが仲良く暮らしていると伝えておびき寄せる」

「おびき寄せる方法は？」

「通信できないからといってノロが縁を切るとことはないと思う。そう思わないか？」

「そうか。これまでの行動を見ればノロはいつも地球のことを心配していたな」

「そのとおり。表向きはアンテナをプレゼントして『コンタクトしてやる』と言う態度を取ったが、地球が気になるんだ」

「性分だな」

チェンはそう言うから提案する。

6 安定

「逆に地球が大変な状況になったとしたら、彼はどう反応するのだろうか」

「それは禁じ手だ」

「すぐさま鈴木が否定する。」

「それがいやになって宇宙に飛び出したんだ」

「チェンが鈴木に軽く頭を下げる。」

「浅はかだった」

「おびき寄せ作戦はやめて正攻法でノロとの接触を模索しよう」

「鈴木の方が大人だな」

「疲れているんだ、チェンは。少し休めば？」

「その間誰が連邦政府の大統領の代行をするんだ？」

「わかった。戻って私の後継者を探す」

「鈴木！」

「チェンには迷惑かけたな」

「大統領移譲事件のことか。気にしていない」

「一緒にがんばろう」

「ふたりは力強い握手を繰り返す。」

6 安定

7 ダブル大統領

海面下降で領土が飛躍的に増えた日本は鈴木首相のもと、かつての海底から手に入れた大量の液化ガスや希少金属をこの海面降下で深刻な事態に陥った国や少資源国に無償で提供したことや、事故を起こした原子力発電所はもちろんのこと、残ったすべての原子力発電所の原子炉を廃炉したことなどで世界から尊敬を集めた。

一方、チェンも祖国中国を牽制しながら地球連邦政府をまとめ上げた。しかし、チェンひとりでは力不足であることは歪めない。だからといってチェンの実績を否定できないのに、世論というのは勝手なもので鈴木を地球連邦政府の大統領に推す声が目増しに高まる。

チェンと鈴木にとってこの流れはチャンスだった。

「この盛り上がりを利用しない手はない。この際、鈴木が大統領に……」

7 ダブル大統領

鈴木が制する。

「最善の策は私が副大統領に就任することだと思う」

「それじゃ、私は飾り物になる」

「飾り物ではない。実績がある。それに私が副大統領になった方が、チェンの自由度が高まる。最終的にノロと交渉しなければならないが、大統領が直接交渉すると絶えず説明責任を負うことになる」

「そうだろうか」

「役割分担が必要だ」

「もちろんだが……」

「連邦各国に提案してみよう」

チェンが頷く。

*

「大統領がふたりいても構わないじゃないか」

意外な結論が出た。

「旧国連の地球連邦政府を復活させて月面の新地球連邦政府と役割分担をする。そうすると大統領はふたり必要だ」

「空間移動装置があるといっても、連邦政府会議の都度、月まで移動するのは考えものだ」

7 ダブル大統領

「ふたりの実績と友情は誰もが知っている」

世界中がチェンと鈴木に期待を寄せる。窓からは青い地球が見える。紆余曲折を経て何とかここまで来た。もちろんノロの影響を無視できないが、チェンと鈴木 of 活躍も大きかった。

「わかりました」

ふたりがそろって頭を下げると割れんばかりの拍手が巻き起こる。ふたりはがっちり握手をする。そしてチェンが鈴木に耳打ちする。

「……」

「えっ？よく聞こえない」

「鈴木に月面の新地球連邦政府の大統領を任せる」

「！」

「どうだ？」

「こんな立派な……」

「立派じゃない。簡素だ」

「そうだった。でも新品だ……」

いつの間にか拍手が鳴り終わって誰もがふたりのひそひそ話を興味深く聞いている。

「私は今までの地球連邦政府の施設に慣れている。目を閉じていてもトイレに行ける」

鈴木が思わず笑う。

7 ダブル大統領

「でも地球の連邦政府の建物は老朽化している。そこで執務をするのは新米の私がふさわしい」

そのとき大きな声が議場に響き渡る。

「異議あり！」

アメリカの大統領が挙手する。

「建て直しましょう」

「異議あり！」

今度はユーロの大統領が発言を求める。

「建て直す間はどうするのだ？」

「それは……」

「ユーロが新しい地球連邦政府の大統領府、議事堂を提供しよう」

「異議あり！」

今度は中国だった。

「我が国が提供しよう。チェン大統領は中国人だ」

すぐさまチェンが制する。

「私は中国人ではありません。地球人です」

苦虫を噛みつぶしたような表情をする中国の代表者をチェンが複雑な気持ちで見つめる。一

7 ダブル大統領

方この言葉のせいかな日本からの発言はない。自国の首相が地球連邦政府の大統領に就任したことで首相の席が空白になったことが原因だったが、仮にそうでなくても発言を求めなかっただろう。そしてロシアは自重した。かつての産油国の中東からも声は上がらない。議場はアメリカとユーロの一騎打ちになると誰もが予想する。ところが意外なことにアフリカのある大統領が挙手する。

「我が国に新しい地球連邦政府を誘致したい」

すぐさまユーロから反対意見がでる。

「まず衛生面で問題がある。それに治安の問題も」

ここで鈴木が発言する。

「まず私は大統領として発言すべきでしょうが、ここに来たときは日本の首相としてでした。私は帰国して首相の辞任を認められるまでは日本の代表者です。その代表者として発言したいのですが？」

すぐ横にいるチェンが頷く。

「許可します」

「人類の故郷はアフリカです。日本はアフリカを支援します。アフリカに地球連邦政府の大統領府や議事堂を構えれば衛生面でも治安面でも大きな効果が出るはずです。アフリカこそ新しい地球連邦政府の本拠地にふさわしい場所です。日本としては無償で建築費を負担します。病

7 ダブル大統領

院の建築技術者や医師を派遣しましょう」

アフリカの全代表者が大きな拍手を送る。ここで鈴木が釘を刺す。

「念のために申し上げますが、アフリカのどこに建設するので絶対に揉めないでください。約束できますか？」

拍手がすぐ鳴り止むが、エボラ熱で壊滅的な状況の国の大統領が挙手する。

「地球連邦政府及び各国には多大な援助をいただき誠にありがとうございます」
丸坊主の黒光りした頭をていねいに下げるとゆっくりとあげる。

「実はアフリカ諸国は我が国で一致しています。よろしく願います」

アフリカ以外の国の代表者が驚くが、鈴木は今発言した大統領に近づくと握手する。

「日本として真剣に後押ししましょう」

ここでチェンが議場に決断を促す。

「他に申し出がなければ、まず地球連邦政府を建て直すかについて採決をします」

電子投票の結果が現れる。満場一致とまで行かないがほとんどの国が賛成した。

「それでは建て直すかといえばどこにするのか。アメリカ、ユーロ、アフリカ、このいずれにするのか？採決します」

アフリカがわずかに過半数を上回った。アフリカ諸国の代表は当然として、アメリカ、ユーロも拍手を送る。もちろん鈴木もチェンも、そして拍手の輪が広がる。

7 ダブル大統領

*

チェンはしばらくの間、旧地球連邦政府のあるニューヨークで地球を統括する。鈴木は月面の新地球連邦政府でチェンを支援する。もちろんノロとのコンタクトを取ることが目的で、さしあたりの仕事は宇宙ステーションの管理とマイクロウェーブを送ってくる太陽の観察だった。そんな折り不思議な報告が入る。

「鈴木大統領！地球からある空間に向けて奇妙な電波、電波と言っていいのかどうかわかりませんが、発信されています」

月面通信局の局長が大統領執務室に入ってくるといきなり報告する。

「発信元は？」

「ペルーです」

「ペルー？」

「そうです。天空の城あたりからです」

「あんなところにアンテナがあったか？」

「ないはずです。ましてや通信装置などあるわけありません」

「発信内容は？」

「不明です。ほんの数秒間でした」

「引き続き注意深く監視しろ。他の地域でも同じことが起こる可能性がある。ちよつとしたこ

7 ダブル大統領

「とてもすぐ報告しろ」

「わかりました」

「イギリスのストーンヘンジからも」

「ピラミッドからもです」

「イースター島も」

「コスタリカからも、それに……」

「もういい！ ということだ」

「分かりませんが、どれも通常の電波ではありません」

「じゃあ、なぜ通信電波……電波と呼べないかもしれないが……通信電波だと断定できるのだ？」

「電波というか……」

鈴木が通信局長を制する。

「もう定義はどうでもいい。続けてくれ」

「どの電波も複数の共通点を持っています。たとえば発信時間の長さがすべて同じなのです」

「どれくらいの時間だ」

「どれも十秒十ミリ秒十マイクロ秒です」

*

7 ダブル大統領

「それ以外には？」

「すべての電波は夜で、その発信地のまったく反対側に太陽が位置するときには発射されていま
す」

鈴木が首を傾げる。

「一言で言えば太陽に向かって発射するのではなく、その反対方向に発射しています」

「つまり太陽の影響をできるだけ避けるようにということか？」

「そうです」

「それじゃ、つい最近起きた月食の時は月に到着したかも知れないな？」

「そのとおり……と言いたいのですが」

「？」

「観測されませんでした」

「発射は確認できたんだな」

「もちろんです」

「そんなバカな」

海上自衛隊で潜水艦の艦長を経験し、航空自衛隊では戦闘機のパイロットでもあった鈴木は通信や天文に関する知識は豊富だった。そんな鈴木のための疑問に先回りして局長が応じる。

「この月にあるアンテナを調べましたが正常でした」

7 ダブル大統領

「途中で消えるのになぜその電波の発射が確認できるんだ！」

「そこなんです。不思議です」

「受信側に問題がないのなら、発信元を調査するしかない」

鈴木は自分の机に戻って受話器を取る。そしてしばらく待つ。

「チェンだ」

「鈴木です」

「どうした」

「不可解な現象が起こっている」

空間直通電話で鈴木が興奮気味に報告する。この電話は空間移動装置の技術を応用して制作された特殊通信機だ。

「わかった。すぐ調査させる」

*

しかし、各遺跡には通信設備どころか通信機も見つからなかった。

「不思議な現象だな」

「恐らく遺跡内部に何らかの通信設備があるんだろう」

「遺跡だから掘りかえすわけにもいかない」

「それぞれの遺跡が真夜中を迎えたときに再調査するしかないな」

7 ダブル大統領

チェンからの報告を受けた鈴木への期待が外れる。

「毎日電波を出すわけでもないから、調査隊の緊張感を維持させることを考えなければ」

「鈴木と言うとおりだ。しかし、気まぐれで不思議な現象だなあ」

「気まぐれ！」

鈴木が受話器をバツタと落とす。

「どうした？」

「失礼した」

再び受話器を持つと興奮気味に続ける。

「ノロだ。ノロに電波を送っているんだ」

「？」

「ノロは気まぐれだ。あつ！」

「鈴木。落ち着け」

「大統領として私は失格だな」

「何を急に？」

「通信時間の報告をしたよな」

「確か『十秒十ミリ秒十マイクロ秒』と言ってたな。あつ！」

「10がみつ。トリプル・テン」

7 ダブル大統領

「トリプル・テンが絡んでいる」

「これは意図された通信だ！」

「鈴木。私たちふたりは大統領だ。つまりダブル大統領」

「チェン。こう言いたいのだろう。ダブルの知恵ではトリプルには叶わない」

「だが、何とかしなければ」

「ノロのトンチを解くにはこれまで以上の協力が必要だな」

「鈴木と知り合ったことを神に感謝する」

「神か……そうだな」

8 神々の宝物

海面降下で今まで知られなかった遺跡が数多く発見された。たとえば海底ピラミッド。海溝の両側に整然と建築されたピラミッドが見つかった。大昔、海に沈んだという伝説のムー大陸、あるいはアトランティック大陸に存在した高度な文明を持った人間の遺跡かもしれない。

長らく深い海底にあったため保存状態がよかった。しかし、むやみに発掘することが禁止されているので、今のところ謎に包まれたままだ。ところがここからも電波が発射されていたことが判明した。

チェンも鈴木も今回の件は公表しなかった。なぜならトリプル・テンが関わっていると推測されたからだ。

8 神々の宝物

古い時代、誰もが金にあこがれた時代があった。古代の遺跡には宝石はもちろんのこと金がふんだんに使われてきた。もちろん時代が進んでも金は貴重な金属だった。黄金の面や金箔で施された寺院など。

しかし、現在ではトリプル・テンだ。トリプル・テンが持つ魔性に人間は理性を失う。トリプル・テン、それは宇宙の根源であるダークマター、あるいはダークエネルギーそのものが人間に見える形で存在するもの。だからチェンと鈴木は非公開にしたのだ。

*

「絶えず地球の状況を把握しようとしているのか」

ふたりは休暇という体裁を取って元海底にあった巨大な前方後円墳の前方部分の頂上で話し合う。空間移動装置で別々に来たから誰もいない。満天の星がそんなふたりを照らす。

この建造物は日本の古墳とは違って、四角錐のつまりピラミッド型の建造物と、円錐形のつまり富士山のような形をした建造物、もちろんどちらも巨大な石で造られているが、このふたつの建造物が合体したものだつた。

「この遺跡と比べればエジプトのピラミッドや日本の御陵などちつぽけなものだな」

「建築推定時代からすると、ピラミッドよりずっと古いらしい」

「今までは地層から様々な発見をして地球の歴史を分析していたが、海面下降で現れた遺跡を分析した結果、これまでの常識が覆ってしまった」

8 神々の宝物

「表面ばかり見て判断することがいかに危ういかだ」

「惑わされないようにしなければならないなあ」

「大変な作業だ」

「チェンがいなければ今の職責を放棄するだろうな」

「それは私にとっても」

「なんか、大統領を辞めてノロに『仲間にしてくれ』って叫びたくなるな」

鈴木は目を閉じて頷くだけだ。

「トリプル・テンって人間にとって何なんだ」

頷きを止めて鈴木が応じる。

「そのトリプル・テンをノロは自由に操っている。いや、そのように見える」

「地球の人間は素直に頭を下げてノロに教えてもらおうほかないのに」

「わがままばかり言ってる」

「しかも自分たちの欲望を捨てようとはしない」

「旧メキシコ湾の底にはかなりの量のトリプル・テンがあった」

「それをノロが確保した」

「ここで鈴木がかつと目を開く。」

「待てよ」

8 神々の宝物

「チェンがじつと次の言葉を待つ。」

「この遺跡の下にはトリプル・テンが埋もれている可能性が高いかもしれない」

「同感だ」

「古代の遺跡は不思議なものばかりだと思わないか？」

「確かに」

「何かに導かれたように古代の人間はほとんど何の役にも立たないようなものにエネルギーを費やして建築した」

「まさか旧メキシコ湾も遺跡だと言うんじゃないだろうか」

「うーん……その辺は何とも……私は考古学者じゃないからな。でも遺跡だとしたら……？」

「遺跡の下にトリプル・テンがあるという定義が成り立つのなら、トリプル・テンの上には遺跡があると言いたいのか」

ふたりはここで笑い声をあげる。

「参ったな、鈴木の想像力には」

しかし、先に真顔に戻ったのは鈴木だった。

「ノロは夢のようなモノをどんどん発明した。普通の人間とは発想力が違う」

「確かに発明家というのは一種、奇人に近い。普通の人間とは着眼点がまったく違う」

「だろう？」

8 神々の宝物

チェンは頷くがすぐ首を横に振る。

「ちよっと待ってくれ。遺跡から電波が出ている原因はトリプル・テンにあるというのは飛躍しすぎているんじゃないか」

「飛躍しなければノロと付き合えないぞ」

鈴木の本音が表情にチェンが呆れる。

「まるで新興宗教に入信してみたみたいだな」

「なあ、チェン。海面下降で現れた遺跡を極秘に発掘できないものか」

「極秘にする必要はないのでは」

「トリプル・テンの存在性が高い」

「そのこと自体を隠しておけばいいじゃないか」

「あっそうか」

「考古学者は遺跡発掘が三度の飯より好きだ。既存の遺跡の発掘は規制が厳しい。たとえば鈴木の本国では御陵の発掘は不可能だ。天皇の墓だから発掘はまかり成らんじゃないか」

鈴木が苦笑する。

「規制がなかったからノロは旧メキシコ湾を標的にした」

「新しい遺跡の発掘は今のところ強い規制はない。とりあえず禁止しているだけだ。それに余りにも遠いし、しかもかなり低いところにあつてそこは塩分を大量に含む湿地帯だ。発掘する

8 神々の宝物

のは大変な作業になる」

「世界情勢は落ち着いている。発掘する人選さえ誤らなければいい成果が上がるかも」

「賛成してくれるのか」

「賛成と言うより賛同かな」

ふたりは笑顔で握手する。

「どんな宝物が出てくるか楽しみだ」

9 黒くて薄い板

海面下降で現れたムー帝国のピラミッドと噂される地下部分に周り比べて異常な重力反応の存在が明らかになった。そしてその付近から特殊な電波が宇宙に向かって発信されていた。

チェンが色めき立つ。

「トリプル・テンかも」

そこは旧ハワイ島を頂点にした広大な陸地でアメリカの領土だった。

「アメリカ大統領に連絡しろ」

はやる気持ちを抑えながらチェンが補佐官に指示する。

「繋がりました」

チェンは手渡された受話器を持つと詳細に説明する。相づちを打つアメリカ大統領の反応に

9 黒くて薄い板

手応えを感じながら最後に同意を求める。

「発掘の許可をいただきたいのだが」

「もちろん許可します。ただし条件があります」

「条件とは？」

「まず発掘は極秘でお願いしたい」

『『まず』ということとは追加の条件があるということですね』

「そうです。我が国の発掘隊を主力メンバーにしていたきたい。もちろん地球連邦政府の発掘隊との共同作業を拒否するものではありません」

アメリカとしては自国の裏庭のようなメキシコ湾でノロにトリプル・テンを回収された事件にトラウマを持っているらしく今度こそという気持ちで前面に出る。

「分かりました……と言いたいのですが、他にも同じように不思議な電波を出す海底遺跡が数カ所あります。そこでも異常な重力反応を示す物体が確認されれば同様に発掘調査の是非を問うことになり……」

ここでアメリカ大統領が制する。

「複数の連邦諸国と秘密交渉をすれば地球連邦政府の立場がないのはわかります。しかし、目的は遺跡の下に何があるのかを確認することでしょうか？」

アメリカ大統領の読みの深さにチェンは観念する。

9 黒くて薄い板

「分かりました。それに地球連邦政府としてもすべての遺跡発掘を同時に行うことは困難ですし、ひとつ分かれば他の遺跡のことも推測できます。ここはアメリカを優先しましょう」
受話器の向こうから感謝の意が伝えられる。チェンは受話器を置くと月の地球連邦政府の鈴木を呼び出す。

「ムー帝国のピラミッドの発掘調査という名目でアメリカと異常物質の探索作業に入る」

「一步前進だ。相手がアメリカというのも心強い」

チェンの報告を鈴木が好意的に受け止める。

「問題は異常物質が発見された後だ」

「その辺をきちつと詰めておかなければ」

「月からの監視を強化してくれ」

「万全の体制を取っている」

*

いくら海面降下で陸地になってかなりの年月が経ったとはいえ、ちよつと掘れば塩分を含んだ水が発掘調査を阻む。ポンプをフル稼働させても染み出る海水を完全には排水できない。

「地盤沈下が激しい。下手をすればピラミッドが傾くかもしれない」

アメリカの発掘隊が焦る。

「ピラミッドの内部から地下に潜るほかない」

9 黒くて薄い板

「それができるのなら初めからそうしている。エジプトのピラミッドのような内部に通路がない」

「そうだった。それじゃピラミッドを爆破するしかないな」

「それは禁じ手だ。遺跡を破壊することはできない」

「どうすればいいんだ」

地球連邦政府の発掘隊がこの状況を詳しくチェンに報告する。

「やはり、簡単にはいかない」

チェンは現場のビデオを見ながらため息をつく。

「しかし、諦めるわけにはいかない。かといってピラミッド周辺から海水が出なくなるような地盤になるまで数百年もかかるといふ専門家の意見があるが本当か？」

「それも希望的な予測です」

仕方なくチェンは鈴木に連絡を取ることにする。

「それじゃ、アトランティック帝国のピラミッドも同じだな」

「要は元々海底にあった遺跡はどれも同じだということだ」

「元海底は遺跡の宝庫だが断念せざるを得ない」

「しかし、今さら方向転換してエジプトのピラミッドの底を発掘するわけにはいかない。今まで秘密にしていた責任を問われる」

9 黒くて薄い板

「そんなに大統領の席に未練があるのか。場合によっては辞任すればいいじゃないか」

「そうだ！少し弱気になっていた」

「誰でも困難なことが起きると弱気になるものだ」

「鈴木がいてくれて助かる」

「何を言っている。私の方が少し強がっているだけだ」

「わかった。公表しよう」

*

チェンは連邦各国ではなく全世界に向けて詳細な情報を発信する。だが意外にも反応は穏やかだった。それは遺跡の下にトリプル・テンが存在しているかもしれないという期待感からだった。しかし、発掘については慎重な意見が多い。

まず日本は古墳の発掘を拒否した。もちろん天皇家の墳墓だという理由からだ。逆に絶えず支配者が入れ替わる中国は「自ら遺跡発掘するからどの遺跡が電波を出しているのか公表しろ」と情報公開を迫った。

一方、国内に遺跡が存在しない国の首脳は、もし発掘プロジェクトが立ち上がった場合、参加を要求した。

数々の意見が出されたが、わがままな意見をチェンは逆手にとって電波を出す遺跡を公表せずに条件闘争に臨む。つまり無条件に遺跡発掘に応じる国が現れるまで待った。

9 黒くて薄い板

あまり時間をおかずにイギリスが手を上げた。

「我が国は地球連邦政府の意向に従って全面的に協力する」

慌てて同じ条件を提示した国々を無視して、チェンはイギリス政府に打診する。遺跡発掘に必要な機材を保有しているうえに治安も良好なイギリスは理想的だった。しかも、電波を出すストーンヘンジはピラミッドのような大型な遺跡ではないので扱い易い。

この遺跡発掘プロジェクトが決定されるとイギリス国内は歓喜に沸く。ただしチェンは条件を付けることを忘れなかった。

「もしトリプル・テンが発見された場合、すべて地球連邦政府の管理下に置く。ただし、分析結果が明らかになった時点で、十パーセント相当分のトリプル・テンをイギリスに譲渡する」

この条件にイギリス以外の国々が悔しがる。もちろん遺跡を持たない国は冷静に結果を待つことになる。

*

ストーンヘンジ付近は嚴重な警戒がされる。それこそアリー一匹たりとも侵入できない。巨石が倒れないように発掘調査が行われる。まず重力測定装置による調査が開始される。やがて精密な地下の立体地図が作成された。驚いたことに強い重力反応を示す箇所は複数あった。

「そんなに分散しているのか」

ストーンヘンジ遺跡発掘プロジェクトチームリーダーが驚きのまなざしを持って重力測定装

9 黒くて薄い板

置が作成した3D図面を眺める。

「うーん」

時間が経つにつれ図面の精度が上がって強い重力反応を示す物体の形が特定される。

「長方形のように見える」

意外だった。誰もがその物体はトリプル・テンに違いないと思っていたから、その比重と重力反応から直径数センチの球体を想像していた。

「トリプル・テンではないのかも……」

謎の物体のひとつの形が計測される。想像を遙かに超える大きさだった。

「長方形の板のような感じがする」

その物体の正面が映し出されると計測値がモニターの端に示される。

「横九十一センチ。縦三百六十四センチ」

「大きい！厚みは？」

モニター上でその物体がゆっくりと横に回転して、その回転角度が九十度になったときその物体は限りなく直線に近づいた後消滅する。

「厚みがない！」

「まさか！」

「とにかく掘ってみよう」

9 黒くて薄い板

そのとき誰かが叫ぶ。

「いつの間に夜になったんだ！」

誰もがモニターに釘付けになっていたので気がつかなかったが、いつの間にか上空は厚い雲に覆われていた。

すぐに大きな雨粒が落ちてくる。

「この付近で雨が降るなんて……」

そのとき大音響と大量の光が同時に炸裂する。

「わあ！」

この雷の一撃で発掘隊のほとんどの隊員が感電死する。奇跡的に難を逃れた数人の隊員がストーンヘンジの岩陰に隠れる。地面にスパークした青白い光が何かを探すように這いまくる。しかし、正視できないほどの眩しい光に残りの隊員たちは思わず目を閉じる。

落雷は一度だけだった。しかもすぐに真つ黒な雲が離散して青空が現れる。

「何だ！あれは！」

*

ストーンヘンジの周りには真つ黒な板が林立している。その大きさは畳一枚分程度だ。おそらく下半分が土の中に埋もれているはずだ。

恐る恐る生き残った数人の隊員がそのうちの一枚に近づく。しかし、触れようとする者はい

9 黒くて薄い板

ない。遠巻きに眺めながら不思議な板の周りを回る。

「厚みがない」

「よく見ろ」

「薄い！」

不思議な板の厚みは一ミリどころかもっと薄く見える。少し真横から斜めに視線を移すと板状であることが分かるが、真横に立つと細い線に見える。余程しっかり見つめないと何も見えないような感じがする。

「仲間はず？」

感電して即死したはずの隊員の姿はない。

「本部に連絡を……」

通信機はもちろんのこと重力測定装置も見当たらない。

「遺跡の周辺に警備隊がいるはずだ」

誰かがその発言者に首を振る。

「誰もいない」

「でもストーンヘンジはびくともしていかないぞ」

全員視線をストーンヘンジに向ける。ストーンヘンジを構成する巨石はすべて落雷の前と同じ位置に凍として立っている。勇気ある隊員が黒い板に近づいて恐る恐る触れる。周りの隊員

9 黒くて薄い板

がじつと見守る。しかし、制止する者はいない。

「柔らかい」

全員がほっとしてその隊員に近づく。今度は両手で押してみる。中腰で力を入れて押すがびくともしない。それどころか両足が後退する。薄いが曲がることはない。生き残った者の中に地球連邦政府の監視員がいた。

「トリプル・テンなら柔らかいはずだ」

自ら押してみる。

「どう表現したらいいんだ。この感触……」

言葉を選びながら続ける。

「薄いが弾力性はある。でも硬い」

それ以上何も言えなくなる。全員隣の巨石の前の板に近づく。やっと誰かが発言する。

「どうして急に地上に現れたんだ？」

周りに不気味な風が吹き始める。

*

隊員たちの後方に空間移動装置が回転しながら現れる。回転が停止すると風が収まりドアが跳ね上がる。降りてきた鈴木が叫ぶ。

「何があった！」

9 黒くて薄い板

「見ての通りです」

「これはいったい……」

鈴木は月の地球連邦政府でストーンヘンジ上空の宇宙ステーションからの情報を収集していた。しかし、急に発生した積乱雲で地上が見えなくなった。すぐに晴れたが人影が極端に少なくなつたので自ら現場に赴いたのだ。

鈴木は黒い板を不思議そうに見つめるが、発した言葉は板のことではなかった。

「発掘隊員の数が少ないが、他の隊員はどこにいるんだ？」

「落雷で感電死しました」

「!……生き残つたのは？」

「我々五人だけ」

「遺体は？」

「それが……」

「感電したのは確かか？」

「その瞬間を見ました。しかし、その後は分かりません」

鈴木が肩の無線機に手を伸ばすとチェン呼び出す。

「至急救急隊を派遣するようにイギリス政府に指示してくれ」

一息つくると鈴木は黒い板に近づく。

9 黒くて薄い板

「上空からはまったく見えなかった」

宇宙ステーションの高感度カメラは地球の地上を五センチ四方までの識別できる能力がある。それなのに畳み一枚分もあるこの黒い板を認識できなかった。

「厚みが一ミリありません」

「どおりで真上からでは見えないはずだ」

隊員に案内されて板の横へ向かう。

「！」

鈴木が驚くと同時に納得する。

「いつ現れた？」

「つい先ほど」

「どこから」

隊員たち全員が首を横に振る。鈴木は正面から力を込めて板を押す。びくともしない。振り返ると連れてきた警護員を促す。

「拳銃でこの板の横から叩いてくれ」

大柄の警護員が拳銃をフォルダーから取り出すと銃口を持って板を真横から叩くと鋼鉄製の銃座がまっふたつに分かれる。

「紙のように見えるのに、まるでカミソリだ！」

9 黒くて薄い板

鈴木はゆっくりとストーンヘンジの周りを歩き始める。巨石と比べると小さいが、巨石ひとつひとつを守るようにほぼ二メートルほどの距離を置いて黒くて薄い板が並んでいる。

——弾力性があつて堅い。そして非常に重いようだ。しかし、なぜこんな形をしているのだ
チェンからの無線が入る。

「今からそちらに向かう」

「だめだ」

「なぜ？」

「ここでふたりの大統領が会談するのは危険すぎる。自重してくれ」

「しかり……」

上空をイギリス空軍の戦闘機が通過する。チェンの声が聞きとりにくくなる。

*

「陽が落ちた」

「まもなく投光器と重機が到着します」

イギリス陸軍の士官の報告に第二次発掘隊員が尋ねる。

「電気はどうするんだ」

「ここで鈴木が発言する。」

「電気なら心配するな。宇宙ステーションから直接マイクロウエーブが送られてくる」

9 黒くて薄い板

「あつ、そうか」

今後のことに不安を抱くイギリスの第二次発掘隊に鈴木が直接命令する。しかし、その鈴木に妙案があるわけではない。

投光器が設置されると周りは昼間のように明るくなる。重機が黒い板に近づく。まず試みたのは板の裏側を土盛りして表側の根元を掘っていくという方法だ。

「サイズを確認しよう」

「横九十一センチ、高さは露出しているのが約百八十センチ。同じ長さが地中に埋まっています。厚みは〇・四ミリです」

鈴木が改めて驚く。

「これは畳、二枚分と同じ大きさだ」

鈴木は近寄ってメジャーを当てる。

「ちょうど畳み一枚が地上に出ていることになる。推定重量は？」

「約五〇トンです」

「五〇トン！」

「このような状態で現れたのも不思議ですが、沈まないのがもっと不思議です」

「少々土盛りしても倒ればどうなるのか分からんな」

鈴木は土盛り作戦を中止する。

9 黒くて薄い板

「振動を与えないようにしなければ」

急に全員の足取りが慎重になり、声小さくなる。

「重機一台あたり何トン引き上げることができんだ」

「足場の強度にもよりますが最大で一〇トンです」

「ということは最低五台いるな」

「追加しますか」

「いや、いい。こんな薄いものを吊り上げるのは、まず不可能だ。首尾よく吊り上げてもらうやうにトラックに積み込むんだ。それに荷台がもたない。どう考えてもロンドンまで運ぶのは不可能だ」

反論する者やアイデアを出す者は誰もいない。スズキは黙ってにわか仕立てのテントに向かう。

「休憩してもいいかな」

「監視は続けます。何かあったらすぐ起こしますのでゆっくりしてください」

「すまない」

もちろん睡眠するためにテントに入ったのではない。

「チェン」

「チェンだ。どうだった」

9 黒くて薄い板

「どうしようもない」

鈴木は自分の目で見たことを報告する。

「事態が急変しなければ月に戻ったらどうだ」

「もうしばらく留まる」

「無理するなよ」

*

陽が昇る。投光器の光が相対的に弱くなる。周りにある他の黒い板がはっきり見えるようになる。ところが徐々にすべての黒い板がグレーに変化する。

「消える……？」

「鈴木大統領を起こせ！」

誰かがテントに向かって走るとベッドでまどろむ鈴木を揺さぶる。

「起きてください！」

反射的に起き上がると靴も履かずに外に出る。遠目にも黒かったはずの板が薄いグレーに変化しているのが分かる。

「測定できる装置をフル稼働しろ！」

鈴木はまっしぐらに板があったところに向かう。

「消えた！」

9 黒くて薄い板

鈴木は手を差し出して消えた板を押そうとする。透明になっただけで板は存在すると確信していたからだ。しかし、手応えはなく、もんどり打って鈴木が倒れるとその向こうにあるストーンヘンジにしたたか頭を打つ付ける。

「大丈夫ですか！」

それでも鈴木は立ち上がって叫ぶ。

「なぜだ！昨日は見えていたし、強力な投光器の元でも透明になることはなかったのに」

両脇を抱えられた鈴木はなおも吠える。

「トリプル・テンなら透明になることは知っている。でも今回は消えた。ノロ！ノロ！教えてくれ！」

この叫び声に反応したのか、ストーンヘンジ全体から例の奇妙な電波が宇宙に向かって発射される。しばらくすると鈴木脳の直撃する奇妙な声がする。

「鈴木。俺はノロ。月に戻れ」

9 黒くて薄い板

10 ノロの方舟

「遺跡の下に埋めれば見つからないと思ったが、さすが鈴木だな」

感心するノロにイリがコーヒーカップを差し出す。

「何を埋めたの？」

「センサーだ」

「何のために？」

「あれ？話してなかったけ」

「聞いてないわ」

イリはタッパーからチョコレートを取り出すとかじる。歯形が残ったチョコレートをそのタッパーに戻すと微笑む。そしてコーヒーを口に含むとチョコレートを溶かしながら呑みこむ。

「最高！」

イリが幸せそうにフーと息を吐く。

「俺もそのチョコレートをくれ」

「へー珍しいわね。チョコレートをかじったら歯が疼くって言ったのに」

「だって余りにも美味しそうに食べるんだもん」

「甘いチョコレートでブラックコーヒーを飲むのは最高よ」

「やってみる」

歯形のついたチョコレートを口に放り込むと吐き出す。

「甘い！」

ノロは慌ててコーヒーを飲む。

「あっちうち」

今度はコーヒーを吐き出すとイリのブラウスが薄茶色に染まる。

「いやあ！もう！」

「ごめん、ごめん」

「もったいないわ。この惑星ではコーヒーもチョコレートも貴重品なのよ」

イリは口を尖んがらかしてハンカチで胸元を拭く。

「貴重品とならないように努力している」

「どういうこと？」

「だからセンサーを遺跡に埋め込んだんだ」

「話を逸らしてもだめよ」

「地球のどんな生物をこの惑星に持って来たらいいいのか、探索してるんだ」

「なぜ遺跡なの。遺跡の周りにはあまり生物はいないわ」

イリの突っ込みにノロは動じない。

「そんなことはない。アンコールワットの周りは野生動物の宝庫だ」

「そうね」

「確かにイリの言うとおり生物が少ない遺跡も多いが、大昔は結構植物や動物がいたはずだ。だから繁栄して遺跡を造るまで文明が発達したんだ」

もうイリはコーヒーを吐き出されたことなど忘れてノロの話に引き込まれる。

「どのような生物と共生していたのか？遺跡の周りにはそんな疑問に答える宝庫なんだ」

「すごいわ。それでどこまで分かったの」

「うーん、まあまあ……」

「勿体ぶらずに教えて」

「遺跡なら誰も暴かれないと思っていたら、センサーが見つかってしまった」

「どこの遺跡？」

「ストーンヘンジ」

「イギリスね」

「今のところ一カ所だけ他の遺跡に波及するかもしれない」

「なぜ？」

「センサーはトリプル・テンを利用して造ったんだ」

「人間はトリプル・テンを欲しがっているから、やりかねないわ」

「そろそろ潮時か……」

*

鈴木が思ったような通信手段ではなく地球のあらゆる生物の現状を調べるために、ノロはセンサーとしてトリプル・テンを板状にしたものを発見されにくい遺跡に埋め込んでいた。この作業をしたのは未だ高度な科学力を維持するグレーデッドの残党、というよりはノロの信奉者だった。

そのお陰でセンサーとしてのトリプル・テンが収集したデータが蓄積されるとその都度ノロの惑星に送信された。そのことを月にいた鈴木が偶然にも掴んだのだ。

すでにノロの惑星では大規模な工場が建設されてノロのアイデアを具体化していた。時空間移動装置は高性能化され、機動力は時空間移動装置にまったく及ばないが、不可能とされていた時空間移動船も量産された。それはトリプル・テンの応用技術が生かされたからだ。それほどノロはトリプル・テンの特性を完璧に把握していた。

しかも驚いたことにトリプル・テンが生命の誕生、そして進化にも関わっていたことをノロは理解していた。だから古代遺跡の地下にセンサーとしてトリプル・テンを埋め込んだのだ。

*

ノロの惑星に鈴木の本メッセージが届く。それは偶然だったが確実にノロに届いた。

「ノロ！教えてくれ！」

一方、治療を終えた鈴木は落胆しながら月の地球連邦政府に戻ると意外な報告が待っていた。それはストーンヘンジから強力な電波が月に発射されたという報告だった。鈴木は通信室に直行する。

「これです。送信者名を除いて暗号化されています」

「送信者は？」

「ノロです」

「ノロ！」

「悪い冗談かもしれません」

「解読は？」

「懸命に解読作業をしていますが、難航しています」

通信士が睨むモニターを鈴木も見つめる。しばらくすると結果が表示される。

「宛名しか解読できませんでした」

鈴木はモニターを見て驚く。

「宛名は大統領です」

「鈴木という名前はいくらかでも転がっている」

「『親展』と表示されています」

「私に暗号など解けるわけがない」

「とにかく音声信号なので再生してみます」

モニターのスピーカーから音声流れる。

「親展。鈴木へ」

その後は聞くに堪えない音が続く。

「ひどい雑音だ」

通信士が耳を押さえる。しかし、鈴木は耳をそばだてる。

——— どういうことだ！ 私にははっきりとノロの声が聞こえる。

これはノロが発明した特殊暗号音声だった。つまり特定の人間にしか聞こえないようにした音声信号だ。自分以外の誰もが雑音にしか聞こえないのに鈴木にだけ明瞭に聞き取れる。

「メモリースティックに録音してくれ」

首を傾げながらも通信士が応じる。

「了解！」

通信士から受け取ったメモリースティックを持って鈴木は執務室に向かう。通信士がその後の姿を不思議そうに見つめる。

*

「久しぶりだな。板状のトリプル・テンを見つけた以上、時間の猶予がなくなった。そこで鈴木に頼みがある。これから俺がしたいことを伝えたい。ふたりだけで会える場所と時間を指定してほしい。返信方法を教える。いいかな」

鈴木はふたりきりと言われてもどうすればいいのか分からない。ましてやノロの指定する通信方法がまったく理解できない。仕方がないので通信士に相談する。

「えー！あの暗号を解読できたのですか」

通信士が驚いて鈴木がペーパーにした通信内容の後半を丹念に読む。

「理屈は分かりません。でも通信は可能です」

「そうか」

鈴木は数字を並べたメモを通信士に手渡す。

「これを送信すればいいのですね」

「頼む」

*

月の地球連邦政府近くの無人の倉庫で鈴木はじっとノロが現れるのを待つ。約束の時間キッ

カりに風を切る音がする。回転する時空間移動装置が現れると鈴木は倉庫の隅に向かう。やがて回転が止まるとドアが跳ね上がってノロが現れる。鈴木が駆け寄って握手を求める。

「元氣そうで何よりだ。地球と同じような惑星を発見したのか！」

「もちろん！今改造中だ」

「さすが。この宇宙にはやっぱり地球型の惑星が存在するんだ！どんな生物がいる？」
興奮気味に尋ねるがノロは首を横に振る。

「そこなんだが、地球と同じ環境にするために協力してほしいことがあるんだ」

「何でも協力する。チェンも賛成するはずだ。何をすればいい？」

「ありがたい。こちらが要求する生物を一組ずつノロの惑星に持ち帰りたいのだ」

「まるでノアの方舟だ！」

「ノアではなくノロの方舟だ」

「そうか！でも一組ずつと言うが、ものすごい数になるぞ」

「心配いらぬ。超大型の宇宙輸送船を建造した」

「ノロと話しているとびっくりすることばかりだ」

「問題はどのように捕獲して輸送船に乗せるかだ。握り飯を盗むようなわけにはいかない」

「やっぱり犯人はノロだったのか。まあ、それはいいとしてノロの要求となると地球の人間たちはどのような反応するだろうか」

「そこを何とか調整してほしいのだ」

「うーん。確かに難問だ。チェンに相談してみよう」

ここでノロはデータを手渡す。

「これは欲しいものリストが入ったメモリースティックだ。生物によっては一〇組以上、手に入れたい種もある」

「一度ノロの惑星に行ってみたいな」

「もちろん招待する」

「ありがとう！ちよつと質問してもいいかな」

「遠慮はいらない。それに協力してもらうのに何も教えないのは失礼だもんな」

「質問はひとつだけ。あらゆる生物をノロの惑星へ移植しても簡単に繁殖するのだろうか」

「至極重要な質問だ。それ以外の質問は枝葉にすぎない。でも答えは『やってみないと分からない』だ」

「そうか。ノロといえども非常に困難な作業になると言うことか」

ノロは黙って頷く。

*

「むずかしい宿題だな」

ノロが帰った後、鈴木とチェンは月の地球連邦政府の執務室で話し合う。ノロから受け取っ

たメモリースティックのデータがモニターに表示される。

「意外だ。地球上の全生物かと思つたら、細菌や植物はほとんどない。魚類が主体で両生類までのジャンルに絞られている」

「と言うことは昆虫などの動物がすでに存在している星を見つけたことになる」

「もつと詳しく聞けばよかったな」

「通信は可能なんだろう？」

「通信手段は確保している。例のウサギがいた倉庫にノロから提供された通信設備を保管している。数日中にこの執務室に設置する」

「この部屋に設置できるほどコンパクトなのか？」

「チェンは遺跡の底に埋め込まれたトリプル・テンを通信装置だと理解していたのでかなり巨大な設備だと思つた。」

「あれは古代の遺跡周辺の生物の行動や進化を調べるための装置だ。そして収集したデータをノロの惑星に送るために装置が大型化したらしい。と言つても畳二枚分程度だが、ある程度の数が必要だったようだ」

「そうか。ところでノロの協力要請だが妙案はあるのか」

鈴木はチェンに首を大きく横に振ると呟く。

「だから呼んだ」

「そうだった。どうも公表ははばかるな」

「いつも何でも公開すると言つてのと矛盾するぞ」

「事によつては事後報告になる」

「それじゃ私たちの信用はがた落ちだ」

「でもノロに協力すると言つても誰が賛成してくれるんだ？」

「待てよ」

鈴木が急に明るくなる。

『『ノロは新しい惑星を発見して第二の地球に育てようとしている。そのために地球の生物を移植する』ときちんと説明して『人口が急増している地球の食糧事情の悪化に備えるためだ』と説得して賛同を得れば？』

「もちろん、そのとおりだが、果たしてうまくいくかどうか……」

「チェン。正面突破でいこう」

「分かった。そうしよう」

*

「夢みたいな物語が希望を与えたようだ」

地球連邦政府で鈴木がチェンに笑顔を向ける。

「よく考えれば一部の権力者や大企業がトリプル・テンを巡ってノロを宇宙へ追いやったけれ

ど、庶民から見ればノロのお陰で、永久的にしかもほとんどタダで電力を使えるようになったし、原発廃炉もきっちりしたし、核兵器もなくなった。そんなノロに協力しない方がおかしいんだ」

「結果がよければすべてよしだな」

モニターにはノロの欲しいものリストが映っている。ほとんどの項目にチェックが付けられている。

「各国の生物学者たちが、ノロの『欲しいもの』リストに従って動物を捕獲して引き渡す準備にかかっている」

「まるで競争だ」

「しかし、すべて集めるとすごい量になる」

「そろそろノロが現れるはずだ」

「時空間移動船で運搬すると言っていたが、どんな宇宙船なんだろう」

「楽しみだな」

「各国の『欲しいもの』集荷場に立ち寄って積み込むと言ってたな」

「半分、礼を兼ねてノロの方舟を披露するつもりなんだ」

「そのとき執務室の通信機にノロからの連絡が入る。」

「こちらノロの方舟の船長ノロ。協力を感謝する」

「来たか？」

腹に響くような重低音の音とも震動とも言えない圧力のようなものをチェンと鈴木が感じると窓際に駆け寄る。カーテンを開けると防弾ガラスがビリビリと震えている。窓越しに巨大な飛行船のようなものが浮かんでいいる。

「あれがノロの方舟か？」

とにかく巨大だ。

「この付近には着地する広大な平地がない。時空間移動装置を差し向けるからそれでこちらに来てくれ」

大統領府の庭に時空間移動装置が到着する。すぐさま警報が鳴ると警備員が取り囲む。

「まずい！鈴木、行くぞ！」

ふたりは慌てて執務室を出ると庭に向かう。

*

船内はドーム球場など比べようのないほど広い。整然とした棚が無限に並ぶ。チェンと鈴木はノロがいる部屋に案内される。満面の笑みを浮かべるノロがふたりに近寄ると握手を求め。

「全面的な協力に感謝する」

頭を下げるノロらしくない態度とは逆に鈴木が砕けた言葉を発する。

「だだっ広い海辺に『欲しいもの』集荷場を設置しろと言った意味がよく分かった」

「この大きさが限界だ。これ以上大きくすると時空間移動できない」

「時空間移動とはどういう移動なんだ？」

「一言で言えば時空を移動すると言うことだ。空間移動だけしかできない空間移動装置とは格が違う」

ふたりは首をひねりながらノロを見つめる。

「と言うことはノロから譲り受けて量産した空間移動装置なんかオモチャだとも？」

「そのとおり。あれは地球と月を往復するために造ったものだ。移動には二、三分ぐらいかかるだろ？」

ふたりが同時に頷く。

「時空間移動装置なら瞬間だ。ノロの惑星と地球の移動は瞬間だ。何秒かかるかというような問題は無意味だ」

「理解を超えている」

「それよりもまずアフリカの『欲しいもの』集荷場に向かう。連絡してくれ」

ノロがマイクをチェンに手渡す。

「任せてくれ」

1 1 生命永遠保持手術とトリプル・テン

地球では巨大なノロの方舟が世界各国の「欲しいもの」集荷場を次々に訪れては手際よく積み込んだ。そして作業が終了するとノロの方舟は上昇してフツと消滅する。これを見た集荷場にいた者たちはただ驚くだけだった。

ノロは各国の大統領や首相はもちろんのこと欲しいものを集めてくれた生物学者などに丁寧に礼を尽くしたが、各国首脳たちが期待していた見返りはなかった。

遺跡の下にはトリプル・テンが埋められていた。それはセンサーと通信機能を担うためにノロが苦心して板状に整形した特殊なトリプル・テンだったが、本来の特性を失ってはいない。ストーンヘンジではその一部露出していたから大問題を引き起こしたのだった。

*

ノロの惑星の海辺や湖畔近くに特殊ないけすを造って地球の魚類や両生類を育てる実験が始

まる。様々な工夫をして複数回の世代交替が確認されると順次いけすから海や川に放つ。壮大なノロの構想が実行に移された。

ところでトリプル・テンは使い方によっては生物に永遠の命を与えることができる。すでにノロはその特性を利用してノロ本人はもちろんのことノロの惑星の人間は永遠の命を手に入れていた。恐るべきノロの応用能力がこれまで考えられなかったことを次々と現実化させる。しかし、重要な例外もあった。

地球から持ち込んだ魚類もトリプル・テンの特性を利用して永遠に生きるようにすればいいのだが、そうはいかない。なぜなら永遠の命を得ると生殖機能が働かなくなるからだ。それに繁殖してもらわないと食糧が確保できない。

だからと言ってノロは永遠の命を欲しがっていたわけではなかった。生命の誕生、進化を観察するにはどうしても長い視点が必要だった。それは神のように振る舞うためではなかった。自分ひとりが永遠の命を得てほかの人間を支配しようなどとは思っていなかった。

猫に小判のごとく、他のことには目もくれずにまっしぐらにノロは真理を探究しようとする。

*

無脊椎動物から脊椎動物への進化の飛躍が難しいのでノロはズルをした。つまり魚類を中心に一部の両生類を地球からノロの惑星に移植したのだ。

「私、科学音痴だからよく分からないけれど、うまくいっているの？」

「今のところは。でも先が読めない」

「とりあえず、マグロね。あの赤身、最高ね」

「果たして魚類から両生類、そしては虫類、鳥類、ほ乳類と地球のような進化が起こるのかなあ。植物環境が地球とは異なるし、この星のカブトムシはでかい」

「ひよつとしたら、この星のマグロ、鯨ぐらいの大きさになるのかしら」

「メダカも鯉のように大きくなるかも」

「もういいわ。こんな話」

「でもカブトムシやクワガタを地球に輸出すればぼろ儲けできるかも」

「ついにイリのパンチがノロに飛ぶ。」

「無理言つて地球の動物を分けて貰ったのに」

「そうだった。反省する」

「だいたいノロは自分の夢ばかり追いかけて周りの人の気持ちを無視するのよね」

「反省してます」

「違うの。何も責めてないわ。いえ魅力一杯だわ。ただ……」

急にイリの言葉から力が消えて瞳がうるむ。

「どうした？」

「ごめんね。夢を追いかけて続けるノロが好きなのに……」

ついにイリの瞳から涙がこぼれる。ノロがあちこちのポケットに手を入れて何かを探すが見当たらない。

「イリ、ハンカチ持っているか？」

涙ぐみながらもハンカチを手渡す。ノロはそのハンカチをイリに差し出す。

「これで拭け」

「えー？」

これからイリはノロの魅力を今まで以上に痛いほど知ることになる。

*

イリがノロの研究室に入ってくる。

「進化を観察するなんて退屈な作業ね。こちらの方が退化してしまうわ」

コーヒーが入った紙コップをノロに差しだそうとする。

「ノロ！」

パソコンの前でノロが小さな目を白黒させて両足をバタバタさせている。大きな口には食パンが詰まっている。イリはその口から食パンを無理矢理引き抜くとコーヒーを飲ませる。

「あっちうち」

「ごめーん。水の方がよかったかしら」

慌ててイリは水をコップに注いで戻る。水を飲んで落ち着きを取り戻したノロがため息をつ

く。

「早くハンバーグを食べたいな」

「ハンバーグは牛の肉よ。魚のすり身さえ手に入らないのに無理だわ」

「千年以上はかかるかな」

「その程度で牛の肉が手に入るの？」

「魚類の繁殖がうまくいったら両生類とは虫類。また地球に行って鈴木たちに頼まなければ」

「何を言ってるの。あの世に行った人に何を頼むの？ 私たちだって生きていくはずないじゃないの！」

「それがそうでもない。俺たち何歳になったんだ」

「そういえば波瀾万丈の毎日だから自分の歳を気にしたことないわ」

「俺たちいつの間にか不老不死の身体を手に入れている」

「えー？冗談でしょ」

ノロの真剣な表情を見てイリが少しだけ頷く。

「実感はないけれど……でも確かに若々しいままでわ」

「トリプル・テンの影響だ。遺跡に残した特殊な形のトリプル・テンに目を付けた者がいる。俺とは違ったやり方で永遠の命を手に入れようと必死に研究している」

「誰なの」

「徳川という男だ」

「そこまで調べているの？忙しいのに」

「地球のグレーデッドの残党が掴んだ情報から分かったんだ。ただ彼のやり方では次元波を受けると元の身体に戻るといふ欠点がある」

「何を言っているのか私には全然分からない」

「そのうち分かるときが来る」

イリはノロの思考の深さに改めて驚く。

*

ノロの予想通りストップ細胞を造りだした徳川が生命永遠保持手術の開発を水面下で進めていた。ストップ細胞というのは老化遺伝子の機能を文字通りストップさせる細胞で、この細胞を利用すれば寿命を延ばすことができる。

徳川はトリプル・テンに注目した。トリプル・テンをストップ細胞に取り込んで全細胞の老化を抑えようという壮大な計画を立てた。しかしながら女性の生殖機能の退化まで想像が及ぶことはなかった。理屈からすると、永遠に生きることになれば子孫を必要としなくなるから当然と言えば当然なのだ。

だが生命永遠保持手術の確立は困難の連続だった。トリプル・テンの確保がままならないからだ。もし大量のトリプル・テンが手に入ればノロのようにもっと簡単に永遠の命を手に入れ

ることができたかもしれない。

徳川はストップ細胞を造った実績をひっさげて全世界の富裕層にトリプル・テンの確保を訴えた。大国や大企業がなんとかトリプル・テンを手に入れようとしたが、ノロやグレーデッドの厳しい抵抗でうまくいかなかった。

やむを得ず地下深く処分された原子力発電所の敷地に研究施設を造って微量ながらもトリプル・テンを手に入れることに成功したが、その程度の量では臨床試験すらままならなかった。しかもトリプル・テン自体は放射能に汚染されることはないが、一緒に採取された汚染土壌が大きな障害となった。

ところが、遺跡地下に板状のトリプル・テンが存在することを知った徳川は再び富裕層の脇をくすぐることにした。すでに徳川は生命永遠保持手術を完成させていた。あとはトリプル・テンをいかに確保するかというところまで迫っていた。逆に富裕層、つまり独裁に近い統治国の首脳、巨大企業の社長など、金に糸目を付けない者たちが競って遺跡の発掘に奔走した。すでにストップ細胞の移植手術で寿命を延ばした富裕層は全面的に徳川に協力した。

チェンや鈴木は強く反発したが、富裕層と結託した連邦各国のほとんどがふたりを罷免しようとした。このことを知ったノロはまず遺跡に埋め込んだ板状のトリプル・テンの処分に動く。

*

「なんと言うことだ。でも予想していた」

ノロと鈴木最後の通信が始まる。月の大統領府執務室で鈴木は地球連邦議会の様子をモニターで眺めながらハンドセットを耳にかけ直す。

「予想していた？」

「まあな。ともかく問題はふたつある」

「ふたつ？」

「そうだ。ひとつは生々しい結果だ」

「手短く説明してくれないか。時間がない」

「つまり生命永遠保持手術を武器に徳川が独裁者となって地球を支配するということ。それは徳川の生命永遠保持手術には欠陥があるからだ」

鈴木はノロの説明に驚くばかりで返事ができない。

「この手術を受けても必ず検診が必要だ。つまり手術を受けた者は徳川の奴隷になる」
やっとな鈴木が声を出す。

「徳川は神になる？」

「そうだ。俺もすでに永遠の命を別のやり方で手に入れた。でも検診不要なので神にはならない」

「?!」

「人間としてこの宇宙の神秘を探求するだけだ」

時間を気にしながら鈴木がなんとか声を繰り返す。

「もうひとつの問題は？」

「子孫を残せなくなる」

再び鈴木は理解不能に陥る。

「性別の意味がなくなる。つまり男も女もお互いを必要としなくなる」

そのときモニターにうなだれたチェンの姿がクローズアップされる。ハンドセットを外して

モニターのポリウムをあげる。

「どうした？」

ハンドセットからノロの声が漏れる。

「解任された。チェンも私も大統領を解任された」

再びハンドセットを耳にかけた鈴木にノロの強い口調が届く。

「なぜだ！」

「強力な徳川のロビー活動が成功した。あっ！チェンが拘束された！」

そのとき乱暴な音をたてて執務室のドアが開く。

「鈴木大統領。あなたを逮捕します」

これまで鈴木に忠実に使えてきた補佐官が残念そうに鈴木を見つめる。

「大統領罷免決議がされてあなたを拘束しなければなりません」

鈴木はゆっくりとハンドセットを外して机に置く。

「……」

警備官が鈴木を取り囲むと手錠をかける。補佐官がハンドセットを手にすると警備官に手渡す。

「誰と通話していたのか調べてくれ」

しかし、ハンドセットは「パン」という音を立てて燃えあがる。

12 暴走

「あれだけ世話になったのに非礼な奴ばかりだ」

ノロの惑星で鈴木と通信していたノロが憤る。

「とりあえずハンドセットのデータは消去した」

何とかハンドセットに次元波を送って破壊したようだ。そばで会話を聞いていたイリもやるせない表情をする。

「遺跡に埋め込んだトリプル・テンを回収しなければ」

「鈴木やチェンはどうなるの」

「死刑はないだろうが、トリプル・テンのことできつい尋問を受けるだろうな」

「助けられないの？」

「もちろん救助する」

「よかった！でもどうやって」

「遺跡に埋め込んだトリプル・テンを利用する」

「？」

このときノロと鈴木の通話をモニタリングしていた加藤が現れる。

「加藤の機転でハンドセットのデータを消去できた。礼を言う」

「自分で消したんじゃないやなかったの？」

「いや、まあ……」

加藤が助け船を出すように割って入る。

「事態は急を要します」

「地球のグレーデッドの残党に協力してもらわなければならないが、可能か？」

「彼らは非常に協力的というより忠実です」

「それは加藤の人徳だわ」

イリの褒め言葉に加藤は首を横にしたときノロが割って入る。

「加藤の人徳は当然だが、イリ総統に対する恐怖感が……」

すかさず加藤がノロの口をふさいだのでイリのパンチが空振りに終わる。

「それではトリプル・テンの特別講義をしよう。聴講生はノロの惑星の全住民だ」

「ごまかさないで！」

「ノロの話聞いてすつきりしたわ。でもどうやってチェンや鈴木を助けるの？」

「イリの言うとおり」

加藤が頷いてからノロを見つめる。

「綿密な作戦を立てなければならぬ」

ここで榊が意見を述べる。

「あのふたりを人質にして遺跡にあるトリプル・テンの回収方法を迫ってくるかもしれない」

「そのとおり。今の地球連邦政府は徳川が陰で操っている。トリプル・テンを手に入れるためにはどんなことでもする男だ」

「徳川はノロが鈴木と親しいことを知っている可能性が高い」

榊の見解に加藤も同調する。

「鈴木の手ドセットを破壊して会話内容を消去したが、通信相手がノロであることは承知していたはずだ」

「なぜ分かるの？」

「とっさにハンドセットを遠隔次元操作で破壊したことが返ってノロとの通信であることをさ
らけ出してしまった」

加藤が残念そうな表情を見ると榊がカバーする。

「誰でも同じ対処をするはずだ。会話内容を知られる方が問題だ」

ノロが割り込む。

「問題は人質がふたりもいることだ。仮に地球連邦政府の脅迫を無視すればひとりとは公開処刑されるだろう」

「そんな！」

イリが怒る。

「後攻はダメだ。先攻だ！先に得点して逃げ切るんだ」

榊が頷きながらもノロを制する。

「それにスミス。スミスがどう出るのか、気になる」

「スミスは味方だ。心配ない」

「しかし、強力な味方だと言っても連携できなければ綿密な協同作戦はできない」

「大丈夫。スミスとはいつでも通信できる。それよりもっと大事なことがある」

「？」

ノロが話題を変える。

「ある意味、徳川には生命永遠保持手術を確立してもらいたいのだ」

「！」

全員驚いて声も出せないなか、かろうじてイリが発言する。

「独裁者に協力するの?!」

「その気持ち、よく分かる。でも今の地球はどうだ。人口が爆発的に増えて新たな公害も発生している。海面下降による気候の変動だというが、そうじゃない。贅沢三昧の生活が原因だ。とにかく食糧事情が悪化して地球は人間を養えなくなる。そうすると俺たち、困ったことになる」

ノロが真剣に困った表情をする。

「何が困るの？勿体ぶらずに早く教えて」

今度は口を横に大きく広げる。

「だってそうじゃないか！食糧のない地球から何を盗むんだ！」

ノロの大きな声に誰もが驚く。

「そうね。それにこれから必要になるは虫類、鳥類、ほ乳類のつがいの提供を受けることができなくなるかもしれない」

ノロがイリに頷きながら続ける。

「どんな形を取ろうとも人類を滅亡させてはならない。永遠の命を手に入れば人口の増加を抑えることが可能だ」

「永遠の命を手に入れば本当に子供を造ることができなくなるの？」

「当然！生命としての本質を捨て去ることになるから子孫は不必要どころか、子孫を造ることは不可能になる」

「私、反対。絶対反対。ノロの子供が欲しい」

「すでに遅しだ」

イリが周りをはばかり泣き崩れる。

*

徳川は決して表には出なかった。生命永遠保持手術を餌にして陰で連邦各国首脳を操って意のままに動く者を大統領に設しつらえた。

「とにかくトリプル・テンを手に入れるのだ」

彼はノロが未だ地球を必要としていることを百も承知していた。一方でノロの突拍子もない発想と行動にどのように対処すればいいのか分からなかった。

「下手に怒らせばどうしようもなくなる」

徳川は自ら経営する医療法人「徳川会」の会長室で地球連邦政府の大統領と電話会談する。

「徳川さんにしてはずいぶん弱気なことを」

「わしを批判するのか、誰のお陰で大統領になったのだ？」

「申し訳ありません！」

電話の向こうでヘコヘコと頭を下げる姿を想像して徳川は一抹の不安を感じる。

——少々バカでも何でも言うことを聞くヤツがいいと思ったが

「ストーンヘンジのトリプル・テンの回収は進んでいるのか？」

「まるで根が生えているように回収どころか移動させることもできません」

「たかが畳み一枚の板じゃないか。重機で吊り下げられないのか」

「薄くて挟めません」

「接着剤を使えば？」

「意外と表面が柔らかくて接着剤が効きません」

「何とかしろ」

「あらゆる手段を講じてますが……」

徳川は一方的に受話器を置く。

「できればノロと対立したくない」

徳川は腕を組むと目を閉じる。

「何のためにトリプル・テンを板状にして遺跡に埋め込んだんだ？」

独り言を発した自分に苦笑する。

——ノロが無駄なことをするはずがない。不必要になれば何らかの方法で回収するか、消滅させるはずだ

徳川はテレビをつける。どの放送局も似たり寄ったりだ。望遠レンズで捕らえられた板状のトリプル・テンは正面から見れば長方形だが真横から見ると細い線に見える。安物のレンズでは消えたように見える。それほど薄いのだ。

——強い衝撃を受ければ粉々になるような気がする

しかし、重機で吊り下げた直径数十センチの鉄球をぶつけても粉々になるのは鉄球の方だ。徳川は自分の目でトリプル・テンを直に見て触れたいという衝動に駆られる。

再び大統領直通電話の受話器を握るといきなり伝える。

「今からイギリスへ向かう」

「ストーンヘンジへですか」

「分かりました。現地に伝えます」

徳川は側近を呼び出して空間移動装置を準備させる。そして部屋を出て地下室に向かう。

*

地下室にはチェンから取り上げた大統領専用空間移動装置がある。球体のドアが跳ね上がり、操縦士が恭しく頭を下げて徳川を招き入れる。最も信頼する徳川会の副理事長を連れて空間移動装置に乗り込む。

「現地の警備は？」

「こんなこともあるのかと完全武装した警護員を配置してあります」

徳川がシートベルトを締めると操縦士に告げる。

「よし。ストーンヘンジへ！」

「了解」

軽い振動がしたあとしばらくするとドアが跳ねあがる。

「到着しました」

——すごいモノを開発したものだ。ノロか。一度会ってみたい

シートベルトを外してドアに向かうと直属の警護員がドア越しに手を差しのべる。

「ご苦労」

数十メートル先には板状のトリプル・テンが数枚並んでいる。徳川がゆっくりと近づく。そして手の届くところまで来ると尋ねる。

「触っても大丈夫か」

「問題ありません」

警護員が先に触れてみせる。用心深い徳川の性格を知りつくしたベテランの警護員に促されて徳川は一步前に出るとトリプル・テンの表面を撫ぜる。そして押してみる。柔らかいが倒れることはない。横に回ると驚きの声を上げる。

「薄い！」

背広の内ポケットから立派な手帳を取り出すとあるページを切り取る。慌てて先ほどの警護員が警告する。

「真横からは絶対に触れないください」

「分かっている。少し実験をさせていただいた」

徳川の手から離れた紙切れが風に乗ってトリプル・テンの真横に到達する。まるで鋭利なカミソリに触れたように紙がふたつに分かれる。

「なんと！」

前代未聞のトリプル・テンを初めて見た徳川は素直に驚く。

——これではいくら鈴木やチェンを締め上げても回収方法は分からない。彼らが知らないのは当然だろう。ノロしか扱えないやっかいなモノだ

徳川の目的はただひとつ。トリプル・テンを手に入れて分析することだ。手段を選ばないとはいってもノロを怒らせることは避けなければならないと確信する。

「ダイヤモンドカッターも歯が立ちません」

徳川が黙っているので地球連邦政府の責任者が説明し始めると徳川は首を横に振る。

「要するに回収不可能なのだな」

「そうです」

「他の遺跡の状況は？」

「地表に姿を現しているのはここだけです」

「ここは特殊なのか？」

「その辺のところは不明です」

そのときその責任者に息を切らせて近づく者がいる。政府と絶えず連絡を取っている通信員

だ。

「ほかの遺跡にもトリプル・テンが現れました。すべて板状のトリプル・テンです」

「なんだと！」

徳川が空間移動装置に向かいながら警護員に告げる。

「連邦政府へ」

「どちらの？」

一瞬徳川の足が止まる。連邦政府はふたつある。ひとつはニューヨーク、もう一つは月に。

「つ、月にしよう」

「ま、待ってください。月の連邦政府は警備が手薄です」

さすがに用心深い徳川だ。すぐに指示する。

「地球連邦政府に変更」

*

徳川は地球連邦政府の通信局に現れると大統領が慌てて自分の席を空けて勧める。あいさつもせずに徳川はその席に向かうことなく一〇〇台はあろうかという壁に埋めこまれたモニターに近づく。そのすべてがトリプル・テンが現れた遺跡を映しだしている。

「！」

どのモニターにもストーンヘンジと同じように何枚もの板状のトリプル・テンが映っている。

トリプル・テンの実物を知っているから狼狽えはしないが言葉を発することができない。

「あっ！理事長、これを見てください」

その声につられて徳川はスタツフが示すあるモニターに視線を移す。そこにはつい先ほどまでいたストーンヘンジが映っている。周りのトリプル・テンがふわっと浮き上がると端から順番に上昇する

「おおっ！」

トリプル・テンのそばにいた地球連邦政府やイギリスの関係者がのけぞって倒れる。そして耳を押さえながら天を仰ぐ。モニターのスピーカーから「キーン」という鋭い音がする。思わず徳川や大統領はもちろんのこと誰もが耳をふさぐ。

「ポリウムを下げる！」

大統領が命令するが耳をふさいでいるからか、それとも「キーン」という音が続いているからか、命令を実行する者はいない。画面では板状のトリプル・テンが接触を繰り返しながら宙を舞っている。

「!?!」

接触するたびに強烈な青白いスパークを放ちながら鼓膜を破るような音が連続的に聞こえてくる。もう画面を正視することはできない。誰かがストーンヘンジが映っているモニタースピーカーのスイッチを切ったらしく音声は消えるが、室内は眩しい青い光に包まれる。

ストーンヘンジの異変に感染したのか今度はモニターに映っている他のすべての遺跡でも同じ現象が起こる。その各モニターからさまざまに青白い光と、スピーカーから「キーン」という連続音が発せられる。危険を感じた徳川の側近が大声を出す。

「理事長！こちらへ！」

徳川は両脇を抱えられるように廊下に出る。その後を追って次々とドアに向かう者が折り重なるように倒れる。廊下に出ても鋭い音が追いかけてくるように聞こえる。

徳川は通信局室から出ようと駆けだす。

——あのままストーンヘンジに留まっていたら今頃気が狂うか、死んでいたかもしれない。今度は自ら判断して本能的に通信局の建物に留まることが危険だと判断した。ある意味、トリプル・テンから恐怖心を植え付けられた。徳川は今まで以上に用心深く行動することを肝に銘ずる。

各遺跡で働いていたその国の発掘隊や地球連邦政府のスタッフは雷光のような青い光と周波数の高い音波と巻き起こる衝撃で全員が死亡した。しかも衣服は焦げていた。

それだけではない。通信局の部屋ではモニターの強化ガラスが割れてスピーカーから煙が上がって天井のLED照明もすべて粉々に砕け散った。部屋から脱出できなかったスタッフは全員死亡した。

13 讓歩

気が付けば遺跡の周りからすべてのトリプル・テンが消えていた。監視カメラのレンズは割れて機能が失われていた。もちろんトリプル・テンが地面に現れて空に舞い上がるまでには撮影されていた。

混乱が収まってかなりの時間が経った。徳川は辞任を申し出る大統領を慰留する一方、壊れた監視カメラに残っていた映像を遺跡から集めさせた。

地球連邦政府内の通信局が修復された後、徳川は映像を確認するために再び連邦政府に赴く。生き残った通信局のスタッフの説明を聞きながらモニターを見つめる。

スタッフが徳川にサングラスと耳栓を手渡す。サングラスを掛けて耳栓をしようとしたとき、同じくサングラスを掛けたスタッフが声をかける。

「再生します」

畳一枚分の大きさのトリプル・テンが整然と並んでいる。しばらくするとゆっくりと浮かびあがる。面積は倍になり、つまり畳二枚分の大きさとなつて数十メートルの高さまで上昇する。ここで事態が急変する。トリプル・テンは鋭い音と光線を発してお互いぶつかるように空中で乱舞する。やがて様々な形に変形して小さくなるが音と光線はますます激しくなる。そして見るに堪えないぐらい眩くなる。たまたま徳川が目を閉じたとき映像が途絶えて周りが暗くなる。「ここまでです」

「スローモーションで再生できないのか」

「了解。耳栓を今まで以上に強く押し見てください」

耳栓に指を押しあてて徳川が首を縦に振る。地上からトリプル・テンが上昇したところから再生が始まる。スローモーションなので「キーン」という音ではなく重低音に変わる。音量が落とされているにもかかわらず腹に響くような震動音がする。

先ほどの映像ではトリプル・テンが激しくぶつかり合っているように見えたが、そうではなかった。四辺がカミソリのようなトリプル・テンが自らも切られながら相手を切り離していくという凄まじい光景が生々しくモニターに映しだされる。鋼はがねのカミソリが紙を切るのではない。ダイヤモンドの十倍以上の硬さを持つトリプル・テン同士が斬り合っている。鋭い光が発せられるのは摩擦とそのときに生じる熱が原因だ。徳川は遺跡周辺にいた発掘隊員が死亡したのは熱風が原因ではないかと推測するが、言葉にすることなくモニターを見続ける。

トリプル・テンはさらに細断される。様々な形となってどんどん小さくなる。もう人間の目では確認できないほど小さくなったトリプル・テンもあるはずだ。しかし、ここで画面が停止する。

徳川は顔全体から噴き出る汗を手の甲で拭う。

*

「トリプル・テンが消えたあとの遺跡付近の空中の状況は調査したか？」

「それが……」

「何をしていったんだ！」

「重傷者の搬送です」

徳川は少し間を置いて無愛想に応じる。

「それで」

「強烈な熱波で瞬間的に大やけどを負ったような……まるで原子爆弾で被曝したように顔の皮膚がずれていました」

モニターには監視カメラではなく救助隊が手持ちのデジカメで撮影した画面に変わる。死亡した者や意識のない者を救助隊が担架に載せて救急車に運んでいる。

「ほかに遺跡付近を映した映像は？」

徳川の発言にスタッフが違和感を感じながら画像を変える。

「何だこれは？」

「ストーンヘンジの表面の画像です」

「そんなものより……」

スタッフのひとりが徳川の言葉を無視して説明を続ける。

「画面右は従来の岩の表面。左はこの事件後に撮影された岩の表面です」

左の岩の表面には流紋がはつきりと見える。つまり高温にさらされたことを物語っている。しかし、徳川は興味を示さない。画面はストーンヘンジの全体を映したものに変わる。

「不思議なことに巨石はひとつたりとも落下していません」

「もういい。それより遺跡の周りの環境は？」

「ですから、熱波による影響を除いて何も変わっていません」

「返事になっていない。トリプル・テンの欠片かけらとか痕跡は残っていないのか」

「そこまでは……」

「さっさと調査しろ！」

*

あれだけ互いに細断を繰り返したのだから遺跡の周りには必ずトリプル・テンの欠片が残っているはずだと徳川は確信していた。珍しく日本に帰らずに通信局に留まった。それほど徳川は自信を持っていた。

昼の地域にある遺跡もあれば夜の地域にある遺跡もある。日が落ちると温度が氷点下になる遺跡もある。激しい雨にたたずむ遺跡もある。

再調査の命令を受けた現場のスタッフの大半が死亡していたので残ったスタッフは応援隊に調査を引き継ぐために待機していたが、徳川の命令で持ち場を離れて休息を取ることもできない。

ある夜、遺跡ではスタッフがウトウトしていたときトラックが到着して大型の投光器が設置される。投光器が強力な光を発すると細かい浮遊物が漂っている。それはもちろん、トリプル・テンの欠片ではない。どんなに小さな欠片でもトリプル・テンであれば浮遊しているはずがない。それほどトリプル・テンは重い。

しかし、徳川から「必ずトリプル・テンの欠片があるはずだ」と聞かされていたのでスタッフはそれをトリプル・テンではないかと必死で採取した。

一方晴れた昼間は空中のチリが目に見えないので、夜勤のスタッフと違ってまともな調査をする。欠片であってもトリプル・テンは重いはずだと地表の土を集める。

現地に分析装置がないので遺跡がある国の大学や研究機関に採取した浮遊物や土が運び込まれる。そういう施設がない国では近くの国の施設に分析を依頼することになる。

しかし、徳川の期待に添う報告は全くなかった。

「もっと詳細に調べろ！」

誰も徳川に意見を言う者はいない。それどころか取り乱す徳川の執念に後ずさりする者がほとんどだった。ここでチェン、あるいは鈴木に仕えたことがある数人のスタッフが黙って部屋を出ようとす。

「職場放棄するのか！」

ここで勇氣あるスタッフのひとりが毅然とした言葉を発する。

「もう二日以上も睡眠を取っていません。食事もしていません。徳川さんは医者でしょ」

ここで徳川はグツと唇を咬む。そして頭を軽く下げてからおもむろに切りだす。

「すまなかった。だが何としてもトリプル・テンを手に入れなければならない。人類の未来がかかっているのだ」

一瞬、沈黙が部屋を支配する。

このとき徳川は初めてノロと比べて自分の非力さに気づいた。慌てて調査したところでトリプル・テンを入手する可能性は極めて低い。それよりも、ここにいる連中を上手に使う方が得策だと考え直した。早速スタッフの肩をポンと叩く。

「調査は終了。疲れているのは分かるが、まず殉職した者の葬儀を丁重に行うことにしよう。済まないがもう一踏ん張りしてもらえないか？」

ほっとした息が室内に充滿する。

*

徳川はすぐさま次の手を打った。意外にもチェンと鈴木を釈放したのだ。

ここは徳川会の大会議室。徳川の豹変した態度にチェンのあとを引き継いだ大統領が異議を申し立てる。大統領だけではない。トリプル・テンに目がくらんだ主要国の大統領や首相、グローバル企業の会長や社長、大資産家などが徳川に攻め寄る。

徳川はそれらの意見を黙って聞く。以前の徳川ならすぐに押さえ込んで自分の意見を通そうとしたが、今回は不気味なほど沈黙を守る。その態度に恐怖感を覚える者が多いなか、大国でありながら絶大な権力を誇る一部の大統領や世界中に影響力を持つ企業経営者などが、齒に衣を着せぬ態度で徳川の責任を問う。

莫大な資金を徳川会に献上していたから、当然と言えば当然だろう。ストップ細胞のお陰で寿命を大幅に伸ばしたが、欲望が留まることはない。

「永遠の命を保証すると言った約束はいったいどうなったんだ」

それでも徳川はしゃべらない。やがてガスが抜けるように発言が少なくなったとき、徳川は過激な意見を発した者を順番に睨みつける。今まで威勢よく発言していた者の顔色が真っ青になる。やっと徳川が言葉を発する。

「皆さんの気持ち、よく分かりました。それでは今後の計画について説明しましょう」

どすの利いた低い声が大会議室を支配する。今度は出席者が沈黙する。

「生命永遠保持手術にはトリプル・テンが必要なことに変わりがない」

一同が黙って頷くのを確認すると徳川は続ける。

「トリプル・テンを自由に操ることができる人間がいる。そう、ノロだ」

続く頷きの反応に徳川の声のトーンが上がるが、ゆっくりとした間合いは変わらない。

「ノロが信頼している人間はふたりしかない」

これ以上説明することはないので徳川は地球連邦政府の大統領を見つめる。大統領は当惑して視線を外す。

「安心しろ。チェンと鈴木を大統領に復帰させることはない」

しかし、大統領は黙ったままだ。

「とりあえず地球連邦政府の参与という地位を与えてトリプル・テン回収に協力してもらおう」
 全員、徳川の意図が読み取れない。表向きは地球連邦議会がチェンと鈴木を解任したことになるが、実際は徳川の指示だった。あのふたりがその事実を知らないわけがない。

「私の考えは変わった。今や地球の人口は爆発的に増加している……」

*

太陽からのエネルギーを月で捕らえてマイクロウエーブとして宇宙ステーションに送る。そして宇宙ステーションを中継して地球に二十四時間マイクロウエーブを届ける。各企業や家庭に受け皿さえあれば電気を湯水のように使える。装置がなくてもわずかな送電設備や送電網を整備すれば誰でも同じように電気をほぼ無料で利用できる。もちろん既存の送電網があれば即

時に利用可能だ。

エネルギーが無尽蔵にしかも極めてローコストで使えるということは、オール電化の贅沢な生活ができる。雪が降り積もる地域でさえ蓄電した装置を使うと暖められた屋根や送電線や道路に雪が付着することもない。常夏の国や灼熱の土地に住む者もエアコンで快適な生活を送っている。

さらには自動車はすべて電気自動車となり天井に備え付けられたマイクロウエーブ受電装置で燃料補給から解放される。太陽光を利用するのではなくマイクロウエーブだから雨の日でも問題ない。そして技術革新が起きて自動車はエアカーに置き換わる。高速道路は不要になり、荒れた天候でなければ水上でのドライブも可能になった。

このように今や先進国、発展途上国の区別なく人々は豊かな生活を楽しむことができるようになった。

しかし、物事がすべていい方向に向かうのかというところではない。

旧発展途上国の人口が爆発的に増加して食糧事情が急速に悪化した。誰もが美味しい食べ物を求めるようになる。今度はエネルギーに代わって食糧の奪い合いが始まる。

さらに電化製品が大量に消費されてリサイクルを上回る産業廃棄物が発生する。

食糧と産業廃棄物問題以外にもっと深刻な問題が浮上した。それは感染症だった。衛生状態がよくなればなるほど免疫力が低下する。つまり抵抗力が落ちる。撲滅したウイルスや細菌が

復活する一方、新種のウイルスなどが出現して混乱する。

最新の医療設備も製薬技術も新しい感染症に対応できない。新種のウイルスに対応できないので医療ミスも多くなる。

もちろん、チェンや鈴木は対策を怠らなかったが、贅沢な生活が蔓延して清潔な生活が浸透すればするほど免疫力が低下してちよつとした風邪で死亡に至ることが多くなった。

そこに目をつけたのが徳川だった。ストップ細胞を使った治療方法を確立したのだ。徳川はその技術でのし上がって地球連邦政府まで動かすようになった。はじめは表舞台に立つことを避けたが今や実質的な最高権力者まで登り詰めた。

そして権力者になれば誰もが手に入れようとするのが不老不死だ。これまでに現れた強力な権力者あるいは独裁者とは異なり、徳川には自ら不老不死の手術方法を開発するだけの力量があった。しかも金に不自由しない者は誰もが徳川に期待を寄せる。永久的に感染しなくなる身体、つまり永遠の命を徳川に求めた。

さて徳川はそれまでのダーティなイメージを払拭するためにチェンと鈴木を地球連邦政府に復帰させた。言動は謙虚になって人が変わったように振る舞う。チェンと鈴木の評判を勝ち取るためにはあらゆる手段を使う。

14 役者

14 役者

「……ということ、なんとかストップ細胞にトリプル・テンを組み込んで人類の滅亡の危機を回避しなければなりません。いかがでしょうか」

地球連邦政府の迎賓賓で徳川のていねいな説明を黙って聞きながら聞いていたチェンと鈴木だが、最後は頷かなかった。ふたりは初めて直接会う徳川に違和感を抱く。チェンは天井を、鈴木は徳川を見つめる。長い沈黙を破って鈴木が尋ねる。

「生命永遠保持手術のことですね？」

「そうです」

徳川に視線を戻したチェンが続く。

「私たちは医療に関してはまったくの素人ですが……」

徳川がすぐさま言葉を挟む。

「素人も玄人もありません。忌憚のないご意見を聞きたいのです」

この言葉にふたりは騙されまいと脇を締める。チェンが緊張しながら言葉を続ける。

「感染症に関しては生命永遠保持手術に頼らなくても免疫力を高めれば……つまり不衛生な環境にすれば免疫力が高まるのでは？ 抵抗力さえつけければ感染症にかからないのでは？」

チェンは断定を避けて疑問符を並べる。

「おっしゃるとおりです。たとえば昔の子供はよく砂遊びをしたものです。指先には細かな傷ができてそこからほどよい数の細菌が体内に侵入します。遊びを通じて子供は知らず知らずのうちに免疫力を高めます」

「でも今の子供は外に出ずに家の中でゲームに熱中している」

「そうです。でも子供だけではありません。大人もです」

ここで徳川、チェン、鈴木が苦笑すると和んだ雰囲気広がる。

「人間はワクチンという加工品を使って新しい感染症に対応するしかないのです。ワクチンの開発が遅れたり失敗すると人類は滅亡します。一方、ワクチンの開発が成功し続ければ人口は増え続きます。そこで究極の方法をとるのです。つまり生命永遠保持手術です」

目の前にいる徳川は噂で聞いていたイメージとはまったく異なることにチェンと鈴木が戸惑う。何とか言葉を発したのはチェンだ。

「ところで我々を釈放したのはなぜ？」

「現大統領が余りにも横暴なので連邦各国の首脳と相談してとりあえず前大統領のあなた方を釈放するよう要望しました」

今度は鈴木が発言する。

「待ってください。失礼な言い方かも知れないが、私たちを解任したのは徳川さんでは？」

「それは誤解です。各国首脳が連邦議会で解任を採択したのです。私は一介の医者……」

「ストップ細胞でノーベル賞を授与されたあなたは世界最高峰の医者、いえ科学者です」
言葉を遮られた徳川は特に不満な表情もせずに応じる。

「ストップ細胞は私のスタッフの努力によって陽の目を見たのです。ノーベル賞も代表として授与されたもので私のもではありません」

ふたりは首を傾げようとするが思いとどまる。

「釈放してもらったのに失礼なことを言って申しわけありませんでした」

チェンが頭を下げると鈴木も深く下げる。先に頭を上げた鈴木が言葉を選ぶように尋ねる。

「ところで、お招きいただいた目的を伺いたいのですが」

「先ほどから説明してありますように生命永遠保持手術にはトリプル・テンが必要です」

ふたりがそろって頷く。

「トリプル・テンはやっかいな物質です。硬度はダイヤモンドの一〇を遙かに上まわり比重は金の一〇倍もあるのに流動性比重が一〇で水のような滑らかさを持つ摩訶不思議な物質。だが、

それは表面的な特徴で実態は不明です。メキシコ湾の底からトリプル・テンを回収したノロは次々と驚くべき事件を起こしました」

ここで徳川は目の前のお茶を飲もうとするが冷えていた。

「これは失礼しました。入れ直しましょう」

徳川が湯飲みを置いてテーブルの受話器を取ろうとする。

「お構いなく」

チェンがやんわりと断る。徳川は再び湯飲みを手にすると一口飲む。

「そろそろ本論というか、お願いしたいことを申し上げます」

ゆっくりと湯飲みを置く。

「ノロという男のことでお願いがあります」

急にふたりが身構える。

「『ノロ』というのは愛称ですか？それとも本名？」

鈴木が少し顔をあげて目を閉じる。

「確か、本名です」

「そうですか。そうすると軽々しく『ノロ』と呼び捨てにするような方ではありませんね」

鈴木が驚いてかっと目を開く。よく考えれば徳川の言うとおり、気楽に「ノロ」と呼んでいたが、ノーベル賞を総ナメしてもおかしくない男を呼び捨てにしていたことに初めて気付く。

チェンも同じ事を感じたのだろう、首を横に振って苦笑する。そのふたりの表情見て徳川が追いかけるような言葉を発する。

「おふたりは彼のことをどのようには呼んでいるのですか」

思わず鈴木が素直に応える。

『『ノロ』です』

「やはりそうですね。かなり親しい間柄なのです」

鈴木はしまったと思うが、素直に追加する。

「旧友とまではいかないが、少し付き合えば誰でもそう呼ぶし、彼も気にしない」

「そうですね。私はまだまだですが、彼のように呼び捨てで呼ばれるような気さくな人間になりたい」

一本取られたと思った鈴木がすかさず話題を戻す。

「ところで『お願い』とは？」

しかし、徳川は動ずることなく応える。

「私はノロ先生と会った事はありませんが、先生は偉大な方です。宇宙ステーションを建設して常時無料で電力を供給しました。核兵器を地球からなくして原子力発電所や軍艦の原子炉も廃炉しました。さらにはエアカーはもちろん空間移動装置を開発しました。そして宇宙に飛び出しました。しかも第二の地球を造ろうと『ノロの方舟』という途方もない宇宙船も開発しま

1 4 役者

した」

ふたりはただ頷くだけでじっと徳川を見つめる。

「さてよく考えれば、今申し上げたノロ先生の業績は先生自身が永遠の命を持っているからだ
と確信しています」

「?!」

ふたりはまったく答えを持ち合わせていない。徳川が念を押す。

「そう思いませんか？」

やっとチェンが声を絞り出す。

「宇宙に出て再び地球に戻って地球の生物を積み込むような離れ業をするには、もちろん私は
物理学者ではありませんが、光でも太陽から地球に向かうのに八分以上もかかるのに、ノロ先
生はいとも簡単に宇宙を移動している」

「徳川さんに指摘されてやっと気付きました。つまりノロのやっていることは永遠の命を持つ
ていないとできない芸当だと」

「さすがチェンさんですね。いや、鈴木さんも同じ意見でしょうか？」

鈴木は応えずに首を縦に振る。会話の主導権を完全に徳川が握る。

「ノロ先生はどのようにして永遠の命を手に入れられたのか。それには間違いなくトリプル・
テンが関わっているはずですよ」

14 役者

チェンと鈴木の顔がこわばる。

「無理をお願いするつもりはありません。ただ一度だけでいいからノロ先生とお目にかかりたいのです」

*

ふたりが迎賓館を出ると目の前にエアカーが駐車している。

「これに乗れということか」

直前に徳川から身分証明書と決済無制限のクレジットカード、それにエアカーのキーが与えられた。チェンは返事もせず、それらを丹念に調べる。

「盗聴器は仕掛けられていないようだ」

「問題はエアカーか？」

鈴木がチェンの用心深さに苦笑する。そんな鈴木にチェンが囁く。

「何かある」

「あそこまで言って、もし盗聴器を仕掛けるとは思えない」

「確かに。盗聴器を仕掛けたことがわかればノロに会わすわけにはいかない。しかし、徳川の変身はにわかには信じがたい」

「そうだな。ついこの間までの徳川のうわさを知っているから、今回はサプライズの連続だった」

「期限は切られていない。それに地球連邦政府の参与としての義務も特にない。形式的には私たちは自由だ。でも違和感を感じて仕方がない」

鈴木がカードを手のひらで弄びながら苦笑する。

「自由？ 決済無制限のクレジットカードをくれたが、どこで使うんだ？ 私たちは有名人だ。この敷地を出たとたん、マスコミが追いかけてくる」

「そのとおりだ！ すっかり忘れていた。盗聴器など仕掛けなくても私たちの挙動は絶えずマスコミに監視される」

「結局、地球連邦政府内に留まらなければならないことになる」

「考えたな、徳川は。でも連邦政府内の宿泊設備に留まれば私たちの会話は筒抜けだ」

「これじゃ、釈放されたと言っても拘束されているのと同じだ」

「やられたな」

自棄になったチェンがエアカーのキーを思い切り空に向けて投げる。かなりの高さまで達した後、キーは思いもよらない方角に飛んでいく。つむじ風のような風が吹くと芝生の間から砂が舞い上がる。白っぽい球体が現れるとやがてグレーに変わり回転速度を落とす。

「空間移動装置！」

回転が停止するとドアが跳ね上がる。しかし、降りてくる者はいない。急にサイレンが鳴ると本能的にふたりは空間移動装置に向かって一歩踏み出すとすぐ全力疾走に変える。連邦政府

警備隊のパトカーが近づいてくる。

ふたりが乗り込むと自動的にドアが閉まる。すぐ回転が始まったらしくふたりは立っていられなくなつてなりふり構わず何かにしがみつこうとするが叶わない。

*

ドアが開くと眩しい光が飛び込んでくる。ドア越しにスーパーマリン・スピットファイアの優雅な翼が見える。その奥にはゼロ式戦闘機の雄志が見える。

「スミス博物館？」

「ほっほっほっ」

聞き覚えのある笑い声にふたりは安心して降りる。

「スミス！」

「お元気そうで何より」

スミスがチェンと鈴木を交互に抱擁する。鈴木はいつかノロがスミスに抱擁されて「苦しい」と足をバタバタさせていた光景を思い出して納得する。

「スミス。助かった」

「いや、私は何もしていない」

「えー？」

「どういうことだ！」

スミスは笑顔のまま黙っている。ふたりは顔を見合わせて同時に叫ぶ。

「ノロカ！」

スミスは真顔で首を横に振る。

「この場所は私の博物館で一番有名な場所です」

スミスのお気に入りからのクラシック戦闘機が展示されているこの大部屋は広々としている。空間移動装置の強い回転からの風を受けても展示物は微動だりしていなかった。

「それじゃ、誰が空間移動装置を……」

スミスは空間移動装置のドアに近づいてある場所に手を当てる。

「このシリアル番号はご存じかな」

「あっ！それは私専用の……この空間移動装置は私が月と地球を往復するための……」

狼狽える鈴木にスミスが応える。

「月の地球連邦政府大統領専用の空間移動装置だ」

鈴木は狼狽えたままだが、チェンがスミスに迫る。

「なぜシリアル番号の意味を知っているんだ。それになぜ私たちがここに來ることが分かっていたんだ？」

「まず、シリアル番号の件ですが、実は私も一基、時空間……いえ、空間移動装置を所有しています」

14 役者

「？」

「ノロからのプレゼントです」

ふたりは異議を述べることなく納得する。

「後半の疑問には的確に応えることはできません。なぜならこの場所は私が一番好きな場所だからです。少なくとも一日一回はスピットファイアーの操縦席に座ります。スピッツ……スピットファイアーの愛称ですが、彼は私が操縦席に座ることを迷惑だと思っっている。でも私にとって操縦席で居眠りをするのが最大の幸せ」

「たまたま、ここに居合わせたとても」

「ほっほっほっ」

ふたりは茶化されているのではと思うが、状況が状況だけに真剣に受け取る。

「それでは徳川が仕組んだとても？」

「ストップ細胞を造りだした男だ。しかし、それを上回る男がいる」

「ノロ」

「トリプル・テンに目を奪われていた徳川はここに来て初めてノロの存在の大きさに気付いたのだ」

「なぜ今ごろ？」

「理由はひとつ」

「トリプル・テン」

「ほっほっほっ」

ふたりは首を捻る。

「私の言い方が悪かったのかな？意外にも彼は地球を騒がせたノロのことをほとんど知らなかった」

鈴木が改めてスミスに疑問符を投げかける。

「徳川が世間知らずだとでも？そんなバカな」

「そのとおり。徳川は世間知らずの大馬鹿者だったのだ」

「分かりません。教えてください」

「それほど彼はストップ細胞の研究に没頭していた。なにしろ不老不死に繋がる大研究だから」

ふたりは半分納得する。

「確かにストップ細胞は画期的です」

チエンが鈴木に続く。

「でも、釈放してくれた徳川には失礼だが、かたわのような気がする」

「そうとも言えない」

スミスが否定すると例の笑い声を上げる。

1 4 役者

「ほっほっほっ」

「トリプル・テンに気づいてやっとなの存在の大きさを知ったとでも」

「そのとおりの初めはトリプル・テンなんか簡単に入手できると思っていたが、そうではなかった」

「しかもノロは遠い宇宙にいる」

「彼と接触できるのはあなた方ふたりだけ。特に鈴木だ。当然あなた方を親切に扱わなければならないと考えた」

「空間移動装置まで与えてくれた」

「あのていねいな態度をどう考えればいいんでしょうか」

「ほっほっほっ。あなた方が悩む必要はない。いずれノロが答えるはずだ」

1 4 役者

15 御陵

「役者だな。徳川は」

「私たちはだまされていたのか？」

「役者は詐欺師じゃない。だましはない」

スミス財団の本部ビルの最上階にあるスミスの部屋で鈴木がノロと特殊な通信機で話しあう。スミスとチェンはスピーカーから聞こえてくるノロの声に耳を傾ける。

「徳川はトリプル・テンの扱い方を知らないんだ。そんなに難しいことでもないのになあ」

「えっ！ストーンヘンジでは多数の死傷者が出た」

「そっとしておけば何も起こらないのに下手にいじくるからだ。まあ、そんなことはどうでもいい」

「あれは通信システム？それともセンサー？」

「そのどちらもだ。それより次元通信もいいが、会って話をした方がいいな」

「次元通信？」

「宇宙では必ず次元通信を使う。それより今から地球に行くから準備にかかってくれ」

「準備？」

「空間移動装置は手に入るか？」

「徳川からプレゼントされた空間移動装置がある」

「それはダメだ。スミスの時空間移動装置を使ってもいいが、ここはこちらで手配する」

「スミスの？時空間移動装置？」

「ここでスミスが鈴木に頷くが、ノロは返答することなく話題を変える。

「ところで日本の御陵で一番大きな御陵のことは知っているな」

「もちろん。一番大きな御陵は……」

「そこにも板状のトリプル・テンを埋め込んである。空間移動でそこへ行くには少々テクニクが必要だ」

「何のことかさっぱり分からん」

「御陵にはある不思議な生命体と言おうか、得体の知れないモノが眠っている。刺激したくないのだ」

「御陵は天皇家のお墓です。立入禁止だ」

「だからトリプル・テンを埋め込むのに都合がよかった。でも先に居座っているモノがいた。幸いトラブルは起きなかったが……とにかく御陵で会おう。御陵なら誰にも邪魔されずに会話できる」

通信が切れる。

「ノロ！」

スミスが首を横に振って鈴木をそしてチェンを見つめる。そのときスミスのディスクからピーという音が聞こえてくる。

「ノロからのデータ次元通信だ」

すぐさまプリンターが作動する。スミスが吐き出されたペーパーを手にするいつもの笑い声を出すことなく告げる。

「ここに加藤が来るのか」

*

スミスとチェンと鈴木がスミス財団の秘密の地下室に向かう。すでに時空間移動装置が到着していてドアから加藤が降りてくる。

「加藤！」

「お迎えに参りました」

「元気か？」

「そちらこそ」

加藤がチェンと、そして鈴木と抱き合う。

「ほっほっほっ。私にはその手の挨拶はできない」

スミスと加藤ががっちりと握手をすると性急に促す。

「さて御陵に案内します」

「ちよつと待った。空間移動装置の定員は三名だ」

チェンは御陵へ行くのは鈴木とスミスはここに残るものだと思っていた。加藤がスミスから手を離すと応える。

「時空間移動装置の定員は五名です。ただしスミスさんはふたり分として勘定しますが」

「ほっほっほっ。それでは加藤さん、御陵までのご案内、お願いします」

スミスはゆっさゆっさと身体を左右に振りながら時空間移動装置に向かう。しかし、チェンが少し首を傾げて加藤に尋ねる。

「定員のことでスミスが座れる座席とあの巨体を固定するシートベルトは？」

「大丈夫です。さあ」

加藤がチェンと鈴木を促す。薄暗い装置内ではすでにスミスが座ってシートベルトを身体に巻き付けている。

「さすがノロだ。私の身体にフィットした座席を用意してくれた。ほっほっほっ」

*

一瞬で御陵に移動すると時空間移動装置のドアが跳ね上がる。さっき締めたばかりのシートベルトを解除すると鈴木がドアから外を伺う。

周りはいっそうとした森でヒンヤリしている。数メートル先にドアが開いた時空間移動装置が見える。ドアにノロが現れると飛び降りて鈴木に近づいてくる。

「やあ、久しぶりだな」

ノロは鈴木が指しだす手を握ると乗り込む。後ろではノロが乗っていた時空間移動装置のドアが閉まる音がする。

「ここは密会するのに最高の環境なんだが、盗聴される可能性がある」

ドアを閉めると鈴木が心配そうに尋ねる。

「まさか徳川がここでの密会を察知しているとしても」

「そうじゃない。先客がこの下で眠っているのだ」

「得体の知れないモノと言っていたやつだな」

「とにかくこの中なら安心だ」

すぐチェンと鈴木の説明が始まる。

*

「ふーん。本当に改心したのか、上手な芝居をしているのか、よくわからんな」

「そうだろ」

鈴木が相づちを打つとチェンがノロの顔をのぞき込む。

「どうする？」

「もう決まったも同然」

「えー？」

チェンの驚き声に鈴木もスミスも膝を乗り出す。加藤は背を向けたまま外部を映すモニターから目を離さない。

「徳川にトリプル・テンをプレゼントする」

「なんと！」

代表してスミスが驚くとチェンが続く。

「芝居かもしれないぞ！」

「芝居なら結構見応えのある演技だ。改心したのならいいことだし」

「徳川は信用できない」

鈴木が釘を刺すがノロは動じない。

「芝居でもいい。役者に祝儀としてトリプル・テンを差し上げる」

「そんないい加減な」

チェンが宙を仰ぐ。

「元々、分けてやるつもりだったんだ」

意外な言葉に三人とも黙って次の言葉を待つ。

「でも理由もないのに『あげる』なんて言えないもんな」

沈黙が続く。

「今の地球の現状をどう思う？」

「人口の増加が激しすぎる」

しばらく前まで地球の大統領職にあったチェンがすかさず答える。

「さすが元大統領。一言で言えば『人口の激増』がすべてだ」

「ノロのお陰で生活環境が一変して良くなった」

「それは電力に関してだ。太陽は鉱物資源を提供してくれない」

「今まで以上にゴミは増えるし、環境は以前より悪化している。食糧生産も環境悪化で増加しないどころか減少している。特に牛や鶏など、感染症で大量に死んでいる」

チェンに続いて鈴木が発言する。

「とにかく人口を増やさないとしなければ食糧を賄えない。このままでは食糧争奪戦争が起こるかもしれない」

「そう。だから生命永遠保持手術を開発して人口増加をストップしなければならないのだ」

「ノロ！」

鈴木が叫ぶ。

「人類全員が永遠の命を持てば子孫は限りなく増える！状況は今より悪くなるじゃないか」

「鈴木！」

今度はノロが叫ぶ。

「安心しろというわけじゃないが、永遠の命を持てば生殖機能が失われて子孫を残すことができなくなる」

「えっ！本当に？」

「第二の地球の海で実験した。地球から持って来た魚を増やそうとトリプル・テンを使って魚に生命永遠保持手術をした。その魚夫婦は元気だが雌が産卵することはなかった」

「ほう、やはりそうか」

スミスが感心すると続ける。

「有限の身であるが故、生命体は必死になって子孫を残そうとするが、理屈はともかく、永遠の命を持てば子孫を造る必要はなくなるはず」

驚きの余りチェンと鈴木は黙り込んでノロとスミスの会話に集中する。

「誰もが永遠の命を持てば人口が増えることはなくなる。しかし、やっかいなことに生命の持つ本質だけは持ち続ける。永遠に生きることには疲れるかもしれない。これから生まれるべき子

の未来をつぶし、昨日生まれた子はセーフ。老人にこの手術を受けさせた場合の問題もある」
スミスが厳しく突っ込む。

「まず乳幼児を含む子供には成人になってからこの手術を受けることになるだろうな」

ノロが軽くないなす。しかし、いつものノロではなく真剣なまなざしをスミスに向けて続ける。
「老人でなくとも生命永遠保持手術を受ければ自らの肉体を改良して永遠の命だけではなく永遠の若い肉体を手に入れることができる」

「なるほど。確かにノロの言うとおりだろう」

スミスの言葉にノロが急にいつもの表情に戻って口を大きく真一文字にする。

「整形手術を何回受けても大丈夫。オレのような男前になりたいと思えば、男はすべてオレと同じ顔になる。そうすると非常にややこしいことになるかもしれない」

チェンと鈴木の緊張感がほどける。どこに行ってもノロだらけになった状況を想像したからだ。その想像を振り切って鈴木が発言する。

「女性もみんな美人になって同一化するかもしれない」

「でもこの手術を受けると生殖機能は退化する。周りが美男や美人だらけになったからと言っても恋が始まるわけではない。男は男。女は女で集団化するんじゃないかと思う」

「あまり勧められた手術じゃないな。生命永遠保持手術っていうのは」

「鈴木の言うとおりなんだ。すべての人間にこの手術をすることには反対だ。でもひとりが受

けたら誰もが受けたがるだろう。不老不死は人間の最大の夢だもんな」

「じゃあ、なぜ徳川にトリプル・テンを与えて生命永遠保持手術を実用化させるんだ」

「今は人口増加を防ぐことが先決だ。俺が発見した惑星で食糧を確保できるまではやむを得ない。問題が解決すれば生命永遠保持手術の効果を消滅させればいい」

「そんなに簡単にできるものなのか？」

鈴木疑問にノロが答えようとしたときミスが咳をしてから低い声を出す。

「問題解決とか云々の前に重大な問題が横たわっている。生命永遠保持手術をすれば生殖機能が失われて人口増加は止まるのはいいが、仮に老人を七十歳以上だとすれば百歳ぐらいはともかく、二百歳にもなったら人生に疲れる果てるかもしれない。いくら肉体を二十歳台に保持できても精神は確実に歳を取る。経験を積みれば積むほど老け込む。だから自殺する者が増える可能性が高い」

「そうすると人口が減少する」

チエンの言葉にうなずきながらミスが続ける。

「自殺だけならいいが、事故で死ぬかもしれない。この手術を受ければ病死する者は多分いなくなるだろうが、一番怖いのは戦争だ。男と女、お互いの存在性が失われた男と女。ノロはどう思う？」

「そこなんだ。それぞれが集団化すると意味不明な争いが起こるかもしれない」

「フー」

チェンと鈴木がため息を漏らす。

急に時空間移動装置が揺れ出す。

「なんだ！」

加藤が計器を確認する。

「御陵の下で弱い地震を観測」

「アイツが動いた？」

「収まりました」

加藤が計器のチェックを終えるとチェンが叫ぶ。

「アイツ？」

ノロはチェンではなく加藤の背中に言葉をぶつける。

「まさか盗聴されたんじゃない？時空間移動装置内に次元波は侵入できないはずだ。おかしい」

「ノロ！いったい何のことを言ってるんだ？」

「今は言えない。ただこの下にいる御陵の主は生命永遠保持手術を受けてもその効果を無効にする魔力を持っているかもしれないんだ」

「どういうことだ！」

今度は鈴木がノロにくっついてかかる。しかし、スマスは落ち着いてノロの言葉を待つ。

「特定の間だけが永遠の命を持つことはだけは絶対避けなければならない。ここは徳川の芝居に乗ってトリプル・テンを使って生命永遠保持手術の開発、そして普及に協力しよう」

スミスが久しぶりに例の笑い声を上げる。

「ほっほっほっ。ノロの方が役者が一枚上だな」

16
キャミ

結局徳川の思惑どおりチェンが再び大統領に就任する。今大統領執務室でそのチェンと鈴木が話し合う。以前のようにダブル大統領制ではなく鈴木はノロ接触担当の特務官としてチェンを支える。

「盗聴されていないだろうか」

鈴木が心配そうに室内を見回す。

「いくら何でも、もうそういう姑息な手段は使わないだろう」

「ならいいんだが」

「徳川は本当に変わったんだらうか」

「人とはあんなに変わるものなのか」

「確かに別人だ。誰かが代わりに徳川を演じているみたいだ」
ふたりは苦笑するとつい三日前、地球連邦政府迎賓館での出来事を思い出す。

*

鈴木が重そうなジュラルミン製のケースをテーブルの上に置く。そしてパチンと金具を解除すると小さなガラスビンをやはり重そうに持ち上げる。

「トリプル・テンです」

ビンの中では直径数ミリの黒い球体がコロコロしている。

「丸い！」

徳川が目を見開いて見つめる。

「手を開いてください」

鈴木が徳川の手のひらにビンを移動させる。

「これだけでも二キログラムはあります。力を入れてください」

ズシツとした重さに手のひらが窪む。

「重い」

チェンが特殊な直径十数センチほどの金属製の底が浅い器をテーブルに置くと鈴木が徳川の手のひらからビンを取り上げてふたを開ける。そして十センチぐらいの高さからソロリとトリプル・テンを器の中心部に落とす。小さな黒いビーズのようなトリプル・テンが数回跳ねた後

停止する。

「まるで小さなゴムボールのようだ」

チェンが少し器を傾けると落ちた地点に小さな窪みが見える。

「見えますか」

「ああ」

「この器はチタンで造られています」

「！」

徳川は驚きのあまり声も出せない。

「触ってみてください」

黙ったまま指を差し出す。

「柔らかい！」

「押さえてください」

「何だ！この感触は」

脳外科医でもある徳川の指先の感触は鋭い。摘まもうとするが小さくて重いのでどうしようもない。

「これがトリプル・テンなのか。しかしストーンヘンジにあった板状のものとはずいぶん違う」

「トリプル・テンは様々な形を取ります。いえ一定していません。私たちにはそう見えるだけなのかもしれません」

徳川は器の中のトリプル・テンを見つめるだけでそれ以上言葉を出さない。

*

ドアをノックする音がする。

「補佐官のキングです」

チェンが施錠を解除する。

キングと名乗る白いスーツ姿の黒人の女性が入ってくる。その後ろから青いスーツ姿の白人の女性が入ってくるとキングは振り向いてチェンと鈴木に紹介する。

「ご紹介します。スミス財団付属病院の産婦人科の医師で遺伝子学の権威でもあるキャミ博士です」

キャミがキングの横から腕を差し出す。

「初めまして。チェンです」

軽く握手をすると鈴木を紹介する。

「鈴木です」

キャミは軽く会釈して鈴木の手を握る。

「参ったな」

チェンと鈴木はキャミをまともに見ることができない。圧倒するほどのグラマーでしかも美人だ。

「スミスは老練な技術と知識を持ったスミス財団付属病院でもっとも頼りになる医師とだけしか言っていないかった。まさか女性だとは」

キングが制する。

「失礼ですよ。実力にも年齢も性別もありません」

「申し訳ありません。セクハラではありません」

チェンがふたりをテーブルに案内する。着席したのを確認してから鈴木が発言する。

「何か飲み物をお勧めするのが礼儀ですが、すぐ本題に入ります。と言いながらも先に伺いたいことがあるのですが」

キャミは物怖じすることなく笑顔で応える。

「ストップ細胞の件です。あなたのヒントで徳川がストップ細胞を造ることができたとスミスから聞いたのですが、本当ですか」

「アイディアは私のものです。でもそれを現実化したのは徳川さんです。もちろん私にもストップ細胞は造れます」

謙虚かそれとも対抗心があるのか、どちらとも取れる表情にチェンと鈴木は戸惑う。一呼吸置いて鈴木が続ける。

「ストップ細胞とトリプル・テンで生命永遠保持手術の可能性が高まるのですか？」
意外とキヤミはすぐさま首を横に振る。

「可能性という言葉で質問されたことに感謝します。可能性はありますが確率は不明です」
さすがスミスが推薦しただけのことはある。容姿から想像できない回答が返ってくる。

「単刀直入にお願したいことをお伝えします」
キヤミがニツコリと微笑む。

「徳川に協力して生命永遠保持手術の実用化に向けた研究をお願いしたいのです」

「すでに申し入れがありました」

「スミスさんから？」

「いえ、徳川さんからです」

「えーっ！」

チェンと鈴木が同時に驚く。

「私はスミスさんと意見が合わないという理由で辞表を出しました」

「そうですか。スミスに近いと疑われますからね」

ここでキングの携帯通信機からの呼び出し音が聞こえてくる。

「ここで通話してもいいでしょうか」

チェンが大きく頷く。

「失礼します」

キングは立ち上がると部屋の隅に向かう。そして二、三度頷くと席に戻る。

「今、スミスが『生命永遠保持手術の開発』に対して反対声明を出しました」

チェンがテレビをつける。画面には口角泡を飛ばして激高するスミスの姿が現れる。

*

「……不老不死の手術には断固反対する。人は子孫を残して人生を全うすべきだ。不老不死というのは夢でいい。それなのに夢を叶えるためだと勝手に辞表を提出して出て行った」

「スミスさん。落ち着いてください」

記者がなだめる。しかし、意地の悪い記者もいる。

「ストップ細胞のアイデアを考えたキヤミ博士が徳川に協力するのに焼き餅を焼いているのでは？」

「おまえはどここの記者だ？今後記者会見を開くときは招待しない」

「気に入らないことを質問されたからと言って暴言を吐くとはよほどキヤミ博士が辞職することに腹を立てているのですね」

「徳川と組んでこの地球を自分たちの好きなようにしようとしている。黙って見ているほど私はバカではない」

「しかし、最近の徳川は人が変わったように人類の未来を語っています。単に不老不死になる

のではなく難病に苦しむ人や感染症にかかった人を助けることができる啓蒙活動を活発に行っています。彼が言うことには一理あるし説得力があります」

「仮面を被っているのだ。一皮むけば独裁者だ。こんな明確なことがなぜ分からんのか！」

「日頃冷静なあなたがここまで大声を上げるなんて想像もしていませんでした。あの若くて美人でグラマーなキヤミ博士を徳川に取られたことに嫉妬心を抱いているのがよく分かりました」

記者会見を打ち切ったのは記者の方だった。スマスは会見台に拳を振り落とす。巨漢のスマスの力は強烈で会見台をまっふたつに破壊する。画面はコマースィヤルに変わる。

*

「迫真の演技だ。アカデミー賞ものだ」

チェンが大げさに両腕を広げて鈴木に同意を求める。しかし、鈴木はあごでキヤミを指し示す。キヤミがハンカチで顔を覆って泣いている。

「スマス先生……」

チェンも鈴木もキングもキヤミを見つめるだけで言葉をかけることができない。キヤミの任務の重さに改めて気づいたのだ。鈴木がチェンに囁く。

「もしこんな任務を命じられたら、私だったら辞退するな」

この囁き声がキヤミに届いたのか、ハンカチをたたむとキツとした視線をふたりに向ける。

そして立ち上がって深々と頭を下げる。

「見苦しい態度、お許しください。与えられた任務、必ず成功させます」

キヤミの表情に乱れはない。それは口紅はおろかまつたくのノーメイクだったからだ。職業柄化粧をしてはならなかった。

チェンも鈴木も改めてキヤミの美しさに魅了される。そして素顔の美しい女性に初めて出会ったことに驚く。

「そんなに見つめるのは少し失礼では？」

キングの言葉にふたりが目が覚めたように恥じかむ。

「あなたに人類の未来がかかっていると云っても大げさではありません」

「スミス先生の事は一生忘れません。貧乏な私を親代わりに育てていただいて最高の教育を授けてくださいました」

「それでは今後の計画について説明します」

キヤミが着席するとメモを取ることなく暗記の体制に入る。

17 豊臣自動車工業

徳川会といえども所詮は民間団体に過ぎない。徳川は少し前までの強権的な態度を改めて「人類の未来」という看板を掲げて生命永遠保持手術の確立に没頭すると、徳川の周りでは不穏な動きが目立つようになる。

徳川は安心して生命永遠保持手術の研究に没頭することができなくなる。啓蒙活動にかなりの時間を割いていることが原因だが、この活動は将来全人類に生命永遠保持手術を受けさせるために欠かすことができない。ノロは全人類すべてに生命永遠保持手術を受けさせることを条件にトリプル・テンを提供することにしたからだ。手術に当たって極端な優先順位をつけることも禁じた。

*

「徳川は執務室の専用回線を使って地球連邦政府の大統領補佐官に連絡を取る。

「取り入って大統領にご相談したいことがあるのですが」

「分かりました。大統領に伝えます」

徳川が受話器を置いたときノックの音が聞こえる。

「キャミです」

「入れ」

軽く会釈するとキャミの報告が始まる。

「行方不明だったストップ細胞主任研究部長がアフガニスタン山中において変死体で発見されました」

「そうか。なぜアフガニスタンなんだ」

「アフガニスタン当局の調査結果を待たなければなりません。日本の警察が現地に向かう予定です」

そのとき机上の真っ赤な電話機が鳴る。すぐさま徳川が受話器を取る。

「徳川です」

「補佐官のキングです。今、差し支えなければ大統領に繋がります」

「お願いします」

「しばらくお待ちください」

「キャミが電話機を見て尋ねる。」

「大統領に相談ですか？」

「徳川は黙って頷く。」

「チェンです。お待たせしました」

「こちらこそ、お忙しい中、お呼び出でして申し訳ありません」

「ご用件は？」

「月に生命永遠保持機構を移設できないものかと」

「なぜなのでしょうか」

「また重要なスタッフがアフガニスタンで……」

「それは承知しております。月なら安全なものも分かります。少し時間をください」

徳川が受話器を置くとキャミが再び尋ねる。

「返事はどうでしたか」

「前向きだった」

*

もちろんチェンもノロの条件を理解している。だから徳川を監視するが、一方では協力もする。とは言っても月に生命永遠保持機構を移動させるとなる膨大な費用と時間がかかる。

「どうすればいい」

チェンの悩みに応えるかのように鈴木はノロからプレゼントされた次元通信機でノロを呼び出す。

「どうした」

一連の報告を受けるとすぐさまノロが応じる。

「ウサギがいた倉庫のことを覚えているか？」

「忘れもしない。あの倉庫で聞いたブータン国王の演説は今でも覚えている」

「その倉庫の横にも倉庫があったよな。そこで空間移動装置を製造する」

「えーっ！ 生命永遠保持手術の研究施設にするんじゃないくて？」

「研究施設はウサギがいた倉庫、つまり今は月の地球連邦政府の月面大統領府に改造された建物を再改造する。まずは空間移動装置製造工場だ」

「でも工場となると膨大な設備が必要になる」

「ふふふ」

恐らくノロは口をいったん大きく開いてから横に広げて笑っているのだろう。

「はぐらかさずに教えてください」

「いますぐ月に行って確認しろ」

「分かりました」

鈴木は次元通信機のハンドセットを置いてから手短くチェンに説明すると空間移動装置の貸

与を要請する。キングにチェンが手配を命令すると部屋を出ようとするキングの背中に追加する。

「私も同行したいが、立場上地球を離れるわけにはいかない。腕っ節のいい部下をひとり選んで鈴木に同行させろ」

「了解」

「鈴木、頼むぞ」

「なんだかワクワクするような、それでいて少し不安も感じる」

「ノロが提案しているんだ。ワクワクしかない」

チェンが鈴木を肩をぼんと叩く。

*

三人を載せた空間移動装置が月の大統領府の隣の大きな倉庫に現れる。ドアが飛び跳ねるとまず完全武装した身長二メートルもあるジャンボという名前の護衛官が頭を打たないように腰をかがめて降りる。続いて鈴木とキングが降りる。

早速鈴木がリュックから次元通信機を取り出すとノロを呼び出す。

「今到着した」

しかし、返事はない。

「ノロ、聞こえるか」

「聞こえる」

その返事は通信機からではなくジャンボの後ろから聞こえてくる。振り向くと何とそこには空間移動装置があつてドアにノロがいる。

「いつの間に！」

鈴木が駆け寄ろうとするが引力が弱い月では俊敏に動けない。

「驚かさないでくれ」

ノロがニーツと口を広げる。そのとき通信機からノロの声が聞こえる。

「それは俺じゃない」

鈴木が歩を止めるとジャンボがすぐさま拳銃を構える。

「安心しろ」

今度は目の前のノロがしゃべる。ほぼ同時に通信機からもノロの声がする。

「それは俺に似せて造つたアンドロイドもどきだ」

「もどき？」

「ロボットではないが、かといってアンドロイドでもない。まだ未完なんだ」とするとノロに瓜二つのロボット？いやアンドロイドが鈴木に頭を下げる。

「ようこそ月面空間移動装置製造工場に」

「製造工場？ただの倉庫じゃないか」

今度は通信機から声がある。

「そいつを俺だと思つて指示に従つてくれ。じゃあ」

「待つてくれ！ どういうことなんだ」

赤や緑に輝いていた通信機のボタンが消灯する。鈴木を見つめていたアンドロイドのノロが視線をジャンボに向ける。

「武器を納めてください」

首を縦に振る鈴木の手指示を確認したジャンボが銃をしまう。

「説明してくれ。その前にあなたをどう呼べばいいのですか」

鈴木が言葉を選んで質問する。

「『ノロ』で構いません。私はノロではないがノロそっくりのアンドロイドです」

「アンドロイド？」

「そう。ロボットではない。かといってアンドロイドほど人間に近い能力を持っているわけでもない。アンドロイドに限りなく近いロボットだ」

「アンドロイド……何となく理解できた」

「そのうち言葉遣いも怪しくなるけれど何でも聞いてください。できるだけ応えるように設計されています」

「わかった。ところで空間移動装置製造工場と言つてたが、この空っぽの倉庫にどうやって製

造設備を設置するんだ？」

「何度も言ってますが、ここは空間移動装置製造工場です」

ノロが倉庫の出入口に向かう。その背中に鈴木が大きな声を上げる。

「だから、どうやって……」

ノロは出入口の配電盤のようなボックスを開けると中のスイッチを押してから鍵盤を操作する。

「ウーン、ウーン」

複数のモーターが一斉に回転するような音があちらこちらからする。そしてどこからか微風が発生して鈴木たちの髪の毛を撫で始める。

「？」

鈴木たちはノロから視線を倉庫の天井や床に移動させる。今まで何もなかったのに倉庫全体がモヤがかかったように変化する。鈴木が倉庫の中央に向かおうとする。

「待った！」

ノロが大声を出す。その瞬間鈴木は何かにつぶかったように転ぶ。

「イテッ！」

顔を打ちつけたのか眉間が割れて血が噴き出す。キングとジャンボが慌てて鈴木に近づこうとするがノロが怒鳴る。

「動かないで！」

白っぽいモヤがグレーに変わってやがて霧が晴れるように消えるとそこには様々な装置や機械が整然と並んでいる。

「！」

装置や機械が鈴木たちを威圧する。

*

「説明します……」

アンドロボットのノロがニーツと笑う。

「その前に治療を」

ノロは鈴木の手口を引っ張ると奥にある小部屋に連れて行く。そして「診療室」と書かれたドアを開けて中に入る。

「工場では事故が付きものです。ここで治療します」

ベッドや薬品庫がある。

「私が治療に当たります。こう見えても医師の資格があります」

ジャンボは手際よく薬品庫から消毒液のボトルを取り出すと次はガーゼを用意する。

「すまない」

鈴木がベッドに横になってジャンボの治療を受けながら、診療室の窓から工場内を見つめる。

天井には室内クレーン装置が見える。本格的な、いや地球上のあらゆる工場より先進的であることは素人の鈴木にでも分かる。

「これまで何もなかったスケルトンの倉庫が急に立派な工場になった」

ここで鈴木が大声を張り上げて笑い出す。

「動かないでください」

ジャンボが制するが鈴木は拳を握って続ける。

「分かったぞ！」

ノロが大きく頷きながら先回りする。

「装置や機械や材料にトリプル・テンを薄く塗っていたのだ」

「どうやったのかは分からないが、要はそのトリプル・テンを取り除いた」

「そう。透明だったモノが可視化した。さて謎が解けたからジャンボの治療をまじめに受けるように」

鈴木は視線をジャンボに戻すと目を閉じてじっとする。

「ここで空間移動装置と生命永遠保持手術に必要な機材や設備を生産する。そして大統領府を改造して病院にする」

黙って治療に専念していたジャンボが呟く。

「ノロのことは知らないが、すごいことをやり遂げる男だ。一度会ってみたい」

17 豊臣自動車工業

「ノロがジャンボを見上げるとニーツと笑う。

「目の前にいるじゃないか。いいか？今から俺がノロだ。このことはあなた方三人とチェン以外には秘密だ。他言は無用」

鈴木、キング、ジャンボが神妙に頷く。

*

エアカーの製造や重力制御装置の製造をいち早く手がけたベンチャー企業の豊臣自動車工業が月面工場で輸送用の空間移動装置の製造をすることになった。

ところで豊臣自動車工業の株式を所有しているのは徳川会だった。他の自動車メーカーも月での空間移動装置の製造に意欲を目指したが、生命永遠保持手術に必要な装置や設備の製造のノーハウを持っていない。そのノーハウを持っているのは徳川会だ。大きな抵抗もなく豊臣自動車工業がこの重要な任務を担うことになった。

豊臣自動車工業のことはさておいて、月面に忽然と製造工場ができてノロがその指揮を執っていることを知った徳川はすぐさま月面工場を訪れる。そして面会を申し出るが「忙しい」の一言で断られる。

豊臣自動車工業の幹部がオロオロするなか徳川は視察と称して製造現場に向かう。幹部が慌てて追いかけるが徳川を見失ってしまう。

明るい照明と騒音の中で徳川はヘルメットをかぶって丸いメガネをかけた背の低い男を見つ

ける。意外なことにメモ帳と赤鉛筆しか持っていない。身振り手振りを交えながら工員を指導している。

会ったことはないが、徳川はその男がノロだと確信する。小走りで近寄るが声をかけるタイミングがない。それほどノロは熱心に指示を出しているのだ。そのうちノロの方が徳川に気付く。

「おい！ヘルメットは？なんだ！その格好は」

「私は……」

ノロが徳川を制すると大声を上げる。

「こいつを摘まみ出せ！」

やっと徳川を見つけた取り巻きが叫ぶ。

「ノロ！この方は徳川理事長です」

「知らん。摘まみ出せ」

徳川が急に怒り出す。当然と言えば当然なのだが、ノロではなく幹部を叱責する。

「ノロ先生を呼び捨てにすることは許るさん！」

「ノロ先生？」

幹部はもちろん周りにいた工員が驚く。

「そうだ。この方は地球にとって重要な方だ」

徳川が叫べば叫ぶほど周りで笑い声が大きくなる。すでに工員はノロに慣れ親しんでいる。誰かがヘルメットを徳川の頭に被せる。

「ここではいつ事故が起こるか分かりません。作業服に着替えて安全靴に履き替えてください」

「そうする」

徳川は素直に引き下がる。そしてノロに向かって頭を深々と下げる。

「大変失礼しました」

17 豊臣自動車工業

18 生命永遠保持機構の誕生

月面の豊臣自動車工業ではフル稼働で空間移動装置が製造される。完成した空間移動装置は次々と地球に向かい病院の内装に必要な部材や部品を積み込んで戻ってくる。

一方、工場の一角が生命永遠保持手術に必要な設備や道具の製造に割り当てられる。その分空間移動装置の製造台数が減少するので、いくら空間移動装置があっても足りない。

ノロは製造過程のボトルネックを徹底的に洗い出して生産効率を上げるが、工員の健康には最大限配慮した。工員もノロの要求によく応えた。全員、永遠の命を得るために努力を惜しまなかった。

豊臣自動車工業が空間移動装置の製造と生命永遠保持機構の工事を独占しているとは言ってもモノを造るのは人間だ。とても豊臣自動車工業の社員や工員だけで製造や工事ができるわけ

がない。全世界から有能な人材が集められる。豊臣自動車工業の独占に不満を抱いていた連邦各国の首脳は自国の有能な人間を送り込むことで、積極的に生命永遠保持機構の立ち上げに關与しようとした。

数ヶ月という短い期間でついに生命永遠保持機構の建物が完成した。あとは医療器具や薬品の搬入を待つばかりとなった。

*

徳川とキャミが完成した生命永遠保持機構の理事長室に案内される。案内したのは鈴木だった。結局徳川はノロと会談することはできなかつた。それほどノロは忙しかつた。

「ノロ先生は？」

「工場長と次世代の空間移動装置の開発にかかっています」

「次世代の？」

「時空間移動装置です」

「？」

理事長室のドアが横にスライドすると鈴木が先に入る。

「ここがあなたの執務室です」

意外と簡素な部屋だ。徳川会の理事長室と比べると広くはないし調度品も実用に徹したモノばかりだ。たとえば応接セットはない。その代わり十数人が会合できるテーブルが置かれてい

る。椅子も実用に徹したモノだった。

「素晴らしい！」

しかし、鈴木は徳川の少し落胆した表情を見逃さなかった。

「ここであなたは全人類に生命永遠保持手術を施す指示を出すことになります。歴史的な瞬間が始まる部屋です」

「鈴木補佐官！感謝します」

「私はほとんど何もしていません。礼ならノロに言ってください」

「そうしたいが私は一度も話し合うことができなかった。現場では工員と親しげに接しているのに。まるで私を避けているようだ」

「気になさらぬように。ノロは現場第一主義です」

「よく分かりました」

徳川が鈴木に向かって頭を下げるが、鈴木はこれまでとは違う空気を感じ取る。

「正式な引き渡しはいつですか」

「一週間後です。それまでに手術室や検査室の装備などの点検をお願いします。不備な点があればすぐ改善します」

徳川が鈴木の手を強く握る。

「何から何まで行き届いた配慮に感謝します」

「まだ工事中なのでくれぐれも作業着の着用とヘルメットをお忘れなく」
徳川が含み笑いをすると頷く。

*

生命永遠保持機構の完成。パーティが大会議室で盛大に行われる。とは言ってもスペースの關係上総勢数百人だ。月なので物々しい警備体制はひかれないが、集まった者は連邦各国の要人ばかりだ。

まず地球連邦政府の大統領チェンが挨拶する。

「ついに生命永遠保持機構本部が完成しました。ご努力いただいた方々にお礼を申し上げます。特にノロ……」

慌てて鈴木がチェンに近づくと囁く。チェンが咄嗟にマイクを切る。

「ついさつき、時空間移動装置が完成したので試運転すると言って欠席届を出してきた」

「えー。そういえば工場長の姿も見えない。調べてくれ」

チェンはこれ以上間が取れないと考えてマイクのスイッチを入れてにこやかにしゃべり出す。
「最大の功労者ノロは過労で休養が必要らしい」

最前列にいる徳川が手を上げる。チェンはこれを渡りの船だと考えて発言を許す。

「恐縮だが、我が生命永遠保持機構の最初の患者として治療をさせていただきたいと思います」

このよく通る声に会場から大きな拍手が起こる。

——まずい！

しかし、チエンは笑みを絶やすことなく踏ん張る。

「症状は軽いそうです。心配には及ばないとの報告を受けました」

チエンは会場を後にする鈴木を見つめてから徳川を、そして会場全体を見渡す。

「冒頭の不手際、陳謝いたします。完成パーティを続けます」

チエンが手を打つと各テーブルに用意されたシャンパンを接待役の工員が手にする。

*

鈴木は豊臣自動車工業の工場長室で図面と大型モニターを一心不乱に見つめる工場長を見つける。ふたりは鈴木が入ってきたことにまったく気付かない。

「工場長」

呼びかけても返事はない。

「工場長！」

「あっ」

やっと工場長が顔を上げる。

「完成パーティが始まっている」

「えー！すっかり忘れていた」

「どうしたんだ？」

鈴木が近寄ると目の前の図面を指さす。

「時空間移動装置の設計図です。電子ファイルでは見にくいのでペーパーにしました」
図面の厚みは十センチ以上はある。

「時空間移動装置？」

鈴木は時空間移動装置に搭乗した経験があるがあえて尋ねる。

「空間移動装置など時空間移動装置に比べればオモチャです。少し前におにぎり盗難事件が頻発しましたが、これを使ったのではないかと」

ノロはニーツと口を広げるだけでしゃべらない。

「大きさは？」

「空間移動装置と変わりません」

鈴木はおにぎりだけでなく高度な性能を持った大型の機械や装置も盗まれたことを思い出す。
「だったら機械など積み込むことは不可能だ」

「確かに。でもこの時空間移動装置を大型化しているのはノロの方舟を見れば明らかです」

ノロは答弁を工場長に任せて何もしゃべらない。

「私は自動車に始まりエアカーの製造に携わってきました。そして空間移動装置の製造責任者に抜擢されました。だからといって自慢したことはありません。でもこの分野にかけては第一

人者のひとりとしてこの時空間移動装置の設計図は……なんと云ったらいいのか……」

*

「いったい何を造っているんだ」

親友のような付き合いをしていた工場長がノロに尋ねる。

「時空間移動装置」

「時空間移動装置？」

「空間を瞬間的に移動すると言っても時間をコントロールして移動しなければ……えーと大昔、アイシタラ、アイシユンタ、じゃない相対性理論を……」

「アインシュタイン博士のことですね」

「そうだ。アインシュタインの理論を一言で言えば、瞬間的に移動しようとするとき必ず光の壁が邪魔をする」

勘がいい工場長が反応する。

「音速を超えようとするとき音の壁を乗り越えなければならぬのと同じように時空間移動装置は光の壁を超える装置だとしても」

「そうだ。プロペラ機ではいくら頑張っても音速を超えることができなかった」

「まったく異なるジェットエンジンを開発して音の壁を破った」

「いいたとえ話だ」

「でも空間移動装置と時空間移動装置の形は同じですね」

「当然だ。時空間移動装置を開発するために空間移動装置を造ったんだ」

「そうだったんですか！」

ノロは鼻の穴を最大限に広げる。これは自慢のポーズだ。

「どのようにして光の壁を突破するんだ？」

しかし、広げた鼻の穴で大きく空気を吸い込んだ後しぼめる。

「正直言うと俺の独創的なアイデアではない」

「どんな発明も何らかのヒントで生まれる。そのヒントに気付いて素晴らしいモノを造ることこそ独創的だという。ヒントはどこにあった？」

工場長のくすぐる言葉にノロは丸いメガネの奥で目を細める。

「俺とサブマリン八〇八のなり染めから話さなければならぬな」

「その話は何度も聞いた」

「？」

「酒を酌み交わすと必ず出てきた話だ。何度聞いてもおもしろい。アテなんかいらぬぐらいに」

「えー！酒を飲んだら極秘情報を毎回しゃべっていたのか」

ノロは完全に工場長を信頼していた。しかし、アンドロボットのノロがなぜ酒が飲めるのか

は定かではない。

「トリプル・テンがサブマリン八〇八を時空間移動船に変身させたが、そのカラクリはよく分からん」

「えっ！その話は初めてだ」

「どうやらトリプル・テンは宇宙の大部分を占める得体の知れないダークマターやダークエネルギーそのものらしい」

「聞いたことはある。大量にあるはずなのにその正体はまったく分からない謎の物質、あるいはエネルギーの事ですね」

「何度も言うがカラクリはわからない。でもトリプル・テンをうまく使うと空間を自由に移動することが可能なんだ」

「空間移動装置のことですね。それを発展させて時空間移動装置を製造する」

「言いながら急に工場長の表情が険しくなる。」

「軽々しく私にそんなことを話していいのか？」

「俺はあんたを信頼している」

「人間は裏切る動物だぞ」

「工場長に裏切られても俺は構わない」

「ノロ！何を考えているんだ」

ノロは真剣なまなざしの工場長に囁く。

「俺はノロではない。ノロの影武者のような存在だ。このことについてはいくら酔っても白状しない」

「影武者……？」

*

パーティが終わると連邦各国首脳は出口で徳川、チェン、鈴木と握手して空間移動装置に乗り込んで月を後にする。

横にいたチェンが徳川に声をかける。

「ご苦労様でした」

「こちらこそ、立派なパーティを開催していただきありがとうございます。しかし、さすがに疲れました」

徳川が肩を落とす。それまで目立たないように控えていたキャミが徳川に近づく。

「上着を脱がれたら？」

「大統領の前で失礼だ」

「遠慮は要りません」

チェンが先に上着を脱ぐ。

「少しばかり酔いました」

チェンに促されて徳川も上着を脱ぐとその上着をキャミが受け取る。

「そうですね」

「わがままを言うのは何ですが、理事長室のソファで少し横になっても構いませんか？」

「どうぞと言いたいところですがソファはありません。確かに疲れたとき、少し横になれる必要ですね。用意させます」

「いや。立派な椅子がある。それでいい」

「もう理事長室はあなたの部屋です。ご自由にお使ください」

チェンが応じると鈴木が一步踏み出す。

「場所はおわかりでしょうか、私をご案内しましょう」

「大丈夫です。私が案内します」

キャミが鈴木を制すると徳川とともに会場を出る。そんなふたりの後ろ姿をチェンと鈴木が見送る。

*

理事長室に入ると徳川がドアをロックする。そして少し間を置いてから大声で笑い出す。そして拳を握りしめるとキャミに近づく。

「我慢した甲斐があった」

キャミはすり抜けると徳川の上着をハンガーに掛ける。背中に徳川の荒い息づかいを感じる

と再び離れる。

「これからが大変だわ。全人類に生命永遠保持手術を施すなんて本当にできるんでしょうか。予防接種のようにはいかないわ」

キャミはそう言うってから部屋の隅の目立たない場所に冷蔵庫を見つける。

「環境は整ったし、生命永遠保持手術も実用化のレベルにある」

「手術に必要なトリプル・テンを十分確保できるのかしら」

「大丈夫だ。ノロが保証している」

「私はノロを余り信用していません。気まぐれすぎます」

キャミは冷蔵庫を開けるが返事はない。

「女の私がそう思うのですから、かなり気まぐれです」

すぐ後ろに徳川がいることを感じたキャミが缶コーヒーを取り出す。

「冷たいけれど飲めますか？」

目の前の徳川から返事はない。その目は年甲斐もなくランランと輝いている。少しだけ身をよじってキャミは缶コーヒーのプルに指をかけて引つ張るとコーヒーを一気に飲む。

「美味しい……」

そしてもう一方の手に持っていた缶コーヒーを有無を言わずに徳川に渡す。その缶の文字にキャミが驚く。表面には「10」の文字が縦にみつつ並んでいる。

「理事長！これはトリプル・テンのコーヒーだわ」

いつの間にか徳川が肩で息をしている。キヤミは覚悟を決めるように目を閉じる。そのときインターフォンからチャイム音がする。

「徳川理事長。鈴木です。ソファーをお持ちしました。ドアロックを解除してください」

19 意外な抵抗の芽生え

生命永遠保持手術を受けて二十代に若返った徳川の記者会見が終わる。割れんばかりの拍手を背に受けてレセプションに臨むために会見場を出る。ここは日本で一番大きな御陵を見下す小高い丘に建築された最新鋭の第五生命永遠保持機構だ。

地球連邦政府があるアメリカのニューヨークの第一生命永遠保持機構を皮切りにヨーロッパのスイスのジュネーブに第二生命永遠保持機構が、第三を中国の上海に、第四をアフリカのエジプトのカイロにというように生命永遠保持機構を建設した。インドやブラジル、それにロシアなどにも生命永遠保持機構が設置されたか、間もなく完成する。これらの一桁台の番号を持つ生命永遠保持機構はその地域での基幹生命永遠保持機構としての役目を担う。

さらに二桁台の番号が割り当てられる準基幹生命永遠保持機構が、人口が多い国の首都や人口密度の高い地域に建築中だ。そして三桁台の生命永遠保持機構の建設地も決まっています。基礎

工事が始まっている。そのあとは小規模ではあるが、四桁台の生命永遠保持機構を地球の隅々まで建設する予定だ。その数、総数で一万棟に迫る。

この壮大なプロジェクトに世界中がわき上がる。夢を与えれば政治はうまくいく。景気は良くなり、これまでの様々な紛争もすべて消滅するかに見えた。しかし、新たな問題が起きようとは誰も思っていなかったが、休火山の底のマグマだまりゆつくりと膨張するような兆候がすでに発生していた。しかし、誰もが夢に酔いしれていたので用心することなく山登りを楽しんでた。

*

第五生命永遠保持機構の専務室で生命永遠保持手術を受けた者のリストを徳川が見つめる。

「他の生命永遠保持機構では主要各国の要人や超富裕層が多いのに、日本では政治家はほとんど受けていないな」

専務理事が応じる。

「政治家の場合、絶えずマスコミに監視されています」

「だから首都ではなく、この地に主力生命永遠保持機構を建設したのだ」

「超富裕層はお忍びでここに来て手術を受けています」

「その方がいい。日本の政治家は意外と貧乏だ」

「そのようです。微々たる不正な政治献金で絶えずスキャンダルが勃発しています」

「超富裕層の方が大金を落としてくれる」

徳川が満足そうに御陵を見下ろす。第五生命永遠保持機構で手術指導をする白衣をまとったキヤミが徳川と専務理事の言葉が途切れたところで進言する。

「計画通り生命永遠保持機構の建設が進んでいます。医師の確保が思ったほどできません」

「手術しながら覚えさせればいい。私がキヤミにしたように」

「そうのようにしていますわ」

ここで専務理事が言葉を挟む。

「キヤミの手術を見てめきめき頭角を現すちよつと変わった医師がいます」

徳川が振り返る。

「変わった？誰だ？」

「リンメイという考古学者です」

「考古学者？」

今度はキヤミが応える。

「中国人です。もちろん医師免許は持っています」

専務理事が補足する。

「理事長が眺めておられた御陵に興味を持っていたのでこの第五生命永遠保持機構に就職しました。動機に問題がありました。医師不足ですので条件を付けて採用しました」

「どんな条件だ？」

「当生命永遠保持機構で生命永遠保持手術の腕前が半年以内にベストテンに入れば御陵の研究をしてもいいと。もちろん冗談半分ですが」

徳川は専務理事からキャミに視線を移す。

「私は各主要生命永遠保持機構で手術指導をしなければならぬし、理事長のお供もしなければなりません」

最近余り現場に赴かない徳川にキャミは苛立ちを持つが、悟られないように言葉を選ぶ。

「ここに来て手術指導するのは週に一度あるかないかです。リンメイは私が手術をするときは必ず立ち会います」

「それで」

「専務理事のおっしゃるとおり、すぐに頭角を現しました。第一から第九までの生命永遠保持機構で手術とその指導してきましたが、彼女のような医師はいません」

「会ってみたい」

専務理事が残念そうな表情をする。

「今日は理事長の記者会見が予定されていたので休暇を取っています。御陵に出かけたのかもしれません」

一瞬徳川は「ムッ」とするがすぐ気を取り直す。

「そうか。残念だ」

この一瞬の表情を見逃した専務理事が気軽に尋ねる。

「理事長のことでですから医師の確保の件、なにか手を打たれているのですか？」

再び徳川の表情が厳しくなる。

「わしがサボっているとしても？」

専務理事の表情がこわばる。

「いいえ。私なんかの考えも及ばない素晴らしい計画を立てておられるのではと思っ
ていま
す」

専務理事は今度は大げさに腕時計を見る。

「まもなく記者たちがここを離れます。一応見送らなければなりません。席を外してもよろ
い
いでしょうか」

徳川は返事をしないが専務理事は直立不動の体勢から深々と頭を下げ、部屋を出る。ふたり
きりになったとたん徳川がキャミに近づく。キャミも徳川に近づく。

「永遠の命を得たとはいえ、へとへとだわ。正直言って手術中にウトウトすることがあるわ」

「それは大問題だ」

「分かっているくせに」

「わしも欲求不満になっている。今日は休め」

「ありがとうございます」

キヤミは目の前の徳川に背を向けると専務室を出る。

*

一見バラ色の未来を全人類に与えた生命永遠保持手術だったが、現実には様々な問題が露呈した。

至るところで四桁台のミニ版の生命永遠保持機構の建設が開始されたころ、既に生命永遠保持手術を受けた者は我が世の春を謳歌する。そしてまだ受けていない者から不満の声が噴出する。特に貧困にあえぐ者や難病に苦しむ者……なんとと言っても老人からの要求が高まる。なぜ弱者を優先して手術を行わないのか……。ノロの条件を守るのはなかなか難しかった。

当初、手術にかかる費用は非常に高く、とても庶民が払える額ではなかった。それは生命永遠保持機構を儲けさせるためではなく、機構の建設と医師の教育のための資金を集めだった。

一応誰もが納得していたが……。

しかし、明日死ぬかも知れない老人や難病を患った者やその家族はまさしく必死になって連邦政府を突き上げ、各連邦政府は地球連邦政府に早期の生命永遠保持機構の建設を要請する。箱物はある程度早期に建設できるが、問題は医師の確保だった。

手術が間に合わず死んだ本人はさぞかし悔しかっただろうし、残された家族から訴えられることも多々あった。

「特に夫が手術を受けたが、順番待ちで妻の手術が間に合わなかったとか、この手術の性格上、成人しなければ手術を受けられないが、親は優先的に手術を受けられたのに難病の子が受ける前に死亡したとか……悲劇があちこちで起こった。」

一方、富裕層は一族の繁栄を目指して比較的若い夫婦は手術を受ける前に子造りに励んで、子孫を増やしてから手術を受けた。

批判や不満は生命永遠保持機構に向かうことはなく、連邦各国を通じて地球連邦政府に向かった。

あれほど地球のために働いたチェンや鈴木に対する評価まさしく地に落ちた。もちろん擁護する者もいるが、いまやどうしようもない。政治家という職業はそういう意味では過酷だ。

しかし、ふたりは生命永遠保持手術を受けることなく黙々と自分の職務を果たそうとするが、罷免の要求が高まる。徳川は自ら手を下すことなく、再びチェンと鈴木を葬ることを考える。

*

大統領専用電話が点滅するとチェンが受話器を取る。スミスからだった。スミスは独特の笑い声を出すことなくまるで別人のようにしゃべる。

「徹底的に利用されたな」

「用心していたんですが」

「潔く辞めるか」

「それは……」

チェンが言葉を濁すと受話器を置く。

スミスはすぐ気がつく。

——盗聴されている

ペンを握ると手紙を書き始める。書き終えるといねいに折りたたんで部屋の隅に向かう。

——ファックスもダメだろう。ならば手紙のまま転送するのが一番だ

スミスは物質転送装置のふたを開けるとチェンの、続けて鈴木のアドレスを入力する。そして手紙を入れてふたを閉めるとスイッチを押す。

——二度あることは三度ある……ということか

スミスはため息をつく。

——いったい、ノロはどういうつもりなんだ

ノロと連絡を取ろうとすればいつでもできるのにスミスはためらう。そのとき物質転送装置のチャイムが鳴る。チェンか鈴木かのいずれかの返信に違いない。ふたを開けて手紙を取り出す。鈴木からだった。

「仏教界から『生命永遠保持手術法』案に対して反対表明が地球連邦政府に提出された。その理由はトリプル・テン引き渡しの条件として全員に手術させろと言うノロの言葉の意味を地球連邦政府が誤って解釈していると考えたからだ。ノロが言いたかったのは一部の特定の人間の

みに手術することはダメだということだ。そして手術を受ける受けないは個人の自由だ。私も……」

スミスは手紙を読みながら頷くが、目を閉じると立ち上がる。

「何らかの手を打たなければ」

*

徳川は地球連邦政府に圧力を掛けて早急に生命永遠保持手術法を成立させようとする。この法律さえ通せば全人類はこの手術を受けなければならず、その後は徳川にひれ伏すことになるからだ。それにこの法律に反対する者などいないと高をくくっていた。ところがである……。様々な宗教団体の抵抗が激しさを増しています」

地球連邦政府の法制局長から連絡が入る。法制局長といっても徳川の息のかかった者だが……。受話器を持った徳川が応じる。

「狼狽えるな。永遠の命を得れば誰も信仰心を持たなくなるはずだ」

「しかし、宗派を超えて結束しています。このままでは……」

徳川が法制局長の発言を無視する。

「ずれ宗教そのものが意味をなさなくなる。信者は必ず生命永遠保持手術を受けたがるはずだ。それを阻止しようとパフォーマンスしているだけだ」

「とても芝居には見えません」

「信者を失えば法王や教祖といえども失業する。だから必死になって抵抗する。しかし、彼らも永遠の命は欲しいはずだ。プライドを傷つけないよう、裏から手を回す。おまえは惑わされることなく法律の成立に専念しろ！」

「分かりました」

受話器を置くと徳川が側近を見つめる。

「鈴木とチェンの足取りは？」

「不明です」

「下手に盗聴などするからだ！」

徳川が側近のひとりの胸ぐらを掴むがすぐに緩める。

「スミスの動向は？」

「財団本部と博物館を往復しているようです」

「相変わらずだな……うっ！」

徳川の顔色が急変する。

「スミスを徹底的にマークしろ！」

*

時空間移動装置から鈴木、チェン、そして最後にスミスがゆっくりと降りる。そこは宗教サミットが開催されているバチカンだった。法王が親しみを込めて鈴木、チェンを抱きしめる。

巨漢のスマスには抱擁を諦めて手を握ると周辺から笑い声が起こる。法王が三人を会場に案内する。そこにはこのサミット開催に賛同した宗教団体の代表者が集まっている。その数は百人を下らない。

*

悲壮感が漂うなか日本の僧侶が発言する。

「このままでは宗教が消滅する。しかし、永遠の命を手に入れたとしても心のよりどころは必要だ」

ここで首を激しく横に振る。

「いや。生命永遠保持手術が云々と騒がれたずっと以前から我々は信者に真の意味で心のよりどころを提供していなかった」

「そんなことはない！」

ある神父が否定すると法王が割って入る。

「発言者の話を最後まで聞いてから意見を述べるように」

そして僧侶を促す。

「続けてください」

「恥ずかしい話、わしは人々に心のよりどころを与えるどころか、自分自身がそのよりどころを探していた。それは宗教の名を借りたテロ行為が蔓延していたころでした。なすすべもなく

おろおろしていた。ところがそのテロから生命を守る方法が徳川によって開発された。そう生命永遠保持手術です。もちろん全身を切り刻まれたり、火を付けられて黒焦げになれば生き返ることはないだろうが……」

その僧侶は手を合わせて目を閉じる。

「以上です」

法王は僧侶から先ほど発言した神父に視線を移したあと会場を見渡す。

「我々が直面する問題を簡潔に示していただいた。さて議論を進めましょう」

しかし、その神父から発言はない。代わってインドの聖職者が僧侶に好意的な視線を向けながら発言する。

「私も同じ事を考えていました。以上です」

「他に異議や追加の意見はありませんか」

法王が会場を見渡すが、目を閉じるか、軽く頷く物ばかりだ。少し間を置いて誰かが発言する。

「徳川が推進する生命永遠保持手術法が成立すると徳川教という宗教が世界を支配することになる」

この発言で全員が危機感を共有する。そして視線がチェンや鈴木に向けられるのを察した法王が、まずチェンを指名する。

「ここで地球を引っ張ってきた元大統領チェンさんの意見を聞きましょう」

「呼び捨てで結構です。それにおっしゃるとおり大統領ではありません」

チェンが軽く頭を下げる。そして鋭い視線を会場の隅々に向ける。

「これから何をすべきか」

視線を緩めずに良く通る声を会場に発する。

「皆さんは生命永遠保持手術を受けるのですか？受けるとすればいつですか？」

法王はこの言葉を聞くために三人を宗教サミットに招いた。自ら同じ事を言っても意味がないことを承知していたからだ。聖職者以外の人間でしかも様々な困難な事案を克服した経験者の言葉を法王は求めていた。しかし、黙ったままチェンの次の言葉を待つ。しばらくしてチェンに替わって鈴木が発言する。

「正直に心の中を吐露してください。いいですか。生命永遠保持手術を受けるという方、挙手願います」

急な質問に聖職者といえどもすぐに対応できないのか、まばらだが一部の聖職者が手を上げる。

「それでは受けられないという方、挙手を！」

日本の僧侶とインドの聖職者、そして法王だけがすつと手を上げる。

「どちらにも挙手しなかった人はいずれ受けるということですね」

ざわめきが会場に充滿する。

「それでは確認します。迷っている方は？手を上げてください」

さっと手を上げる者やおおずとおおずと手を上げる者に続いて、周りの状況を伺いながら手を上げる者……。チェンと鈴木が数を確認する。どうやらすべての聖職者が「受けない」「受ける」

「迷っている」のいずれかに手を上げたのではなかった。

チェンが念を押す。

「何も多数決で手術を受ける、受けないを決めるために質問したではありません。心のよりどころを提供する皆様方の手術に対する気持ちを知りたかったのです」

しかし、チェンの念の押し方が中途半端だと感じた法王が引き継ぐ。

「私は手術を受けるつもりはない。たとえ頑固者だと批判されようとも。しかしこれぐらいの気概がないと説法しても相手に安らぎを与えることはできない。迎合すれば迫力を失ってしまう」

この法王の言葉に感激した日本の僧侶が手を上げる。

「我々は生命永遠保持手術を受けることなく子孫を残して有限の身がいかにかに大事なことを示す必要がある。そういう生き方を示すことによって、永遠の命を得た人間に説法するのが宗教ではないのか。そうすることによって自らの心に安寧を宿らせることができる」

討論が深まる。しかし、結論は出ない。

会場を後にしたチェン、鈴木、スミスが噴水にたどり着く。そして歴代の法王の胸像を見上げる。

「永遠の命を得れば胸像もあまり意味がないな」

鈴木の言葉にチェンは反応しない。スミスがため息を漏らした後、ふたりに語りかける。

「ここにいれば安全だ」

「そうだな。スミスは？」

「博物館に戻る」

「戻って何をするんだ？」

チェンが首を傾げる。

「徳川の暴走したを阻止する」

「阻止？」

「戦う」

「戦う？ どうやって？」

「武器はいくらでもある」

「何を言ってるんだ。みんな骨董品じゃないか」

「彗星という骨董品の戦闘機で最新鋭戦闘機を撃墜した」

*

鈴木がニューヨークから五大湖向かったときの空中戦を思い出す。（「トリプル・テン」第十二章参照）

「忘れもしない！プロペラ機がジェット機に追いついて攻撃した。あれにはびっくりした」

「それにUボートも所有している。サブマリン八〇八より手強いぞ。潜水戦車もある」

「まさか本気じゃ？」

「ほっほっほっ」

スミスがポケットからリモコンをふたつ取り出すと操作する。しばらくすると風切り音がすると時空間移動装置が、しかも二基だ。

「二基？」

スミスがリモコンを鈴木に手渡す。

「これは空間移動装置ではない。時空間移動装置だ」

「なぜスミスが所有しているんだ？しかも二基も」

「ほっほっほっ。何基でも手に入る」

いつの間にかバチカン市民が集まっている。

「これは何だ！」

「タイムマシーンだ」

スミスが大きく手を広げて応える。

「生命永遠保持手術とかタイムマシンだとか、いったいどういうことだ？」
スミスは市民の疑問に応じることなくゆっくりと時空間移動装置に乗り込むとドア付近で振り返る。

「さらばじゃ」

チェンと鈴木がバチカン市民を制する。

「離れてください。危険です」

ドアが閉まると時空間移動装置が回転を始める。砂煙が舞い上がり黒い時空間移動装置はグレーから白に変わる。そしてフツと消える。風は収まるが声にならない驚きの渦は収まることはなかった。もう一基機の時空間移動装置もいつの間にか姿を消している。

時空間移動装置内でチェンがリモコンを握りしめる鈴木の手を見つめる。

「これからどうするんだ？」

鈴木は首を横に振る

19 意外な抵抗の芽生え

20 博物館の消滅

ニューヨークでは総ガラス張りの強大なビル内にあるスミス博物館が地球連邦政府軍の戦車や装甲車に包囲されている。高層ビルではないが敷地はニューヨークで一番広い。高くはないといっても百メートルはある。

大型バスの屋根を埋め尽くした拡声器が太陽を反射して眩しいビルの最上階に照準を合わす。「スミス！そこにいるのは分かっている。投降しろ」

もちろんビルがしゃべるわけがないので返事はない。

「一時間待とう。投降しなければ博物館を破壊する」

上空には十数機の武装ヘリコプターが旋回している。しかし、ビルは沈黙したままだ。周辺の道路はすべて封鎖されてアリ一匹たりとも逃走することはできない。少し離れたところで地球連邦陸軍の大佐が司令官として指揮を執る。

「周辺ビルの退去作業が終了しました」

「これで躊躇なく攻撃できる」

「司令官。聞くところによるとスミスは古い兵器の収集家だと」

「何を言いたい」

司令官が部下を睨む。

「すぐ突入すればいいのでは」

「スミス博物館の骨董品を侮るな。プロペラの水上戦闘機がアメリカ空軍の最新鋭戦闘機を撃墜したという報告がある」

「それは空中戦の話。垂直上昇機じやあるまいし、ビルに滑走路はありません！」

「命令は私が出す。油断するな」

そのとき誰かが興奮した声を出す。

「ビルが！」

その声に促されて司令官を見上げるが眩しくはない。それどころか窓が黒色に変化している。

「内部シャッターを閉めたのか」

すぐさま部下が進言する。

「あのビルにはシャッターはありません。太陽光線は窓ガラスでコントロールするシステムを採用しています」

誰かが叫ぶ。

「真っ黒になった！」

直ちに拡声器からビルに向かって警告が発せられる。

「妙なことをすれば即刻攻撃する！」

しかし、その声は上ずっていた。

*

月面の生命永遠保持機構本部では徳川が地球連邦政府の大統領からの報告を受けてスミス博物館が映るモニターを見て叫ぶ。

「トリプル・テン!？」

冷静ではあるが驚きを持ってキャミもモニターを覗き込む。

「理事長のおっしゃるとおり博物館はトリプル・テンに包まれたようです」

キャミは幾度もスミス博物館を出入りしていた。つまり博物館を熟知していたが、まさかトリプル・テンがビルそのものを覆っているとは思ってもよらなかった。

「窓にカーテンやシャッターはありませんでした。いつかそのことを質問したとき、スミスは『ラーピードグラスという特殊なガラスを使って太陽光をコントロールしている』と言っていたわ」

「ラーピードグラス?」

「光の強さに反応して光の透過を制御する偏光ガラスのことです」

「確か、サングラスにそんなものがあつたな」

「ラピードグラスではなくトリプル・テンだったなんて。でもおかしいわ。ノロがトリプル・テンをメキシコ湾の底から手に入れる随分前にスミス博物館は建設されている」

徳川が引き継ぐ。

「サブマリン八〇八をノロに提供したのはスミスだ。ノロから分け前を貰ったのだろう」

「そうだとは思いますが。でもあんな大きなビルをトリプル・テンで覆うにはそれなりのトリプル・テンが必要でしょうし、どうやって、いえ、いつの間にビル全体に塗りつけの……」

ここでキャミが大きく首を横に振る。

「……分からない」

珍しく頭をかきむしる。

「どうやって……いつ？」

徳川が受話器を持つと大統領を呼びだす。

「攻撃するな！」

「えー？」

「何かがある。まだ手を出すな。包囲網は堅持しろ」

冷静さを取り戻したキャミが頷く。

「賢明な判断です。私がスミスの真意を確かめます。許可を」

ここで徳川はスミスが嫉妬してキヤミを批判した会見を思い出す。

キヤミの女としての勘は鋭い。しかし、その表情は優しい。

「抱いてください」

キヤミが徳川にもたれかかる。

*

キヤミの後ろ姿が闇に吸い込まれるように博物館の入り口付近で消える。勝手知ったる博物館。キヤミは暗くてもエレベーターホールにまっすぐに向かう。そしてあるエレベーターの前に立つと声を出す。

「最上階へ」

ドアが開くと乗り込む。何のショックもなくすぐにドアが開く。エレベーターホールから廊下に出るとまっすぐある部屋に向かう。その部屋の前に到着するとドアが左右にスライドする。さらに奥の部屋に進む。

「ようこそ」

「お久しぶりです」

大柄なキヤミといえどもスミスの前ではスリムに見える。

「エレベーターを空間移動装置に改造したのですか」

「私の趣味は古い物ばかりではない。新しい物にも興味がある」

キヤミはニツコリ笑いながらシオルダーバッグをソファアに置くと腰を落として脚を組む。スミスが向かいに座ると例の笑い声を上げる。

「ほっほっほっ。もう生命永遠保持手術は受けたのか？」

「ええ」

「徳川の様子は」

キヤミが両手を大きく広げてから腕を組む。

「ダメですわ。ほんの少しばかりのトリプル・テンを手に入れただけで元の独裁的な性格が復活したわ」

「トリプル・テンを手に入れるまでは下手にでていたが」

「やっかいな子供だわ」

「コーヒーはどうだ」

キヤミがさっと立ち上がる。

「私が入れましょう」

キヤミは部屋の隅に行くとき際よくコーヒーを準備する。

「やっかいな子供とは？」

「手術を受けると女は完全にではありませんが月経が止まります」

「やはり、そうか」

「ところが男の性欲は衰えません」

「個人差はあるが、そのとおりだ」

「キャミがカップを載せたトレーを持ってスマスに近づく。」

「と言うことは、あなたも生命永遠保持手術を受けたということですね」

「鋭い指摘だが、その類いの手術は受けてはいない」

「カップを差し出すキャミの手が少し震える。確かにスマスの体型は元のままだが、声の張り」といい、意外に素早い身のこなしといい、以前のスマスではないことにキャミは気付く。

「生命永遠保持手術意以外に永遠の命を手に入れる方法があるのですね」

「ない」

「どういう意味ですか！」

「私にも分からない」

「キャミは期待を裏切られたような切ない表情を浮かべる。」

「生命永遠保持手術は絶対ではないということだけは確かだ。他次元からの影響を受けた場合生命永遠保持手術の効果は消滅する」

「何をおっしゃりたいのか、理解できません」

「スマスがうまそうにコーヒーを飲む。」

「美味しい。キャミのコーヒーは格別だ。熱くもなく温くもない」

話を逸らされたキャミが不満そうに口を丸める。スミスは一気にコーヒーを飲み干す。

「ほっほっほっ。幼少期のキャミを思い出すな。可愛い女の子だった」

キャミは仕方なく話題を変える。

「このビルはトリプル・テンに覆われているのですか？」

「やっところここへ来た目的を明らかにしたな」

「私はスパイです」

「スパイとしては美しすぎる。まるで007の世界だ。もともと私はジェームス・ボンドにはほど遠いが」

「茶化さないでください」

「このビルだけじゃない。趣味で集めた骨董品も品質保持のためにトリプル・テンで覆われている」

「！」

沈着冷静なキャミも言葉を失う。

「ここは私の城だ。数々の戦争に使われた悲しい兵器の魂を保存している。その兵器がトリプル・テンをまとった」

キャミがその後のスミスの言葉を引き継ぐ。

「どんな攻撃にも戦争という歴史を背負った古い兵器が立ちふさがるでもおっしやりたいのですか」

「ほっほっほっ。キャミは可愛いかったが、利発な女の子だった。普通の子供は『なぜ、なぜ』と質問して大人を困らせるが、キャミは違っていた」

「お父さん」

「キャミ」

「私を引き取って親代わりに育ててくれてありがとうございます」

「それは秘密だ。キャミにはれっきとした両親がいる。私は少しばかり援助しただけだ」

「全人類が生命永遠保持手術を受けた後、どうなるのでしょうか」

「すでに自分なりの答えを持っているようだな」

「やはり、そうですね」

キャミはシオルダーバッグを肩に掛けるとスミスに頭を下げる。

「ありがとうございます。もう再会することはないかもしれませんが、さよなら、お父さん」

「親子という絆に別れはない」

キャミは部屋を出ながら手の甲で涙をぬぐう。

*

「すべての兵器もトリプル・テンに覆われていると！そんなバカな。あれだけ苦勞して手に入

れたトリプル・テンを遙かに上回る量を確保しているとは。そんなことチェンや鈴木から聞いたことないぞ」

「キヤミは徳川の興奮が収まるのを待つ。」

「おまえ、騙されたのでは」

「すでに詳しく報告したキヤミは沈黙を続ける。」

「ひよつとしてスミスとよりを戻したのか」

「キヤミは言葉に出さずに徳川を睨み付ける。そして背中を向けてドアに向かう。」

「待て」

「お好きなようにしてください」

「慌ててキヤミに追いつくと腕を取る。」

「悪かった」

「キヤミは徳川を見つめて応じる。」

「私は一切スミス博物館攻撃の中止を進言していません。攻撃体勢の強化を求めただけです」

「もはや地球連邦軍は烏合の衆ではない。いくらトリプル・テンに覆われていると言っても所詮は古いビルだ。躯体はガタガタのはずだ」

「トリプル・テンを侮ってはいけません。それにスミスは元グレーデッドの最高幹部でした」

「ノロに殺された総統の前任者だったことぐらい、わしも知っている」

「それは私がお教えしたことです。問題は彼の力量が衰えていないことです。それにグレーデッドの残党の動きも警戒しなければなりません」

「分かった。肝に銘じておこう」

徳川は机に向かうと受話器を取る。

「大統領。地球連邦軍に攻撃命令を！」

*

数十機の武装ヘリコプターがスミス博物館にミサイルを撃ち込む。もうもうたる砂塵が舞い上がる。それでもミサイル攻撃が続行される。

「粉々になったはずだ」

徳川は現場の様子を映し出す大型のモニターを見つめる。視界は最悪で何も見えない。

「もういいだろう」

徳川が大統領に攻撃の中止を伝える。モニターの画面が宇宙ステーションからの映像に代わる。周辺のビルのほとんどが爆風や激震で倒壊している。しかし、中心には黒っぽい球体のような物がうっすらと見えている。

「なんだ！」

「トリプル・テンだわ！」

「まさか！」

慌てて徳川は受話器を取り上げる。

「攻撃続行！」

遙か上空からの映像は真つ黒な球体を捕らえている。周りの武装ヘリコプターが攻撃態勢に入る。キャミがリモコンを操るとモニターの画面が四分割される。真上、横からと四つの映像が現れる。すべての画面に黒い球体が映っている。

「浮かんでいる」

キャミがパソコンを操作する。ここで初めて黒い球体の大きさが判明する。

「直径は百メートル余り……」

「何をしている。早く攻撃しろ」

徳川が興奮する。呼応するように多数のミサイルが発射される。もう砂塵が舞うことはない。球形となったトリプル・テンがゆっくりと上昇する。急きよ投入されたジェット戦闘機からもミサイルが発射されるが命中しても微動だりせず高度を上げる。しばらくするとが追いつけないほどのスピードで上昇する。高度三万メートルに達するともはや戦闘機といえどもどうにもならない。

「まさか宇宙ステーションを攻撃するつもりでは」

キャミが珍しく悲鳴を上げる。

「なんと言うことだ」

徳川がへなへたと床に座り込む。そのとき球形のトリプル・テンは速度を落とすと停止する。今度はゆつくりと落下に転ずる。その速度が増すと黒い球体が徐々に白くなる。そして真っ白から火の玉に変化して落下速度が加速する。

ところどころでかつてのメキシコ湾の中心部は穴が開いて大西洋の海水が渦を巻いて流れ込んでいく。それでも直径十数キロの湖でブラックホールのように海水とともにあらゆる物を飲み込む。泳ぎの達者な魚や鯨などはこの穴を通り抜けて湖化した元砂漠に移動してそこで子孫を増やした。そしてそれまでの砂漠は一変して生命が溢れる楽園となった。

「推定到達地点はメキシコ湖中心部です！」

「なに！」

さてここで「トリプル・テン」の物語の冒頭部分を思い出して欲しい。

太古の時代、巨大な隕石が衝突してメキシコ湾が形成されるとともに気候異変が起きて恐竜が絶滅したとされていたが、実際は隕石ではなくトリプル・テンが衝突して巨大なクレーターを形成し、海水が流れ込んでメキシコ湾ができあがった。同時に衝突時の激震でクレーターの中止部の下には巨大な空間が誕生した。

しかし、トリプル・テンが栓の役目を果たして海水がその空間に流れ込むことはなかった。そのトリプル・テンをノロがサブマリン八〇八で取り去った。一気に海水が流れ込んで海面下降が起こり、海洋国の領土が一気に広がるとともに砂漠だったところが巨大な湖に変わった。

つまり地球環境が一変した。

*

そのメキシコ湾湖に向かって大気圏に再突入して輝く球体と化したトリプル・テンが落下落
する。

ここはメキシコ湾湖から各大砂漠湖に向かう潜水輸送船舶の航行を管理する、いわば空港の
管制塔のような役目を担う地球連邦政府の「メキシコ湾船舶管理センター」だ。

「降下速度が落ちました」

球体の落下速度が急に落ちる。太陽のように輝いていたがサングラスを外しても見えるよう
になる。この球体の最終到達地点が明白になる。

「メキシコ湾湖の水中を航行する潜水輸送船舶への警告は徹底されているか」

「湖底近くまで潜航していた船舶はそのまま各大砂漠湖へ向かいました。そのほかの船舶は浮
上したか浮上中です」

「急速浮上を促せ」

「すでに勧告済みです」

管理センター長は頷きながらモニターを注視する。

「着水します」

トリプル・テンが大きな水柱を上げて海中に消える。

「浮上している各船舶の船首の向きを確認しろ！」

「すべて湖の中心部に船首を向けています」

「強大な波が起こる！全速力で波に向かうよう指示しろ。そのあと第一波の波をやり過ごしてから急速潜航だ！」

「すでに周知させています」

「第一波の波を観測。その高さ五から六メートル」

「意外に低いな」

「それだけ速度が落ちたということですよ」

「まるで意思を持つてるかのように感じられます」

「海中の状況は？」

「現場に無人特殊潜航艇が向かっています」

「これからいったい何が起こるんだ？」

「センサー長！湖面が上昇しています」

「湖への流入海水量に比例して沿岸部の水位がわずかに上がっています」

「あの球体が湖中心部の穴を封鎖した？」

「分かりません。もしそうなら大変なことが起こるかもしれません」

「特殊潜航艇からの映像が入りました」

巨大な丸いものがモニターに映し出される。

「我々はある意味で歴史的な瞬間を目にしているのかもしれない」

「波の状況は？」

「まだ一メートル以上ですが、沿岸に到達した波に打ち消されてやがて消滅するはずで」

「問題は水位の上昇だ。沿岸部の住民に近況避難命令を発動しろ！」

「分かりました」

「大統領を呼び出してくれ」

「すでに大統領は電話の向こうで首を長くしてお待ちです」

「センター長のカーターです。報告が遅れて申し訳ありません」

*

「と言うことはスミス博物館はトリプル・テンの塊となってメキシコ湾湖に落下して元のメキシコ湾を復元したと言うことか？」

月面の生命永遠保持機構本部で報告を受ける徳川に大統領が感服する。

「さすが理事長。そう解釈するのが有識者の見解です」

「分かった。ご苦労だった」

徳川がキヤミに状況を説明する。

「やりましたね」

キヤミが明るく反応する。

「悲しくないのか？」

「何が？」

「どういう手を使ったのかは別として、ある程度の大きさのビルが数百分の一以下の球体になったのだからスミスはもちろん博物館も消滅したはずだ」

「目の上のたんこぶがそれこそ丸くなって消滅したわ」

徳川がキヤミのジョークに満面の笑みを浮かべる。

「キヤミ」

徳川はキヤミを抱きしめようと近づく。キヤミは身体をゆだねると自ら徳川の唇を奪う。徳川の手がキヤミの臀部に回り込んだとき、宇宙ステーションからの緊急連絡が入る。

徳川は仕方なくキヤミからゆっくりと身体を離して不機嫌そうに受話器を持つ。

「理事長。重大な報告があります」

「なんだ？」

「大陸内陸部の巨大湖の水位が急速に下がっています」

「昔砂漠だったところにある湖のことか？」

徳川は事の重大さに気付いていないが、キヤミは徳川が持つ受話器を取り上げるとあるスイッチを押す。音声スピーカーから流れるようになる。キヤミがマイクを持って尋ねる。

「原因は？」

「メキシコ湾湖からの海水の供給が停止したからでしょう」

「大変なことになるわ！」

「元に戻るようになるのか？」

「大統領には？」

「まず理事長に連絡しました。今から大統領に報告します」

*

すでに地球連邦政府機関の誰もが徳川を最高権力者と崇めている。徳川も地球連邦政府の重要機関との直接通信手段を持っている。しかし、徳川の専門は医療だ。専門外のことについてはそれぞれの専門家に任せればいいのにそれがなかなかできない。徳川の気持ちはすでに独裁者モードに入っている。つまりキャミだけが頼りになる。

「元に戻ることと、戻らないことが起きます」

「わかりやすく説明してくれ」

「まず、メキシコ湾湖からの砂漠湖への海水の供給が止まると……」

キャミは目を閉じて説明を始める。

豊かな海水に恵まれた元砂漠の湖の水位が下がると、まず新しい環境に順応した鯨などのほ乳類が死滅する。ほ乳類より順応性が高い魚類も水がなくなれば同じ運命をたどる。もちろん

そのほかの生物や藻をはじめとする水生動植物も死滅したり枯れてしまう。これらの生物の死骸が水がなくなった湖を覆うことになる。

これらの生物を糧にしていた湖畔の人々にも飢餓が迫る。生物の死骸が悪臭を放つと細菌が発生して飢えに苦しむ人間たちを病魔の世界に誘導するだろう。ちやうど海面下降で海が陸地になったときのようなことが再現されることになる。

これ以上の説明は不要だと感じたキヤミが言葉を切つて徳川を見つめる。

「なんと言うことだ」

まだ徳川に余り緊張感がない。キヤミがそんな徳川に危機感を提供する。

「内陸部の湖周辺に住む人たちに救いの手を差し延べなければ理事長のこれまでの努力が水の泡になるかもしれない」

「どういうことだ！」

「もし私の想像どおりになれば全人口の二、三十数パーセントの人間が死にます」

「？」

「この地域の人たちはまだ生命永遠保持手術を受けていません！」

「うっ？」

「海が元に戻るまで時間がかかります。一方、穀倉地帯の内陸部の湖が消滅すると砂漠化して穀物はもちろんのこと魚も捕れなくなります」

「今まで以上に食糧事情が悪くなる」

徳川が鎮くとキャミが続ける。

「優先してこの人たちに手術を施せば理事長はさらに神として崇められます」

「すぐさま実行しよう」

徳川は大統領直通電話の受話器を取るとまるで自分が発案したような口調で伝える。

「内陸部の湖周辺に住む人間を最寄りの生命永遠保持機構に入院させろ」

ノロの思惑どおり生命永遠保持手術が公平に、と言うよりは困った人々を優先して施されることになる。

21 永久元年

各地方の生命保持機構も整備されて医師の教育が行き届いたころ、生命永遠保持手術がいよいよ普及の時期を迎える。

地球連邦政府の議事堂では徳川が満面の笑みを浮かべて演説をする。

「……地球は生まれ変わって永久に存在することになりました。さて最後にもう一つ提案したいことがあります。暦を『永久』に統一して来年を『永久元年』としてはいかがでしょうか？
以上で私のあいさつを終わります。ありがとうございました」

大きな拍手を受けた徳川は議場に深々と頭を下げたあと議長にも頭を下げる。そして大統領とキャミの間に座る。すると今度は大統領が立ち上がって議長を見つめる。

「議長。ただ今の生命永遠保持機構の理事長提案を指示します。議事進行を！」

「分かりました。緊急動議として来年より年号を『永久』に改める件について議論したいと思います」

各連邦政府の首脳が一斉に拍手を送る。反対する者はひとりもいなかった。

「意見を承る必要はないようですね。では採決に移ります。手元の投票スイッチを押してください」

議長席後ろの大型モニターに「一〇〇%」という数字が現れる。今度は歓声が上がる。徳川とキヤミが立ち上がると深く礼をしたあと徳川が両手を大きく挙げて振る。和やかな雰囲気の中、席に戻る。

「それでは次の議題……というよりは本来の議題に移ります」

先ほどまでの余韻が消えて静粛な空気が流れる。

「随分前に国連から引き継いだ地球連邦政府の建物はかなり老朽化しています。非公式ではありますが、以前アフリカに遷都する案がありました。この件について大統領に説明を求めます」

大統領が立ち上がると演台に向かう。一礼してから切り出す。

「このまま使い続けるとおっしゃる方は皆無と存じておりますので、この老朽化した建物の現状についての説明は省略します。ところでひと月前にトリプル・テンの塊と化したスミス博物館がメキシコ湾湖の中心部に落下して底にある穴を塞ぎました。海面上昇が始まりましたが、それ以上に深刻なのは内陸部の湖面降下です」

どの連邦政府の首脳も頷く。まさしくこの事態をどうするのかということが集まったのだ。

「なんとか湖面下降をくい止める必要があります。幸いメキシコ湾に近いニューヨークにはこの原因となったスミス博物館やその周辺のビルが消滅して広大な更地が生まれました」

大統領の演説が続くが、アフリカの連邦諸国の首脳に緊張感が走る。

*

「約束が違う！」

アフリカの連邦諸国の首脳たちがブーイングを発する。

「非公式ではなかった。そのときの大統領だったチェンが約束してくれた。もちろん他の連邦国家も賛成した」

直ちに中国の首脳が同調する。

「我が国出身のチェンが約束した。アフリカへの遷都を支持する」

続いてロシアの首脳が手を上げる。

「もしアフリカ遷都を反故にするのなら、白紙に戻して議論すべきだ。我がロシアはモスクワに新しい地球連邦政府を誘致したい」

ユーロ諸国も黙ってはいない。しかし、ここで議長が木槌で机を叩く。

「まだ、大統領の趣旨説明の途中です。静粛に！」

しばらく無視されていた大統領が不愉快そうな声を出す。

「私の説明はここで打ち切ります。オブザーバーの徳川理事長に有識者としての意見を伺いた

2 1 永久元年

いと思います。どうでしょうか？議長」

「許可します」

大統領に代わって徳川が演台に立つ。

「端的に申し上げます」

一礼してから鋭い視線を中国、ロシア、そしてアフリカ諸国の首脳に向ける。

「すでに承知されているかと思いますが、生命永遠保持手術にはトリプル・テンが不可欠です。必要量は確保しています。それはさておき、私にはなぜスミス博物館がトリプル・テンの塊になってメキシコ湾湖の穴を塞いだのかということについては何も分かりません。しかし、元大砂漠だった内陸部の巨大な湖の水面が急速に下がっています。原因はメキシコ湾湖からの海水の供給が止まったからです」

そんなことは承知済みだという表情をする首脳たちが次の言葉を待つ。

「いまや穀倉地帯となり海の幸にも恵まれた内陸部の湖が消滅すると地球の食糧事情が一変します。今まで以上に生命永遠保持手術を加速させて湖畔の住民に施します。しかし、永遠の命を手に入れても飢餓には勝てません。なんとしてもメキシコ湾湖に栓をしたトリプル・テンを除去しなければなりません。そのためには引き続きニューヨークに最新の設備を持つ地球連邦政府を建設する必要があると思うのです。それにスミス博物館の跡地を詳しく調査する必要があります。私の考えは以上です」

「貴重なご意見、ありがとうございました。さて……」

議長が議場を見渡すが静まりかえっている。徳川に逆らえるはずなのに拙速にも発言した首脳の顔面は蒼白となる。特にまだ生命永遠保持手術を受けていない首脳は青ざめる。

「……それでは皆さんの意見を聞きましょう」

しかし、発言する者はいない。もちろんアフリカの首脳たちも黙って議長を見つめる。

「大統領の提案、つまりスミス博物館跡地に新しい地球連邦政府を建設することの賛否の採決を取りたいと思います」

議長が一呼吸置いてから採決を宣言する。

「それでは『スミス博物館及び瓦礫と化した周辺のビル跡地に地球連邦政府の新庁舎を建設する』という大統領提案の採決をします」

議長はもう一度議場を見渡す。

「投票スイッチを押してください」

棄権票がわずかにあつたが、賛成多数で可決された。議場にはなんとも言えないけだるい空気が流れる。

一方、控え目な笑みを浮かべる徳川にキャミが連れ添って退席する。

*

徳川とキャミが月面の生命永遠保持機構本部に戻るため地球連邦政府敷地内で待機していた

空間移動装置に向かうと操縦士が慌てて近づいてくる。

「第五生命永遠保持機構の様子がおかしいという報告がありました」

「なに！なぜ早く知らせなかった」

叱責しようとする徳川と操縦士との間にキヤミが割って入る。

「操縦士は議事堂に入ることにはできないわ」

しぶしぶ徳川が納得すると操縦士が言葉が続ける。

「第五生命永遠保持機構の専務理事が至急理事長にお会いしたいと。どうされますか？」

「こちらから出向きましょう」

有無を言わずにキヤミが徳川の腕を取る。三人が空間移動装置に乗り込むとドアが閉まる。回転が始まるとフツと消える。

「到着しました」

三人がシートベルトを外すとドアが跳ね上がる。空間移動装置は真夜中の第五生命永遠保持機構の屋上に到着していた。小高い丘にある高層の第五生命永遠保持機構からは御陵全体を見下ろすことができる。その御陵がうつすらと黄色に輝いている。

「専務理事に屋上へ来るよう伝えなさい」

キヤミが操縦士に指示する。操縦士が携帯通信機で連絡を取ると徳川やキヤミにも聞こえる大きな声が聞こえてくる。

「すぐ中に入ってください！」

屋上の一角にあるドアが開くと中から大きな声がする。

「急いで！早く！」

三人はそのドアに向かって走る。中に入るとあるスタッフがドアを閉めてロックする。

「いったいどういうことだ！」

徳川が叫ぶ。

「この階段は狭くて急です。気をつけてください」

スタッフの案内で暗い階段を降りてエレベーターホールに到着する。待ち受けていた専務理事が一礼すると開き放しのエレベーターに徳川とキヤミを押し込む。

「あの光を浴びると体調が悪くなります」

ドアが閉まるとエレベーターが下降する。

「放射線か！」

「いえ！でも正体は不明です」

ドアが開くと眩しい。目が慣れていないのだ。専務理事室に入ると白衣を着たひとりの女性が近づいてくる。すかさず専務理事が紹介する。

「医師のリンメイです」

一礼しながら近づくリンメイを睨み付けると徳川が大声を出す。

「先に説明をしろ」

キャミがこわばるリンメイに近づいてから振り向いて徳川の横の専務理事に尋ねる。

「一刻を争うのですか」

「あの黄色い光線を浴びないようにする以外に緊急性はありません」

「この部屋にいれば安全なの？」

「特殊シールドシャツで外光を遮断している部屋は安全です」

「理事長は地球連邦政府での演説で疲れています。わかりやすい説明をお願いします」

ここで性急だった徳川が落ち着きを取り戻す。しかし、キャミは徳川に発言させないように先回りする。

「リンメイ。久しぶりね？ところで聞きそびれていたけれどリンメイは中国人？」

応えたのは専務理事だった。

「日本人とのハーフです。彼女の生命永遠保持手術の腕は全生命永遠保持機構内で一、二位を争うほどです。それにも増して彼女は考古学に精通しています」

ここで専務理事がリンメイを促す。

「御陵からの光については調査していますが手がかりはありません。ただ御陵の中に何か得体の知れない強大なモノが存在しているようです。御陵について報告できることはここまです。それより大問題があります。あの黄色い光を浴びた人間は生命永遠保持手術の効果が薄れま

す」

「薄れる？」

「初めは手術に失敗したのかと思いました。術後の検査に引っかかるのです」

「光と関係あるとなぜ言えるのだ！」

「キャミが徳川の腕を取るとソファアに座らせる。誰もが立ったまま会話をしていた。

「恐らく重大なことにリンメイは気付いたのでしよう。じっくりと説明を聞きましよう」

「お気遣いありがとうございます」

「リンメイが軽く会釈して腰掛けると本論に入る。

「私自身、もちろん生命永遠保持手術を受けています。自らの身体を検査しました。結論を申し上げます。手術室には当然窓はありません。御陵からの光は届かないはずで。ところが手術をしている私自身その光を浴びていることが分かりました。そこで特殊シールドシャツをこの建物の窓という窓に設置していただきました」

「専務理事が大きく頷く。徳川が言葉を挟もうとしたときキャミが徳川の横腹を小突く。

「そうすると手術は順調に実施できて再手術した私も生命永遠保持手術の効果を失うことなく手術に邁進できるようになりました。ところが手術を受けた者が退院してこの第五生命永遠保持機構から立ち去ろうとしたとき手術を受ける前の身体に戻ってしまうのです。私自身もそうです。つまりその方々を見送るときに御陵からの光を浴びると永遠の命を持っているはずなの

に有限の身になってしまいます」

そのとき強烈な地震が起こる。大きな横揺れがすると誰もが床に投げ出される。あらゆる物が定位置を失って落下する。専務理事がなんとか立ち上がって窓際に這うように向かう。

天井のスピーカーから警報とともに最大級の警告が発せられる。

「地震発生！地震発生！」

「専務！シャッターを開けてはなりません」

リンメイが仰向けになりながらも制する。そして叫ぶ。

「御陵の、御陵の主が起き上がった？！」

*

急に雨粒が窓ガラスを叩く音がする。生やさしい音ではない。窓が割れても不思議ではないほどの大きな音がする。たまらず徳川が叫ぶ。

「シャッターを上げろ！」

「危険です」

リンメイが必死に制するが、徳川が専務理事に迫る。

「上げろ！」

専務理事が窓際のスイッチを押す。シャッターは窓の内側に設置されている。上部の格納部にシャッターが収納される。

しかし、すでに夜が明けているはずなのに外は真っ暗だ。雨が窓ガラスにぶつかる音が何倍にもなる。ガラスには自分たちの姿が映っているだけ。

「照明を落として」

キヤミがリンメイに指示する。室内が暗くなるが目の前に見えるはずの御陵は見えない。分厚くて低い雲に覆われているようだ。それに激しい雨だ。いくら近いといっても見える訳がない。それでもかろうじて御陵の上あたりに巨大な何かが見えるような気がする。

急に黄色とピンクの光線が交錯する。暗闇から発せられた強烈な光に全員視力を失う。リンメイが専務理事を押しつけてスイッチを押す。シャッターが降りる音がする。

やっと視力が戻ってきたころ、専務理事が部屋の明かりを点けようとする。

「少し眩しくなります」

全員再び目を閉じる。そして薄目で周りを伺う。

「いったい何が起こったんだ」

徳川が弱々しく尋ねる。そのとき始業を知らせるチャイムが鳴ると専務理事の机の上のインターフォンから音声がする。

「専務。朝礼の時間です」

「朝礼?!」

壁時計を見ると朝の八時を指している。今度はリンメイを押しつけて専務理事がシャッター

のスイッチを押す。シャッターが上がると目の前には朝日を浴びた御陵が見える。いつもの光景だ。

「私たち夢を見ていたの？」

キヤミが眩しそうに御陵を見つめるとリンメイが首を横に振る。

「この現象、今回で二度目です」

「前にもあったの？」

今度は首を縦に振る。

「だから報告しました」

「詳しく説明しろ」

徳川が怒鳴る。

「報告しようとしたら、そのものずばりの現象が起こりました」

「説明になっていない！」

「説明はできません。今起こったことを報告するだけでした。なぜこんなことが起こるのか、

まったく分かりません。分かっていることはあの黄色い光が現れると生命永遠保持手術が失敗

する……」

「その原因は？」

徳川がいらだつと専務理事が弱々しい声で応じる。

「それで理事長にお越しいただいたのです」

「何をぐずぐずしている。早く調査しろ！」

「どのように……」

専務理事が恐縮しながら尋ねようとするが、先に徳川の平手が飛ぶ。

「それを考えるのがおまえの仕事だ！」

*

御陵周辺の住宅街にいつもと変わらない朝が訪れる。エアカーに乗って会社に向かう者、ランドセルを背負って小学校に向かう子供たち……。あんなに雨が降ったのに水たまりはなく道路は乾いている。そして高架上をリニア通勤列車が疾走している。

「いったい昨日の……いえ、あれは昨日じゃなくていつの出来事？」

キャミがリンメイに尋ねる。

「まったく同じことが二度起こったことは確かです。でも痕跡は何も残っていません。でも生命永遠保持手術に影響を与えたことだけは……敢えて言えばそれが痕跡かもしれません」

「リンメイ」

キャミがリンメイの肩を軽く叩く。

「犯人というのか、原因は御陵でしょ？」

頷くだけのリンメイにキャミが念を押す。

「とにかく調べなければ」

「御陵は立入禁止です」

リンメイの言葉に何かを思い出したように徳川が発言する。

「遺跡に板状のトリプル・テンが存在している可能性が高いという情報を受けたとき、他の連邦国家もそうだったが、日本は御陵、いわゆる古墳の発掘をかたくなに拒否した。ストーンヘンジなどこの御陵と比べればちっぽけな遺跡だ。それでも何十枚という板状のトリプル・テンがあった。そのトリプル・テンが嵐を呼んで大変な目に遭った。この巨大な御陵なら……」

ここで考古学者としてのリンメイが発言する。

「確かにこの御陵には何万基、いえ何十万基の埴輪が存在しています。でもトリプル・テンが存在するという確証はありません」

「それじゃ、埴輪が地震を起こし大雨を降らせて黄色い光線を発したとでも」

ここでリンメイは意を決して徳川に進言する。

「私は……私はこの御陵の下に巨大な埴輪というのか土偶が眠っているのではと思います」

「土偶？」

しかし、リンメイの表情が急に豹変する。まるで夢を見るような、つまり全身から力が抜けていつ倒れてもおかしくないような夢遊病者のような表情をする。

「私には……強大な……遮光器……土偶……」

リンメイがへなへなど倒れかける。慌ててキャミが支える。

「遮光器土偶？」

徳川が首を傾げるとリンメイは氣を失う。一方、誰もが同じように「遮光器土偶？」と呟く。

*

徳川が日本政府に有無を言わずに御陵の発掘許可を得る。一方、すべての御陵を上空から調査する許可も得る。さすがにストーンヘンジで受けた恐怖感から徳川は自ら調査に参加することはなかった。

月面の生命永遠保持機構本部に戻った徳川は理事長室のソファでキャミと満足げにコーヒを飲む。

「もし御陵にトリプル・テンが大量にあるとすれば、メキシコ湾湖底のトリプル・テンを手に入れるより簡単だ」

「もう生命永遠保持手術に必要なトリプル・テンの八十パーセントは確保しているわ。これ以上トリプル・テンを手に入れて何をやるの」

「もはやあの地球はわしのモノだ」

窓から見える青い地球をあごで指す。

「永遠の命を得た今、トリプル・テンを利用してわしはこの宇宙の神になるのだ」

「でも大量のトリプル・テンを手に入れても、トリプル・テンは謎の物質だわ。生命永遠保持

手術以外の利用方法はまったく不明。それにノロも永遠の命を持っているわ」

「なんとかしてノロを服従させなければ」

徳川が立ち上がるとキヤミに近づく。

「キヤミ！おまえは本当にわしに仕える気はあるのか」

「生命永遠保持手術を受けると女はセックスに不感症になります。でもあなたに抱かれると私はとても幸せになります」

キヤミは緩んだ徳川の手をていねいに握ってからゆっくりと振りほどく。そして胸のボタンを順番に外す。そして腰に手を当てるとスカートがスルリと落ちる。

2 1 永久元年

ノロは豊臣自動車工業の工場長に雇われて、もはやアンドロイドではなく自らアンドロイド化したノロはノロの本人の影武者のように行動する。

この見た目には人間に見えるノロはやがてある完成コロニーでアンドロイドの製造を手がける。アンドロイドがアンドロイドを造る。それはノロ本人が目指していたことだ。

失敗して強制労働させられるが、過去のノロの経歴はすでに忘却の彼方にあつたので知識豊富で警戒心を与えないノロはすぐに幹部に抜擢される。

スミスはあらゆる武器を駆使して応戦する。もはやこれまでというときにチェン鈴木とともに宇宙を目指すも三人が乗った時空間移動装置が攻撃を受ける。残念なことにチェンが死亡する。到着したところは完成コロニーで鈴木はフォルダーという名前に変わっていた